

# 証言 連合赤軍

-10-

浅間山荘四十周年シンポジウム

連合赤軍事件の全体像を残す会編

## はしがき

40周年のシンポジウムは約190人の参加を得て充実した討論を行った。

参加者について特筆すべきことは、第三者のホームページやツイッターなどで集会を知った若い世代が多数参加したことである。この点で、関係者とその人脈を中心としたこれまでの集会から大きく進歩した。

若い世代が連合赤軍事件の教訓を継承していくことは、「残す会」の切実な願いであり、その道が開け始めたことは大きな喜びである。

パネリストも若い世代の論客や俳優などを含む幅広い顔ぶれで、議論の広がりに寄与した。集会の後、「次はいつやるの?」「今度はこんなテーマで」など、区切りの年の行事と考えていた私たちを面食らわせる質問もあった。今後も、機会をとらえて同じような集会を企画したい。

翌朝のNHKのニュースで報じられた内容も、事件当時の報道を知る者にとっては、隔世の感の深いものであった。「(40周年を機に)事件がどうして起きたのかを考えようというシンポジウムがきのう都内で開かれました。」という前置きは、この事件を獣奇的で不可解な事件としてではなく、普遍的な意味をもつ事件としてとらえようという視点からのものである。興味深いことは、若い人たちが概してこのようなNHKのスタンスを当然のものとしてとらえていることである。

昨年、日本が67年前の敗戦に次ぐ破局——大震災と引き続く原発事故の惨禍——を経ていることも無関係ではないだろう。それまで当たり前と思っていたこと、抗しようのない現実と思われていたことが覆され、人々は事態に迫られて声を上げ始めた。街頭のデモに出かけることは、もはや特別のことではなくなりつつある。このような世相も、「40年前の破局」から学ぶという人々の志向と無関係ではないだろう。

なお、本誌の編集体制も新たに若い世代のボランティアの参加を得て強化された。より規則的な発行と新しい感覚の誌面を期待していただきたい。

雪野

# 目次

浅間山荘から四十年 当事者が語る連合赤軍参加の呼びかけ	2
パネリストのプロフィール	4
第一部 映像で振りかえる	8
第二部 当事者世代が語る	9
左翼のトラウマ・連赤事件を総括して運動の力に	10
人を内側から捕まえる共同性の原理をいかに超えるか	12
今や保守派も含め日本が連合赤軍化している	16
「総括」をためらいつつも受け入れていく自分がいた	20
「総括」は脱落者を始末する考えが本質にあったのでは	23
死ぬ気でいたから、他人に死を強制するためらいが薄れた	24
武装闘争を支持していたことにこそ責任を感じる	26
当時の行動様式と武装の間には距離があった	27
国際的規模で見たとき、武装闘争には永続性があった	30
新左翼は人間に対する期待度が高すぎる	33
連赤は革命的敗北主義で名を残せなかったのが悔やまれる	36
前段階武装蜂起に具体的なイメージがわからなかった	39
第三部 連合赤軍事件が残したもの	42
後世に教訓を伝えたい	43
連赤事件の本質をまとめることなどできない	45
連赤事件を日本の市民社会に回収する危さ	49
我々の中にもオウム事件のような相互作用があった	53
やはり森・永田にこそ責任があるのか	55
やっぱり、「やめよう」とは言えなかったのか?	59
革命戦争の具体像はあったのか	64
なぜ逃亡せずに山に戻ったのか	69
第四部 若い世代にとっての連合赤軍	73
連赤事件は「言葉」が暴走した事件だったと思う	74
将来、史実として連赤事件が語られるようになる	77
連赤事件が今の「生きづらさ」につながっている	80
植垣さんや鈴木邦男さんは「届く言葉」を持っている	85
本当に社会を変えられるとと思っていたのか?	89
みんな動機は善意からだった	94
殉難者と生き残った人の境界線はなかった	96
皆が善意だと思っていることが本当の悲劇を生む	98
読者から	102
『証言』9号正誤表	107
編集後記	107
『証言』バックナンバーの紹介	108

## シンポジウム

### 浅間山荘から四十年 当事者が語る連合赤軍 参加の呼びかけ

いまから40年前、日本を震撼させた事件がありました。

公安権力は「それ見たことか」とばかりに、一旦掘り出した遺体を埋め戻し、記者の前でまた掘り返すという死者を冒瀆する演出を繰り返しました。週刊誌には、書き手の品性が露わになる読むに堪えない記事が氾濫しました。

しかし、心ある人々は、無私の活動の果てに悲惨な最期を遂げた若者たちを深く悼み、悲しみました。

それから40年たち、遺族の方々は今なお消えることのない悲しみの四十一回忌を迎えました。

40年前の事件は人々の心に深い傷を残し、多くの人々は長い間そのことに触れることを避けてきました。

しかし、この十年ほど、ひとびとはこの事件に再び光を当て、それが何を意味したのかを考えようになってきました。多くの書物が出版され、この事件が新聞・雑誌の記事やテレビ番組で扱われることも多くなりました。映画の「実録・連合赤軍」は海外でいくつもの賞をとりました。また漫画の「レッド」は、文化庁の賞をとり、私たちを驚かせました。また、当時は生まれてもいなかった若い人々が、この事件に興味を持ち、本を読んだり、映画を見ています。

歴史学の分野でも、はじめてこの時代とあの事件を正面から取り上げた学術的大著『1968』が上梓されています。

連合赤軍事件は、その5年ほど前から高揚した若者たちの運動を背景としていました。この大衆運動は、ベトナム戦争とそれが引き起こしたアメリカやヨーロッパの急進的な学生運動の大波に呼応しており、また、ソ連圏で起きたプラハの春などの清新な運動とも連動していました。67年から72年に至る大衆運動は、同世代の何割もの人たちが参加した広がりをもったこと、足掛け5年にもわたる年月の間持続したこと、さらに、全国各地で

さまざまな課題を取り上げたことなどで、現代の日本の民衆運動の歴史の中でも特筆すべき性格のものでした。

しかし、連合赤軍事件の後、この事件とその背景をなした大波のような大衆運動は、急速に退潮していきました。また、この時期からかなり長い期間にわたって陰惨な内ゲバが続き、それによる死者は100人に上るといわれています。

以後数十年、連合赤軍事件は本格的な研究の対象とされることもなく、歴史の中に埋もれていったかのようでした。連合赤軍事件は、決して忘れ去ることはできないがあえて触れようとは思いたくない、のどに刺さった骨のように、人々の意識の底に沈潜していました。

いわば、この事件とその背景をなした数年間は、数十年の間「正史」の外に置かれてきたのです。

昨年、日本の社会は、激しい地震と大津波、引き続いて発生した原発事故の洗礼を受けました。人々は、長い間疑問も持たなかつた日本の社会と文明の成り立ちと、これまでの世の中の仕組みに対して、考え直すことを強いられています。

このような時代に、私たちは連合赤軍事件40周年を迎えました。

この時にあたり、あの事件とあの時代に再び光を当て、それが何を意味していたのか、語り合い、考えてみようではありませんか。

2012年3月1日

全体像を残す会

## パネリストのプロフィール

### 司会

**金廣志**（塾講師） 1951年、大阪府生まれ。都立北園高校で高校生運動に参加し、1970年、赤軍派に加盟。71年に全国指名手配されるも15年間逃亡し、時効を完成させた。85年より塾講師。中学受験のカリスマ講師として著名。父は韓国の済州島四・三蜂起に参加。●著書に『自慢させてくれ！』源草社、『落ちたって、いいじゃん！ 逆転発想にこそ難関中学合格のカギがある』角川書店、他。

**椎野礼仁**（編集者） 1949年、新潟県直江津市生まれ。慶應大学文学部で社学同（社会主義学生同盟）の活動家。●塩見孝也『監獄記』（オーラ出版）、雨宮処凜『雨宮処凜のオールにーとニッポン』（祥伝社新書）、鈴木邦男『遺魂—三島由紀夫と野村秀介の軌跡』等の編集。著書に『連合赤軍事件を読む年表』『パンタとレイニンの反戦放浪記』（ともに彩流社）。

### 第二部 当事者世代が語る

**塩見孝也**（元赤軍派議長） 1941年、広島県尾道市生まれ。京大文学部時代に赤軍派を結成、議長となる。70年に爆発物取締法、よど号事件の共謀共同正犯、破防法等で逮捕起訴され、懲役18年の判決。20年の獄中生活を経て、89年出所後は、「ぱとり・自主日本の会」を結成したり、九条改憲阻止の会に関わるなど。「経産省前テントひろば」にも参加。●著書『赤軍派始末記—元議長が語る40年』彩流社、『いま語つておくべきこと—対談 革命的左翼運動の総括 現代資本主義論と社会主義論』新泉社など多数。

**三上治**（元叛旗派指導者） 1941年、三重県四日市市生まれ。中央大学法学部時代に60年安保を闘う。70年安保闘争のときは、神津陽と共にブントから叛旗派を分派。75年に叛旗派を退き執筆活動、講演活動などに専念。校正の会社を立ち上げ社長を務めたことも。「経産省前テントひろば」の中心メンバー。●著書『憲法の核心は権力の問題で

ある—九条改憲阻止に向けて』御茶の水書房、『1960年代論』批評社ほか。

**鈴木邦男**（一水会顧問） 1943年、福島県郡山市生まれ。生長の家の活動を経て、早稲田大学政経学部時代に生長の家学生会全国総連合、民族派学生組織「全国学生自治体連絡協議会」（全国学協）の初代委員長。三島事件で学生時代にオルグした森田必勝の自決に衝撃を受け、一水会を結成。近年はアナキストを自称。河合塾講師や文化放送のコメントーターも務める。●著書『竹中労』河出ブックス、『失敗の愛国心』（よりみちパン！セシリーズ）、『新・言論の覚悟』創出版、『愛國者は信用できるか』講談社現代新書など。

### 第三部 連合赤軍事件が残したもの

**森達也**（作家、映像作家） 1956年、広島県呉市生まれ。立教大学法学部卒業後、自主映画制作、テレビ番組制作会社などを経てフリーに。オウム真理教を内部から記録した映像作品『A』（98年）、『A 2』（2001年）が高い評価を得る。旺盛な作家活動でも知られ、ジャンルも多彩。昨年は『A 3』（集英社インターナショナル）で講談社ノンフィクション賞を受賞。今年は映画『311』を綿井健陽、松林要樹、安岡卓治と共同監督。●著書『死刑』（朝日出版社）、『下山事件』新潮社、『世界が完全に思考停止する前に』角川書店など。

**田原牧**（東京新聞） 1962年生まれ。麻布高校時代に高校生運動に参加。明治大学政経学部入学。ジャーナリストとして湾岸戦争、ルワンダ内戦などを取材。95年にカイロ・アメリカン大学留学。87年、中日新聞入社。特報部デスク。●著書『中東民衆革命の真実』集英社新書、『ほっとけよ。一自己決定が世界を変える』ユビキタ・スタジオ、『ネオコンとは何か—アメリカ新保守主義派の野望』世界書院など多数。

**大津卓滋**（弁護士） 1949年、福岡県飯塚市生まれ。横浜国立大学時代に学生運動に参加。弁護士として、連合赤軍事件で植垣康博の弁護人、よど号ハイジャック事件関連で柴田康弘、田中義三の弁護を担当した。

## 第四部 若い世代にとっての連合赤軍

**雨宮処凜**（作家） 1975年、北海道滝川市生まれ。いじめ、リストカット、バンギャ等の生きづらい体験を経て右翼団体に参加。かたわらパンクロックのバンドでボーカルをつとめ、ミニスカ右翼の異名をとる。新左翼から一水会に転向した見沢知廉（後に作家）に会い文筆活動に。北朝鮮やフセイン政権下のイラクへも数回渡航。プレカリアート問題、高円寺素人の乱、反原発など社会問題にも関与。社会への違和の表現としてゴスロリのファッショニズムを愛用する。週刊金曜日の編集委員、ビッグイシューの相談役も務める。●著書『「生きる」ために反撃するぞ！労働＆生存で困った時のバイブル』筑摩書房、『排除の空気に唾を吐け』講談社現代新書、『なにもない旅なにもしない旅』知恵の森文庫ほか。

**山本直樹**（漫画家） 1960年、北海道福島町生まれ。早稲田大学教育学部在学中に小池一夫の主催する「劇画村塾」でマンガ修行。エロマンガ家としてデビュー。過激な描写と大胆なコマ割り、豊かなストーリーテリングが衝撃を与える。1991年、『Blue』（光文社）が東京都条例で有害コミック初指定を受けるが、2010年には『レッド』（講談社）で第14回文化庁メディア芸術祭マンガ部門優秀賞を受賞。同作品は、連合赤軍事件を克明に追うもの。講談社のイブニング誌で隔号連載して6年たつが、まだ山の中。●著書『ビリーバーズ』復刊ドットコム、『ありがとう』小学館、『堀田』太田出版、『あさって Dance』弓立社など。

**ウダタカキ**（俳優） 1978年、東京生まれ。明治学院大学卒業後、アップスアカデミーにて奈良橋陽子に師事。05年から小劇場の舞台に立つ。映画、テレビにも進出。08年、「実録・連合赤軍 あさま山荘への道程」（若松孝二監督）に吉野雅邦役で出演。これに先立って、獄中の吉野に手紙を送り面会を求めたが、「役の上でもう会っているよ」と返事がきた。

**小林哲夫**（教育ジャーナリスト） 1960年、神奈川県生まれ。95年より、『大学ランキング』（朝日新聞出版）の編集に携わる。高校時代に学生運動に関わった経験が、70年当時の高校生運動の精緻な記録『高校紛争』（中公新書）に結実。現在、新左翼テーマの著作を取材中。●著書『飛び入学』日本経済新聞社、『理系就職・転職白書』丸善、『ニッポンの大学』講談社現代新書ほか。

**赤岩友香**（週刊金曜日編集部） 1981年、東京生まれ。立教大学社会学部卒業後、NTTコムウェアを経て週刊金曜日に。同誌の今年2月17日号では、「あさま山荘事件から40年“みんな”で行なう革命は失敗する」を担当。当シンポジウムパネラーの植垣康博、鈴木邦男さん、金廣志を仕切った。

## 連合赤軍当事者

**植垣康博**（スナックバロン経営） 1949年、静岡県金谷町生まれ。弘前大学理学部のとき、民青シンパを経て赤軍派の活動に。連合赤軍としては、M作戦の成功などで実務家として頭角を現す。72年、雪の妙義山中を脱出するも、軽井沢駅で青砥幹夫ら4人と逮捕され、27年間の獄中生活を送る。

**青砥幹夫**（会社員） 1949年、福島県白河市生まれ。弘前大学医学部のとき、赤軍派に参加。連合赤軍では、山での総括を体験。連赤メンバー9人で妙義山中を逃れ、様子を見にいった軽井沢駅で逮捕。23年を獄中に過ごす。今まで表だった席には出なかったが、今回、当シンポジウムに参加。

**雪野建作**（IT系会社役員） 1947年、東京生まれ。横浜国立大学工学部で革命左派に参加。名古屋の組織化等を経て、1971年、栃木県真岡市の銃砲店を襲い猟銃や銃砲を強奪。6か月後に逮捕。そのため、山の総括に関わることはなかった。10年の獄中生活の後、環境情報誌の出版などを経て現職。

**前澤虎義**（塗装会社現場チーフ） 1947年、東京生まれ。蔵前工業高校を経て、大田区の三国工業で坂口弘に誘われ、革命左派に参加。山の中の総括は、まったく意味がわからなかった。浅間山荘の銃撃戦前に逃亡したが、1か月後に警察に出頭。15年の実刑判決。

# 浅間山荘から四十年 当事者が語る連合赤軍

## 第一部 映像でふりかえる

企画・制作／馬込伸吾  
監修／金廣志

**司会（雪野）** それでは、ただいまより、シンポジウム「浅間山荘から40年 当事者が語る連合赤軍」を開催します。

私どもは2月に追悼会を開催いたしました。この時はあくまでも追悼だということで、事件そのものの意義ですとか、今、それを振り返ってどういうことを考えるか、といった議論はあまり展開しない形で追悼的に絞って開催いたしました。

ただ、何分もう40年も経っておりますし、今の時点で当時のことで、もっともっと話さなきゃいけないのではないかということで、追悼会とは別に本日のシンポジウムを開催することになりました。

今日はお手元のプログラムにありますように、まず映像で振り返るということで、約20分ほど、新しく今回のため作成した映像をまず放映いたします。

その後、「当事者世代が語る」「連合赤軍が残したもの」「若い世代にとっての連合赤軍」という形で進行してまいります。

申し遅れましたが、私、本日の総合司会をやらせていただきます雪野と申します。

それでは第一部の「映像でふりかえる」をこれから上映します。

(当日は映像を上映)

以下、写真は全て馬込伸吾 (C)2012



## 第二部 当事者世代が語る

パネリスト／塩見孝也、鈴木邦男、三上治

**司会（金）** 今日は皆さま、よくお越しくださいました。第二部として、「当事者世代が語る」というテーマでシンポジウムを行いたいと思います。まず、壇上にいる人々を紹介したいと思います。私は、本日、司会を務めさせていただきます、元共産主義者同盟赤軍派<sup>(注1)</sup>に所属していました、金廣志といいます。

**司会（椎野）** サブで司会を務めます、椎野礼仁と申します。社会主義学生同盟<sup>(注2)</sup>、社学同の、後に戦旗派<sup>(注3)</sup>のほうに行きます。三上さんの叛旗派<sup>(注4)</sup>とか塩見さんの赤軍派とかと袂を分かったほうの、戦旗派のほうに所属することになりました。

**司会（金）** それでは、皆さまから向かって右側のほうから紹介していくたいと思います。今日は、先ほどの映像にもありましたけれども、いわゆる連合赤軍メンバーといわれていた方が3名来られています。まず、一番右側、青砥幹夫さんです。弘前大医学部時代から運動に入って、最後、連合赤軍メンバーとして獄中23年間の生活を送りました。公の場に出てこういう発言をするのはほとんど初めてではないかと思います。

その隣ですけれども、植垣康博君です。先ほど写真で非常にイケメンで男前の顔が写っていましたが、今は見るも無残な哀れな姿ですけれども、連合赤軍メンバーとして27年間の獄中生活を送っています。現在は、静岡県でスナック・バーを経営しております。

その隣です。前澤虎義さんです。革命左派<sup>(注5)</sup>に所属して、連合赤軍

(注1) 1966年に再建された共産主義者同盟（二次ブント）から69年に分派した左派組織。塩見孝也議長。世界党一世界赤軍一世界革命戦争を掲げていた。

(注2) 共産主義者同盟傘下の学生組織。

(注3) 共産主義者同盟戦旗派。1966年に再建された共産主義者同盟から、69年に赤軍派が、70年に叛旗派・情況派が分裂し、神奈川左派、仏派、関西派なども分裂し、残った「主流派」が戦旗派。更に戦旗派自身が二派に別れ、指導者の名前から日向派、西田派と呼ばれた。

(注4) 共産主義者同盟叛旗派。1970年6月に三上治の指導の下にブントから分派、三多摩地区委員会、中央大学を拠点とした。

(注5) 日本共産党革命左派（神奈川県常任委員会）1969年4月に「階級闘争の烈火の中で党建設を」と、日本共産党左派（神奈川県委員会）から分裂して結成。

メンバーとして15年の実刑判決を受けて、満期で出所しました。

その隣、やはり元革命左派の雪野建作さんです。雪野さんは、栃木県の真岡市の銃砲店を襲ったときのメンバーです。そのときのことと約10年ですかね。10年ほどやはり獄中生活をしております。

それでは、そちらから見て左端のほうからご紹介させていただきます。一番左端は、皆さん、よくご存じだと思うんですけども、元赤軍派議長、塩見孝也さんです。現在は、駐車場管理人という職業も持っております。今日はいろいろ楽しいお話を伺えるかなと思います。

その隣は、やはり皆さんよくご存じの鈴木邦男さんです。右翼活動家として全国学生自治体連絡協議会<sup>(注6)</sup>、全国学協の初代委員長をお務めになられました。最近は、転向して左派系の運動家になっているといううわさもありますけれども、本人は民族派だと言っております。

その隣ですけれども、三上治さんです。いわゆる共産主義者同盟<sup>(注7)</sup>、ブントといいますが、ブントは1969年に大きく分裂したんですけども、そのときの共産主義者同盟叛旗派の指導者としてご活躍なされました。世間では塩見さんを左派、三上さんを右派というような言い方をするような意見もありましたけれども、どちらかがより過激な闘争をやっているかどうかだけで判断されていたように思います。

このシンポジウムの進行ですけれども、まず初めに、パネリストに約5分以内で現在パネリストが抱えているいろいろな問題意識、あるいは、このシンポジウムに向けて議論したいこと、そのようなことを5分程度語っていただきたい、それに対して当事者がその意見にいろいろ答えていくという形式にしたいと思います。

ということで、塩見さんからお話を伺いたいんですけども、塩見さんが今抱えているテーマ、あるいは問題意識について5分程度お話しitなければと思います。

## 左翼のトラウマ・連赤事件を総括して運動の力に

**塩見** 皆さん、こんにちは。塩見です。私のテーマと言われたんですけども、一つは、このパネルディスカッションを組織された主催者に感謝するということと、もう一つは、ここへ4人の当事者の方がいらっしゃ

(注6) 全学連に対抗して、右側から作られた各大学「学生協議会」の全国組織として1969年5月に結成。「生長の家」学生部分も参加。初代委員長が鈴木邦男。

(注7) 1960年に安保闘争の総括を巡って分裂解体した共産主義者同盟（一次ブント）を、66年に関西ブント、独立社学同、ML派、マル戦派等で再建した（二次ブント）。

るわけですけれども、私はこれまで、いわば赤軍派の5名、そして革左の7名の立場に立つてものを考えているというふうに思っていましたが、ある面では、生き残った人々についてはしっかり考えていなかった、その人の苦しみを考えていなかったと思っていたのですけれども、今は、亡くなったり人々の分までしっかり生きて、そして、正しく闘っていってほしいという気持ちであります。そういう形で討論ができればと思っております。

僕がテーマを出すとするならば、もちろん当然にも、何故あのような同志殺しというか、リンチ殺人というのが起きたのかについての具体的な経過の調査・分析から、その基本的な原因は何かということが一点です。これについて私は、意見の違う、世界観の違う党派が野合して、それでもって、新党をつくることにおいて新党反対派や、新党がつくられる過程での機関を作るという意味で森・永田体制を強化するということのために排除されていった人々が肅清されたというふうに思っております。この根底には、やはり中国を経由したところの、基本的には1930年代のスターリン主義の問題についてしっかりした態度を取っていたなかつたと、あれを革命とかプロレタリア独裁<sup>(注8)</sup>と思い込んでいるような左翼の状況があったというふうに思っていて、スターリン主義<sup>(注9)</sup>の批判というものをしなければならないというふうに思っています。スターリン主義は、もう過去のことだとおっしゃいますけれども、これから的情勢の中でもう一度よみがえってくる危険性のある問題であるというふうに考えます。

二番目には、ブントと赤軍派と革命左派についてどういう違いがあったのかということについて、副次的なテーマですけれども、二番目としたいと思っております。

三番目は、あの連赤事件が起こって以降、日本の情勢は、中国の演出というか、政治的結託というような状況があったわけですけれども、連合赤軍事件は、いわば闘う左翼のトラウマというような形でへばり付いていて、そのことを解明せずしては闘えないという状況がそれから20年間続いていたというふうに考えます。その20年間の過程で、左翼

(注8) 人類史を階級闘争の歴史（貴族・農奴、武士・農民、資本家・労働者）と捉え、人類史最後の段階として労働者階級＝プロレタリアの独裁で階級闘争の歴史が終わりを告げる、という共産主義の考え方。

(注9) 1917年のロシア革命においてレーニンの死後、スターリンによって推し進められた一国社会主义建設路線。党独裁・個人崇拜、対立者の肅清等として批判される。



が貫徹していく中で左翼がどう生き延びてきて、そして何を信義にして闘ってきたのか、そして現在どう至っているのか。このときにいろいろな留保をしながら生命と命と人権、あるいは幸福を追求する権利とか、反戦・平和・民主主義、あるいは環境、より良き生活といった、我々が最後の最後でどうしても守らなければならないことについて、これは譲れないということだけをこの市民社会の成熟の段階で守り抜きながら生き抜き、闘い抜いてきて、そして、その中で今は反原発闘争などの形で基本的な前進を遂げているのですけれども、にもかかわらず、この運動が未だトラウマを抱えていると。そういう意味で連合赤軍事件をしっかりと私たちは総括して、その総括が力になっていかなければならぬというふうに思っています。

そういう意味で、私の結論は、今の戦いの前進というのを非常に喜ばしく思い、本質的な意味で正しいと思っているわけですけれども、これにやはり資本主義批判、プロレタリア独裁という問題を、ヒューマンで民主主義的な形で実現していくような思考が加わっていく必要があるというふうに考えております。

その辺のことについては、皆さんと共に、あるいは、パネラーと共に討議していきたいというふうに考えております。以上です。

**司会（金）** 塩見さん、ありがとうございました。次に、三上治さんに問題提起をしていただきたいと思います。よろしくお願ひします。

人を内側から捕まえる共同性の原理をいかに超えるか

**三上** 三上といいます。当時、赤軍派と一番対立していたグループでした、1970年ですね、あの事件の後、塩見さんを中大に監禁したこと

はいわば二つの安保闘争で日本的な形の市民社会が——市民社会というのはブルジョア社会ですけれども——成立して、憲法を軸にするような市民社会が成立したと。そういう意味では、すきも漏らさぬような資本の支配

あるんです。当時、僕も4月の沖縄闘争の事件<sup>(注10)</sup>で指名手配されていまして、地下に潜って、あるときは塩見さんたちと中央委員会<sup>(注11)</sup>というところで激論していて、しかし、赤軍派といろいろな対立が起こって、監禁して、その後、僕も9月の末にパクられて、1年ぐらい入っていたことがあるんですが、そういう中でどちらかというと、赤軍派、あるいは赤軍派から発生したさまざまな当時の蜂起戦争派といいますか、武闘派といいますか、そういう人たちに対して、割と対立的立場・批判的立場に立っていたことがあります。

ですから、連合赤軍事件が起こったときにも、ある面では、ちょっと外部的に見ている、必然的にそうなってしまったなというような側面で批判できるんですが、もう一方で、ある程度、その前の前段を含めていると、やっぱり時代の共有性とか同時代的なものもあるわけですね。ですから、外部的な意味での批判では、これはちょっといけない、違うんだなど。外部的な批判はしたくない。だから、傍観的な立場の批判も簡単ですけれども、そうでないという、同種性というか時代性を感じている。ですから、ある面で言うと、自分の内部では非常に複雑なというか、矛盾的な感情を抱きながら連合赤軍事件を見てきました。

このことをちょっと別の比喩で言いますと、終戦直後に戦争批判をどうするかということで、作家の田村泰次郎<sup>(注12)</sup>というのがいるんです。『肉体の門』とかいろいろ、戦後、肉体派作家として流行作家になった人ですが、彼は、戦争中に中国大陸で5年間ぐらい兵士として戦争をしていました、戦後に割といい小説を書いているんです。『春婦伝』という小説がありまして、これは『暁の脱走』という日本の映画になっている作品ですが、この中で彼が言っているのは、戦争は悪いと、これは結論的に悪夢みたいなものだというふうには言うんだけれども、戦争の中で人間がどのように振る舞うか、どのように変身するのか、なぜ人間が戦争するのかという、そういう問題を抜きにしてヒューマニズム的な立場、あるいは、傍観的な立場という形で戦争を批判したくはないのだということを書いて、彼は、晩年そこそこの作品を書き始めたところで亡くなってしまうんですけども、よく似た感情だなというふうに思っていました。

(注10) 1969年4.28 沖縄闘争のこと。革共同、革産同の5人に破壊活動防止法が適用された。

(注11) 共産主義者同盟傘下の学生組織。

(注12) 小説家。代表作『肉体の門』『春婦伝』『肉体の悪魔』など。



この問題はどういうところで解いたらいいのか、現在までにつながるのかというと、時間がありませんので簡単に言いますと、一つは、当時の権力に向かうときに我々がどういう立場の、いろいろな立場があると思うんですが、左・右翼とか、でも、いずれにしても、それは政治的土俵の中で理念から行動から一緒にした、ある種の共同的な、意識として共同的な人間としてその世界を振る舞うわけです。その共同的な人間の振る舞い方、在り方、そのことを通して革命を実現していく、あるいは社会の正義を実現していく、あるいは自分の夢を実現していく、あるいは自分のさまざまな理想を実現していく、次の社会のビジョンでもいいわけですが、そういうことを演じるわけですね。

そのときに我々が当時の持っていた、実際上の理念の振る舞いということと、我々が意識していること、例えば集団の中だったら、戦後世代ですから割と民主主義的にやろうとか、割と自由主義的にやろうとか、言ってみれば、反ヒューマニズム的な、あるいは反民主的な、反自由的なことは内部で起こらないだろうということを漠然と前提にしてはいるのですが、でも、実際は、集団の内部で全く違ったことが行われてしまう。

このことの問題は何だったんだろうということを、連合赤軍事件の中ですっと考えてきました。多分、その中にきっとこのことが現代でも一番課題になっているのではないかということになるのが一点ありますて、我々が意思する側というか、我々は自由でありたいとか、民主主義でありたいとか、そういうことをインテリゲンチア<sup>(注13)</sup>ではなくても、一般的に参加するときにそういう漠然とした立場があるわけですね。左翼運動で急進的であるか、緩やかであるかということは別にしてもあると思うんです。そういう近代主義的な意識と言ってもいいんですが、そういう意識で革命や社会や運動や内部の運動の構成をこういうふうに

やっていこうとか、こういうふうに自分と他者との関係を作っていくとかいうふうな形で振る舞うわけですが、实际上、運動がもし本当のところで力を持つていってしまったら、果たして内部で働く論理、我々がそこで共同的に振る舞っている在り方、あるいは、そこの中で我々が使っている論理、我々のエネルギーになっている力の源泉というものは、もっと違ったものであるのではないかと。つまり、それはさっき田村泰次郎で言いましたように、人間を自由にしてしまうようなもの、あるいは、全く人間と違ったふうに振る舞わせてしまうみたいな共同性の原理というやつが、共同的な人間の在り方の原理が振る舞ってしまうのではないか。このことの問題を、運動する側が外から、我々が意思する以前に外から意思させられてしまうというか、自分が捕まえられてしまうという、そういう形で働くないと、本当の意味では政治的な力にならないということがその運動の中にあったのではないかと。

だから、先ほど塩見さんが言ったスターリン主義批判や、あるいは封建主義批判もいいんですが、今までの左翼だと、スターリン批判やそういうものを封建主義だとかという個人とか近代主義批判みたいな形でやってきたことに対して、そうじゃなくて、我々が共同的な在り方として振る舞っている人間の歴史性というのがもっと違った形で我々を、無意識も含めて拘束していて、それはなかなか見えないんですけども、そういう運動の本当の場面、命を懸けたりとか、一番共同的なものが全面的に力を發揮してくるような場面になると、それが出てくるんじゃないかというようなことを、それで、そのことに対して我々が内在的にどのように自覚し、かつ、そのことを普段の運動の中で超えていくという考え方、思想がないと、そのところを超えられなかったのではないか。多分そのところに僕自身はやはり日本の社会をどう作っていくか、社会をどう超えていくのか、あるいはどういう社会を形成できるのかというときに、社会を形づくっている思想として持っている共同意識というやつを、やはり近代主義的な意識、近代的な個人意識や自由や民主主義に依存し過ぎたということのやはり欠陥がそこに現れたのではないか。

そこの中にはもっと我々が伝統とか歴史とか共同性とか、いろいろなものが全部含まれていて、そのこと自体に対して内在的に我々はそれを捕まえて、またそのことをやらなければ力にもならないし、かつ、さまざまな矛盾が生じてくるんだという、内部で生じる矛盾を解決できないのではないかという点を、連合赤軍事件は非常に強く提起したんじゃないか。

(注13) 元はロシア語で知識階級を意味する。単にインテリとも言う。反対語は大衆。

このことは、現代もこれからも継がっていくのではないかというと、今は割と平穏な時代ですから、今みたいな時代だと世の中、大体、自由で民主的でいいよということで距離感を持って、国家や社会に対して関係ないよ、あるいは、ちょっと非民主的だねということで批判できるんですが、本当に國家の問題が我々の前面に出てきて、我々がまた国家の一員として、社会の一員として何かに振る舞わなければならなかつたときには、決してこういう論理だけではやはり参加もできなければ、その場面で振る舞えないのではないか。あるいはまた、そういう場面で我々が振る舞つてしまつたら、違つた形で振る舞いをするのではないかというような問題を、連合赤軍事件がやはり歴史として残してくれたのではないか。

ただ、逆にそのことは、従来の考え方方がそうで、我々自体が、起こっている事柄に対して対象的にならないとどうしてもつかめないので、連合赤軍事件は、多分事実としては解明されていくでしょうけれども、そこで起こった精神的・心理的な展開というものが、まだ謎みたいに残されているんじゃないかな。このことは、まだ現代の課題で、現代の政治運動や社会運動や権力との運動の中で少しでも緊張感のある、本当の意味での闘いの現場に近づいたら必ずもう一回喚起されてくる、解決されないから残っている問題なんだろうなというふうに考えています。

だからこの問題は、僕らもいつの間にか70近くなってしまったので、そんなに先は長くないのかもしれません、僕らが生きている間に解決できるかどうか分かりませんけれども、この問題をやはり歴史の問題として、自分の生きてきた歴史の問題としてきっちり解いていきたいというふうに考えています。以上です。

**司会（金）** 三上さん、ありがとうございます。今、三上さんのお話しになつた内容については、特に当事者にもう一つ深く突っ込んでお話を伺えたらと思います。

それでは、鈴木邦男さん。鈴木邦男さんの右翼体験とか、そういうことも含めてあると思いますけれども、鈴木さんのほうから問題提起をしていただければと思います。

### 今や保守派も含め日本が連合赤軍化している

**鈴木** はい。鈴木邦男です。左翼の人たちの言っていることって、難しくて分からないですね。特に三上さんとか。僕だけ部外者ですみません。

みんな左翼の闘士ばかりなのに、隣で塩見さんに、「おまえは部外者だから気楽でいいな」なんてさっきちょっとと言われましたけれども……。

**司会（金）** 今は仲間じゃないですか。

**鈴木** ああ、そうか。今は仲間ですね。すみません。今、考えるとそもそもかもしれませんけれども、先ほどの映像を見ていても、何か暗いですね。それで、僕が植垣さんと『週間金曜日』で話をしているときに植垣さんがぱろっと言ったんですけれども——あのころはやっぱり、40年前は、評論家だとか、知識人だとか、文化人だとか、連合赤軍問題を語る人にろくなやつはいなかつた。結果的には政府や警察や、そういうサイドの見方に全部洗脳されてしまった。ほら、見ろ、革命や世界や人のためだとか、そんなことを考えるところになるとこういうことになるんだと。だから、そんなことを考えちゃいけないというところに総括させられた。もし、あのときに三島由紀夫(注14) や高橋和巳(注15) が生きていたら、別な方向になつたんだろう——と。ああ、なるほどと思ったんですね。たつた二人ですけれども、その二人がいたら違つたでしょうね。

今考えると、あのときは僕らも、三島由紀夫がいなかつたし、高橋和巳がいなかつたから、「ああ、ひでえ連中だな、仲間殺しをして」と、何でそんなことまでするのかと思いました。でも、今考えると、失敗した革命だから、ああいう形でさらし者にされたんだろうなど。もし、革命が成功していれば、ロシア革命(注16) やキューバ革命(注17) や中華革命(注18) や、また、日本の明治維新のように成功していれば、それ以前にも仲間殺しだとか、同じようなことはいっぱいあったわけですよね。でも、成功した革命の直前だったら、その革命の前にはそういう非常に貴重な、また痛ましい犠牲があったという形でみんなに悼まれる、たた

(注14) 戦後の日本を代表する小説家、劇作家。代表作『金閣寺』『潮騒』『豊饒の海』など。1970年11月25日に、自衛隊市ヶ谷駐屯地でクーデターを促す演説の後、割腹自殺。

(注15) 小説家、中国文学者。『非の器』『邪宗門』『憂鬱なる党派』など。71年『世界革命戦争への飛翔』(三一書房)で赤軍派と対話。

(注16) 1917年に帝政ロシアが打倒され、レーニン等によって成し遂げられた世界初の社会主义革命。

(注17) フィデル・カストロやチェ・ゲバラ等によって1956年からゲリラ戦による革命戦争を展開するとともに農民を含む広範な階層による統一戦線を組織し、59年にバティスタ圧政政権を打倒し社会主义革命を推進した。

(注18) 毛沢東ら中国共産党による1949年の蒋介石の中華民国を倒し中華人民共和国を建てた中国革命のこと。或いは、孫文らによる1911年から12年にかけての清朝を倒し中華民国を建てた辛亥革命のこと。

えられることだったと思います。それが、日本では革命ができなかつたから、ほらみろ、革命なんかやろうとする人間はみんなこうなるんだという形でさらし者にされたんじゃないかと。

それで、本当は僕も連合赤軍事件のときは分からなかつたんですけれども、それから10年、20年たって、いろいろな関係者と話し合ってみると、みんな夢を持って、また運動が楽しかったから、それで善意でもって、当時はみんな革命運動に入っているわけですよね。どこからそれが間違ったのか、それはきちんと検討する必要があるだろうと。

ところが、今は悪い面ばかりが伝わっているんじやないか。かつての革命運動の夢や、愛や、そういったものが一切伝わらないで、悪い面だけが伝わっている。新左翼<sup>(注19)</sup>の連中はこういうことをやつたんだ、ああいうことをやつたんだと、そういう批判するくせに、そういう新左翼の過ちを自分たちも批判しながら繰り返しているんじやないかと思います。例えば、非常に排他的な人たち、また、同一化を求める人たちが非常に多いですね。それは左翼の人たちだけじゃなくて、警察もそうです。また、保守派だと右派だとか言われている人たちもそうです。

数日前に、礼仁さんたちと一緒に「君が代」を拒否して10回も処分された根津さん<sup>(注20)</sup>という人の話を聞いたんですけども、君が代を歌わないだけで停職6カ月から何かされると。僕は、それはひどい話だと思います。僕は、「君が代」も日の丸も好きですけれども、そういうものを拒否しただけでそんなことをする。それで、さらに再発防止委員会みたいなもので呼ばれて、みんなに囲まれて、なぜ「君が代」を歌わないのか、なぜ日本人はみんな歌っているのに、おまえは反対するんだと、みんなで集中砲火を浴びせる。ああ、連合赤軍だなと思いました。だから、保守派も全部今は連合赤軍になっているんです。

それから、新しい教科書を作ろうとか、あるいは北朝鮮の拉致を許さないだとか、そういうこともみんなそうです。異論を許さない、疑問を許さない、すべての人は同じことを考えていくべきだ、日本人なんだから分かるはずだと、そういうことでいっています。

それを、僕は連合赤軍化する日本だというふうに言っていますけれど

(注19) 社会民主主義政党や共産党を旧左翼として、1950年代後半以降にソ連でのスターリン批判やハンガリー事件を契機に、共産党を批判しながら出発した左翼運動のこと。

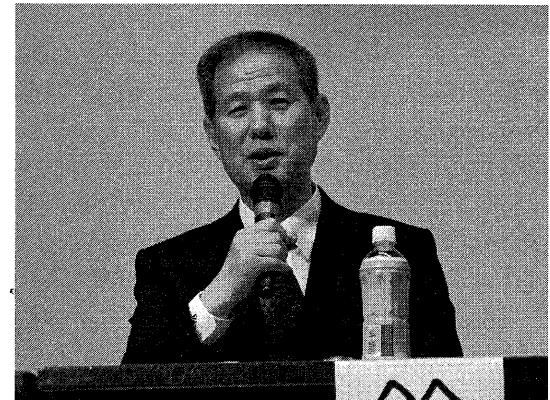
(注20) 根津公子、東京都教員。都教委による「日の丸」「君が代」の強制に反対し、卒業式での「君が代」斉唱時の起立拒否などで処分多数回。

も、それは極端に言つたら、やはり連合赤軍の人たちの、ここにいる皆さん方の責任ですよね。それは、警察やマスコミにも乗じられたということも責任だと思います。

それで、TBSのCSで植垣さんと一緒に連合赤軍の番組に出たんですけども、僕らの前に警察側が出ていたんですね。そこで連合赤軍の連中は一度も謝罪をしてないと。警察官を二人殺していると。それからもう一人、果物を届けに行った民間人も殺していると。まあ、ここにいる人たちはみんな自分たちと関係ないと言うかもしれないけれども、やはり仲間が殺したことから、それはきちんと謝罪すべきだと僕は思います。それで、できたら一緒に追悼会でもやるべきだと思います。その上で、なぜああいう事件が起こったのかをきちんと自分たちで語る。また、自分たちはこういう意思で、こういう夢を持って運動をやつたんだということを、革命運動の楽しさをもっともっと話すべきだと思いますね。そうでないと、今までたっても暗い連合赤軍のイメージを払拭できないのではないかと思います。

そういう意味で、今日は当時の楽しい面や、そういうものも含めてどんどん話してもらいたいし、それから、これからどうやつたらいいのかも含めて語ってもらいたい。今、浅間山荘は中国の人が買って、博物館にすると何か言っていますけれども、それはやはり我々がというか、運動関係者がみんな金を集めて買い戻すべきでしょう。それで、革命博物館にすべきでしょう。それでまた、浅間山荘見学ツアーだと何かやりましょう。それで当時を思い起こして、三島由紀夫や高橋和巳はいなかつたんですけども、我々がそういう気持ちになって、もう一度、あの時代を考える、そういうことをやらなくてはいけないのではないかと思っております。ありがとうございました。

**司会（金）** 鈴木さん、ありがとうございます。最初は5分という話だったんですけども、5分を守っていただけたのは塩見さんだけで、塩見さんが20分かかるのではないかと思ったら、塩見さんが5分で終わり



ましたけれども、ありがとうございます。

今出た話を少しまとめますと、まず、塩見さんは、要するに、連合赤軍問題というのは、革命左派と赤軍派という路線の違う両派が野合して反対派を肅清した、要するにスターリン主義だったんだというような話がありました。そして、連赤事件というのは、現在の闘う左翼のトラウマになっている、これをどこかで乗り越えていかなければならぬのではないかというようなお話があったと思います。

三上さんのほうからは、一つは、共同的な人間の振る舞い方によって権力の形というのは変わるんだということと、共同的な振る舞いと歴史というのは違う、そうすると、それは不断の運動によって超えていかなければならない問題なのではないだろうかというような話があったと思います。私のまとめ方がちょっと下手かもしれませんけれども、今ちょっと手短にいくとそういうことかなと思っています。

それで、鈴木さんのお話なんですけれども、要するに、仲間殺しなんていうのは歴史上いくらでもあったんだと、100年ぐらいたつと新撰組みたいに英雄になるんだと、もっと殺したほうがいいぞと……それはなかったかもしれませんけれども、失敗したためにさらし者にされたと言っていますね。それで、動機は善から始まったんだという話もありました。そして、現在の排他的、あるいは統一的な集団を求める現代の風潮というのが、連合赤軍化する日本、あるいは連合赤軍化する現代社会、要するに連合赤軍の問題自体が現代につながっているんだというような話がありました。そして最後に、要するに謝罪しろということで、青砥さんの謝罪からいきますか(笑)。今、幾つかのお話が出来ましたけれども、塩見さん、三上さん、鈴木さんからお話が出ていますけれども、自分としてはこれにちょっと引っ掛かることがあるかなというところからひとつ、ありませんでしょうか。

### 「総括」をためらいつつも受け入れていく自分がいた

**青砥** 初めに、私はあまりこういった機会に登場することはなかったんですが、その理由は、あの事件の後、私が一番感じていたのは、土壇場で人間として踏みこたえられなかつたなという思いが非常に強かったんですね。その反作用でしょうか、他人の意見とか考え方とか、そういうものに安直に駄目出しをしない、非難をしないということを自分の信条にしてきたことがあります。その中で今回こういった形で出ているのには、またもうちょっとと考えが少しずつ変わってきたところがある

んですが、私が指摘したいのは、森さんの膨大な「自己批判書」<sup>(注21)</sup>の中に山田さん<sup>(注22)</sup>の山の中でのCC会議<sup>(注23)</sup>の会話の一つとして、こういったものが記載されていたように思います。山田さんが、「死は平凡なものであるから、死を突き付けても総括要求にはならんのだ」という発言をしたという記載があります。これは私の頭の中にずっと昔から今もこびりついております。

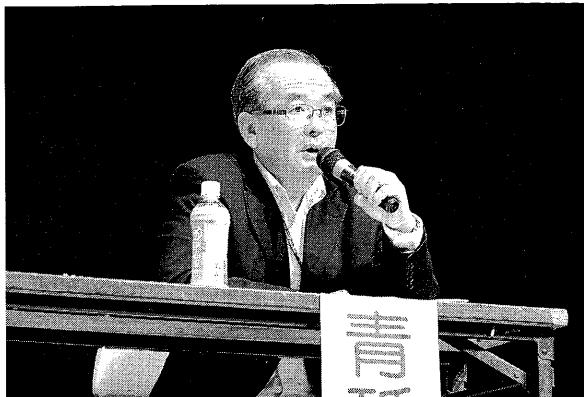
この話は、塩見さんのお話と三上さんのお話と関連すると思うですが、山田さんが「死は平凡なものだから」と言ったのは、別に彼が死を平凡なものだと思っていたということではなくありません。死は個人的なものであり、一回のものですから、特別なものであって、平凡なものであるはずがない。そんなものは、山田さんは先刻承知です。ただ、そういう形でしか実際に進行している総括状況の中で、同志がどんどん殺されていく、そういうものに対する反対の意見を述べることができなかつたから、そういう表現の仕方をしたんだというふうに私は思っております。

むしろ考えなければいけないのは、我々はみんな徴兵されたわけではなくて、ボランティアなわけですね。志願兵です。志願兵ですが、最初から出来上がった志願兵ではなくて、それぞれ革命に、あるいはいろいろな闘いに入っていくときには、それぞれみんな経験を持っているわけです。それは、闘いの中でその経験がどんどん変わっていって、自分を、最終的に私は革命家になろうと思ったわけですが、そのような形に高めていくということになりますけれども、その人たちのグループ、連合赤軍はそういうグループでしたけれども、連合赤軍が、党派の権力という意味ですけれども、その中の人間に対して死を突き付けてもいいんだという状況があったということは確かだと思うんですね。それに対して抵抗する気持ちも当然たくさんありました。ためらいもありましたけれども、一方で共産主義化とか援助のための暴力であるとかいう理屈を受け入れていく自分もあったんです。ためらいと、そういったものを受け入れていく自分がいた。この分裂が、自分は到底、何と言うか、自分が信じられないというか、そういうことになって、そのことをずっと

(注21) 1972年4月から7月にかけ拘留中に書いたもの。森恒夫『銃撃戦と肅清』新泉社所収。

(注22) 山田孝。京都大学出身、赤軍派中央委員、連合赤軍委員。72年2月12日山岳ベースで「総括」死。

(注23) Central Committee 中央委員会ないし中央委員。



あるものではなくて、忍び込んでくるものなんですね。何をしてはいけない、あれをしてはいけない、そういった規律が……陳腐な規律ですよ。好きになった女の子の体に触った、触ってはいけないということです。暴力を受けていくわけですから、これは陳腐な話なんですよ。そんなものがどうして人間の命と等価になっていくのかということが私にはいまだに分からぬ。今までいろいろな革命の中でこういったことはたくさん起こってきたと思いますよ。それが分からない。

それで味岡さんに先ほどの立ち話でお伺いしたんですけれども、こういった問題というのはどうして起こってくるんだという話をいたしました。ですから、味岡さんにはその辺のことを教えていただきたい、あるいは話ををしていただきたい、そのように思っています。

ちょっと中途半端ですけれども、今言えるのはこういったことです。  
**司会（金）** 今、青砥さんのはうから、要するに、事件の渦中にいたわけですけれども、その中で死を突き付けられたという話をしていました。昔の資料で見ますと、自分は山の中で完全に解体されたというような手紙を書いたというような話を伺っています。それで、死を突き付けられた中でためらいながら自分たちは受け入れていったんだと、そして、スターリン主義というのは、外にあることではなくて、そういう中に忍び込んでくるものだと。それについて特に味岡さんと少しお話できればと……。

**司会（椎野）** 味岡さんというのは、三上さんの当時の組織での名前なので。

**司会（金）** ああ、三上治さんと。そういう話がありました。

まだ時間がちょっとありますので、皆さん、どうしても一遍に三つぐ

と考え続けてきたというのがその後の私の40年間だったんです。

それで、塩見さんがおっしゃった、スターリン主義の問題ですけれども、スターリン主義というのは、私の実際の経験から言うと、そこ

らいのことを言いたいというところがあるようですけれども、できれば短く言っていただければと思います。ちょっと飛ばして前澤さん。やはり山の中での体験も含めてあると思うんですけれども、よろしくお願ひします。

「総括」は脱落者を始末する考えが本質にあったのでは

**前澤** 革命左派のほうにいた前澤です。リンチの原因で塩見さんが、野合があったと言うんですけれども、実際には、あそこに行き着く前に組織の思想的な問題が解体していって、一緒になったときは両方とも思想なんてほとんどない組織が現実の方針でくつづいたんです。今、警官を銃撃して倒そうと、その一点で一致して、その前に我々の理論というものは多分放棄されて、これが原因だと思うんですね。それは、まず、うちの組織で言えば、最高指導者だった川島<sup>(注24)</sup>というものが逮捕されて、彼が我々に対する不信なのか、彼個人の理由なのか、よく分からぬけれども、奪還しろと言う。奪還しろと言われてどうやって奪還するんだと。鉄砲を持っていけばいいという簡単な発想で、長期的には我々は武装闘争を始める、それも最終的には銃を持って闘うという思想を当時から漠然とは持っていました。実際、爆弾も使っていました。

だけど、川島を奪還するための鉄砲というのは、要するに単に道具というか、あくまで川島奪還の鉄砲だったんですね。それで、上赤塚交番を襲撃して、柴野<sup>(注25)</sup>という仲間が一人殺されます。そこで今度は、簡単に言えば、復讐心という一つの危険な考えを我々が持ってしまう。実際、武器を真岡で取ったときにそれに対して権力がどう出るか、我々がどう対処していくかという方針がほとんどないまま、敵の弾圧を見て初めて、ああ、もう軍隊になってしまったのかなということで、その後、それを考える間もなく、やっぱり現実的に交番を襲って銃撃戦をやるという形になったときに脱落者が結構次々と出たわけですね。

だから、そういう過程で最終的に脱落者をどうするかという問題を、結局、危ない人間は消してしまおうという、指導部の考えは多分、あの事件の本質はそういうことだったと思うんですね。ただ、口先では共産主義化とかいろいろ、同志の援助だとか言われて、本当かなと思いながらも、それに対して「違

(注24) 川島豪、日本共産党革命左派の最高指導者。1941年生、京都水産大出身、元共産同マル戦派、90年病死、49歳。

(注25) 柴野春彦、横浜国大出身、日本共産党革命左派軍事委員長。70年、12・18赤塚交番襲撃事件で射殺される。24歳。



う」と言い切れなかったからああいう形になったんだろうと僕は思うんですね。だから、既に山に入る前からもう我々は思想的に武装解除を自分でしていって、それであそこへ行ったんじゃないかなと思います。まあ、一つだけ。

**司会（金）** 一つが三つぐらいありましたけれども、基本的には、塩見さんの言ったことに対して前澤さんは答えているんですけども、自分たちは思想で野合したんじゃないんだと、既に思想自体は解体していたんだという話ですね。銃は最初、道具だったけれども、結局それは、銃が物神化(注26)していったということだと思うんですけども、いわゆる当時の総括というのは、そんなに大層な立派なものではなくて、脱落者を始末してしまえという考え方だったようにしか思えないというような内容だったように思います。

実を言うと、残り25分になっているんですけども、では、植垣さんはあちこちでお話しされているでしょうから、1分以内でちょっと問題提起してお答えいただければ。

**死ぬ気でいたから、他人に死を強制するためらいが薄れた**

**植垣** 植垣です、どうも。あちこちいつも出ているので、今日はできるだけほかの方に発言してもらおうと思っていますので。

野合問題というと、僕は本当に率直に言えば、前澤さんの意見は極めて的確だと思います。実際行動をやっている世界にいると、思想問題とかそんなのは考えている暇も余裕もないわけで、そういう中で赤軍派と革命左派が

(注26) マルクスが後期の著作で用いた用語、物神崇拜 (Fetischismus) のことで、物がそれ自体で価値を持っているかのように思い込むこと。また、そこから発展して、人間が物に従属するような状況を指す。

それなりに一緒にやっていくという雰囲気になったのは、経験が同じなもので、その経験に基づいた意識のほうが先行していくというのか、そんなことがやっぱり大きかったと思います。

当時、僕は青砥さんとずっと同じような世界を歩んできたもので、大学まで一緒でして、1年生のときからのお付き合いで、最後まで付き合うはめになるとはとても想像がつきませんでした。

**司会（金）** 彼ら二人は弘前大学で、同級で、医学部と理学部で、同学年ですよね。

**植垣** 本当に1年生のときからの酒飲み友達で、夜中ふらふら歩いている青砥を捕まえて、「おまえ、何やってるんだ」というような調子でやり合っていて……(笑)。それはそれとして、山に入ったとき、暴力的な形の展開になって死者まで出ていると、そういう現実にいきなり直面したときに、僕はものすごい戸惑いを感じましたから、坂東(注27)に「こんなことをやっていいのか」と、そうしたら坂東さんが、「党のためだから仕がないだろう」という言い方をしたわけですね。それで、当時の僕らははっきり言って、党のためとか言われると、そこで思考停止状態に入ってしまうような人間でした。残念ながらそれ以上、物事を考えることはできなかったということが大きかったです。

それから、もう一つは、自分自身が武装闘争の中で死ぬんだという想いでいますから、自分が死ぬということを前提にしていると、他人に対しても死を強制していくということに対してそれほどのちゅうちょ感がなかったという面もあります。特に僕の場合はずっと軍で活動してきましたから。

さらにもう一つ、ちょっと野合問題に戻るんですが、実は連合赤軍の話が出たのは1971年の7月ですか、ところが、僕ら、現場にいる兵隊のほうではそんな話は全然知らなかっただけですね。連合赤軍が結成されたということだけがその後に僕らに伝えられる。だから、連合赤軍が結成されても、僕ら、軍のほうの人間にとってはまるで他人事のような世界でした。

その後、今度は共同軍事訓練を経て新党が結成されるんですが、そのとき僕も青砥も、実はそういう話が展開している場に全然いなかっただけですが、そのときも事後報告でした。だから、すべてが事後報告でやられる世界の中で野合だ何だ言われても、ちょっと僕ら、現場の人間にとってはびんと来ないし、現実に展開している世界は、そういう問題とはもっと違う形で進行しているわけで、そっちの表面的なところでの話よりも、その辺のもっと深い問題を考えたほうがはるかに意味があるんじゃないかなと思っています。

**司会（金）** 今、植垣さんのお話しになられたことは、前澤さんと非常に似

(注27) 坂東國男、京都大学出身、連合赤軍中央委員。浅間山荘で逮捕された後、75年8月4日ケアラルンプール事件で超法規的措置で釈放、国外へ、日本赤軍に合流。



とき坂東に「こんなことをやっていいのか」と言ったときに「党のためだ」と言われることによって、ある意味での個人の主体性を失っていったんだというような話だったと思います。

### 武装闘争を支持していたことにこそ責任を感じる

**司会（金）** もう少し後でフランクに短くいろいろ討論を重ねたいものですから、最後に雪野さん、少しお願いしたいんですけども、雪野さんがたくさんの銃を取ったために多くの死者が出たんですけれども、それに対する反省も含めてちょっとお話しいただければと。あのとき取らなければよかったとか。

**雪野 真岡**で取った銃では多分、死者は出てないと思うんですね。

**司会（金）** ほう（笑）。

**雪野** ただ、その前に私が8月に逮捕される一月ほど前に横浜国大の学生の人からピストルを一つもらって、山に持っていく間、一月ほどバッグに入れて持っていたんです。一度撃ってみたかったんですけども。そのピストルを、浅間山荘で坂口君が田中さん(注28)に発砲して亡くなっています。それで、責任というふうに言われるんですけども、私は銃そのものについての責任ということはあまり感じないんですね。というのは、じゃあ、銃を作ったアメリカのスミス&ウェッソンの社員に責任があるのかと（会場で笑い）。それを日本を持ってきて、フィリピンから、よせばいいのに韓国にまで遊びにいって、それで日本を持ってきた人に責任があるのか。それを私がもらって、最後に逮捕される前に西丹沢のアジトに行って、そこで渡したんですね。じゃあ、私が持ってきたことに責任があるのか。多分、ほとんど感じないです。たまたまそのときに森恒夫などが来していました。弾が皮の袋に入っていたんですが、彼がそれを見て、「この袋が泣かせるな」などと言ったのを覚えているん

(注28) 田中保彦、新潟のスナック店主。浅間山荘事件で人質の身代わりになろうと2月22日玄関前まで行き銃撃され3月1日死亡。

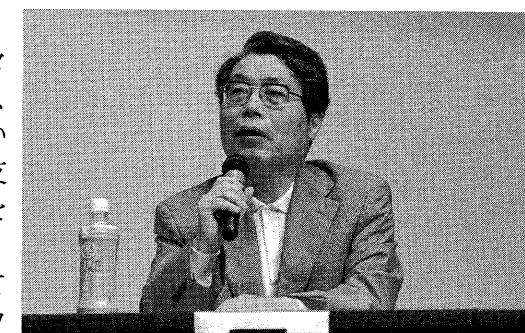
ですけれども。

それよりも、その当時我々がやろうとしていたこと、武装闘争をやろうとしていたその思想、それを私が支持していた、そこに責任を感じます。それで、恐らく警察官はライフルで撃たれているんですけども、ライフルを撃ったことについて責任はというと、これは逆に責任を感じるんですよ。我々は主義として武装闘争を、しかも敵の兵員を殺傷するような闘争をやろうということを言っていました、実際には、私にはもうちょっと違うニュアンスがあったんですけども、それにしてもそういう闘争を支持していましたから、そういう準軍事的な闘争を一部、始めるということについては同意していましたから、それについて責任を感じます。ですから、物を持ってきたとか、それを作ったとか、渡したとか、それよりも責任を感じるのは、当時の我々の政治思想、軍事方針、それに責任を感じます。

**司会（金）** ありがとうございます。今、たくさんいろいろなお話、テーマが出てるんですけども、本当はこれをやると24時間朝まで生テレビぐらいやらないと、それでも切りのない話だと思うんですね。ただ、今ここで出てきている話の中で、塩見さんや三上さんや鈴木さんもいらっしゃるので、少し話題を絞って、最後に雪野さんが、かつて武装闘争を支持していたと、そのことについては非常に責任を感じるというような話が出てきましたけれども、武装闘争ということが実際必要だったかどうかなどの問題もあるかもしれません、なぜそこまでいかなければならなかったのかという問題もあると思うんですね。それについてせっかく塩見さんみたいな人や鈴木さんがいらっしゃるんですから、そのことについてお互いに討論し合っていただければいいかなと思うんですけど、どうでしょうか。まず、武装闘争の必然性があったのかどうかについて三上さんのほうから。短くお願いします。

### 当時の行動様式と武装の間には距離があった

**三上** 当時の運動から言うと、まず、当時の新左翼運動全体のどこに特徴があったかといったら、肉体を懸けるというか、そういう割と肉体的な行動、そこに一つの特徴があったわけですね。この背後には、例えば社会に我々が参加するときにさまざまな社会意識と一般的に言ってもいいと思うんですが、



これは民主主義でも自由でもいいんですが、それが理念としては割とその時代に流通していたり、割と成熟していたんですけども、それとの間に、一種の現実主旨との間に距離というか、脅迫感みたいなものがあって、それを肉体というか、身体というか、身体行動というやつがある面で支えていたというか、これはそういう側面がありまして、当時の新左翼の行動というのも、武装という以前にどこに特徴があったかというと、例えば行動するときに、行動することによって自分の人生がどうなるんだろうかと、親とどういう関係を持っているんだとか、社会はどうなんだということを、自分の中で対話をしているわけですね。自分と自分が行動することによって反響し合っている、対話をし合っているわけですよ。それは、個々人がやっているわけですから、そのことによって初めて、我々が抽象的な社会ではなくて、社会に参加する、社会を実感できるという要素が、当時の行動様式の中にあったわけです。ですから、そのことと、例えばその行動が理念として存在していた武装とか、革命のためには武装が必要だということの間には、やっぱり僕は距離があったんだといふうに思っています。

ですから、そのところは割と僕は冷めていたというか、自覚していました、**ゲバ棒**<sup>(注29)</sup> 講争もいろいろな講争も、その運動が持つ武装講争が、現実に可能な効果という意味で見たら、既に先進国の中では武装講争というのは不可能だというふうに思っていましたし、そのことは当時の革共同<sup>(注30)</sup>、いろいろな連中ともそうですけれども、武装講争がそういう意味で、例えばベトナムやいろいろな所で起こるような意味を持っているということはほとんど信じていませんでした。それはもう冷めていました。そのことによってではなくて、武装という意味があるとすれば、それは身体を懸ける、その身体度の中で初めて日本では社会性というものが、現実性を獲得するためにはそういう媒体が必要なのではないか、そのことしか社会の参加の方法がなかったのではないか、本当の意味での社会というものに参加できなかつたのではないかという意味で、あのときの行動様式というやつが、あれほど多くの人たちに伝播した、あるいは、多くの人たちをつかんだ理由というのは、理念やイデオロギーではなくて、その行動様式が持っていた、現実と自分との対話を通して描いた社会観、社会性というか、他者との関係ですね、このことを実感できた。『60年代のリアル』<sup>(注31)</sup> という本があるんですが、そういう意味での現実意識

(注29) 機動隊との衝突等の際に、180×3×4cm程の角材を用い、その角材のことをゲバルトの棒、略してゲバ棒と称した。

(注30) 革命的共産主義者同盟全国委員会（所謂中核派）のこと。

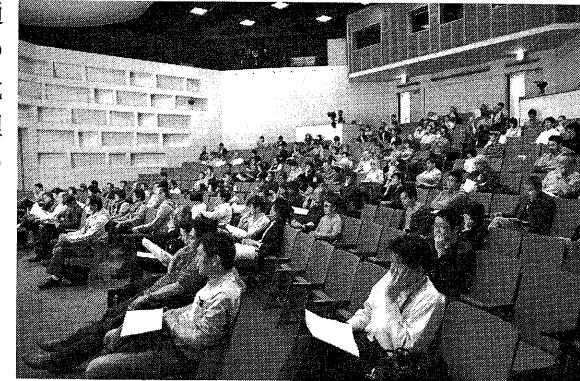
(注31) 佐藤信著、ミネルヴァ書房、2011年刊。

というやつに、そこで通路ができた。きっとそのことが日本における近代化というか、近代的な理念と実際の現実意識との間で離れていたことを、当時の我々はそういうふうに受け止めていたんじゃないかというふうに僕は思っていました。

ですから、ここは当時うまく言葉にならなかったんですが、擦れ違ったんですけども、理念上の武装闘争という意味では、僕らは塙見さんとはちょっと違うかもしれません、違うところに武装闘争の意味を持っていた。ただ、我々の武装闘争の意味、武装というか、行動の意味ですよ、そのことがどこに根拠があるのかという意味で、左翼思想の中にはちゃんとそれに答えてくれる社会思想がなかった。

それで、多分、三島さんは違う意味で答えたんだと思うんですね、三島由紀夫は、腹を切るところで、日本のフォーラムというか、日本の伝統思想であるということを含めて、日本人の社会思想の一つとして、文化というふうに彼は言っていますけれども、そういうことを捉えていたと思うんです。だけど、そのところが、実は僕らにとってみたら、現代でも社会と我々がどういうふうに関わるのか、我々が本当の意味で社会の中で我々の意識が社会的肉体、肉体を加工できるのか、社会という意味で実感できるのかと、社会というものを、そういう意味でのすごく僕らは今、別の意味で孤独感があるんだと思うんですが、そういう社会の中での孤立、孤独している我々の社会的な感性というやつに対する、あの時代の一つの回答としてそだつたんだといふうに思っています。

**司会（金）** 今、三上さんのお話は、一つは、新左翼というのは、身体の直接性を懸けるというような形で現れてきたと思うんですね。1960年安保のときにいわゆる全学連主流派といわれる、いわゆる新左翼グループが、要するに体を張って警官隊とぶつかると、その横を共産党や社会党は手をつないでデモをしていくという、そういうような光景があったと思います。そして、それが1967年の10・8以降、要するにヘルメットとゲバ棒という、まだその意味ではある一段高くなった武装という形が出てきたと思うんですけども、



塩見さんが提起したのは全くそれとは違う段階が出てきたわけですね。塩見さんの場合は、要するに、世界赤軍<sup>(注32)</sup>、世界革命戦争<sup>(注33)</sup>というようなお話が出てきたと思うんですけれども、今の三上さんのお話を受けて、塩見さんのほうとしてはどうでしょうか。要するに、現実と理念に対する落差があつたんじゃないかなという話が出てきていると思うんですけれども。

### 国際的規模で見たとき、武装闘争には永続性があった

**塩見** 僕は、当時の学生青年というか、僕なんかも含んでですけれども、内的な精神構造から見たら、実存主義<sup>(注34)</sup>、マルクス主義的<sup>(注35)</sup>な装いを持った実存主義で、投企してアンガージュするというか、それで自己確認をしていくというような、そういう、ある面では疎外論的な要素が、本質的な共通の在りようだ。この点は味岡と別に認識は違わない。

ただ、じゃあ、武装闘争自身が現実性を持っていなかったかどうかという問題なんですけれども、これについては、確かに日本は第二次高度成長に入つていって、それから安定成長にいくんだけれども、日本自身で見たら、経済成長がずっと続いているという状況はあったと思うんですよね。にもかかわらず、国際的に見たら、ベトナム反侵略戦争<sup>(注36)</sup>を軸にして世界的な高揚があって、特に第三世界<sup>(注37)</sup>を基軸にしてですけれども、それでゲバラ<sup>(注38)</sup>の呼び掛けとか、いろいろなスチューデントパワーも含んで進んでいったわけだから、武装闘争を一国的規模で見れば、非常に現実性がないか分からず、国際的規模で見たら、私は永続性があったと思うんですよね。

(注32) 世界革命の時代なのだから、世界単一の党一軍一統一戦線が必要だという考え方から革命の軍隊=赤軍の世界規模での結成を呼び掛けていた。

(注33) 世界革命の時代であり、革命は革命戦争の形態をとらざるをえない、という考え方から世界革命戦争の遂行・勝利を呼び掛けていた。

(注34) 人間の実存を哲学の中心に置く思想。学生運動の文脈では、60年代のフランスにおいてサルトルが唱えたアンガージュマン（社会参加、あるいは自己拘束などの多様な意味を持つ）の思想が世界に広まり、学生運動に思想的影響を与えた。

(注35) マルクスとエンゲルスの論理に依拠した共産主義思想。

(注36) ベトナム戦争のこと。ベトナム側から言えば、アメリカ帝国主義による侵略に反撃する戦い、ということ

(注37) アメリカ・西欧等の西側世界（資本主義陣営）、ソ連・東欧等の東側世界（社会主义陣営）に対し、その他アジア、アフリカ、ラテンアメリカの発展途上国のことを行う呼んだ。

(注38) カストロと共に1956年から59年のキューバ革命を闘ったチェ・ゲバラのこと。65年にカストロと別れアフリカへ、66年ボリビアに潜入、67年10月8日捕られ翌日銃殺。39歳。

もう一つは、国内の運動自身の発展過程で見た場合に、やはり運動は登り詰めて、最後まで行き切らないと止まらないという要素もあるわけなので、そういう意味では、赤軍派はその登り詰めた頂点まで押し進めていくというのか、そういうような意味で、そこだけを根拠には私はしたくないけれども、それは物事の道理であって、勢いの赴くところで進めていくのは、別に不当ではないし、間違つてはいないというふうに思っているということです。

それから、もう一つ、前澤君と雪野さんだったかな、おっしゃったわけですけれども、もう解体していく、野合とかいう状況ではもうなかつたとおっしゃるわけですよね。だけど、現実の指導部の関係では、永田さんと川島君との論戦<sup>(注39)</sup>とかがあり、赤軍派内部では、大菩薩グループ<sup>(注40)</sup>なんかが出ていく中で森君なんかとの論争があるという状況が現にあって、それで実際、全体的に見たら、やっぱり連合にとどめるべきであって、新党をつくるとか合流するとかいくと反対というのがもう前提になっていたから、そういう中で12名が亡くなっているわけだから、その点で見たら、当事者の戦士たちがどういうふうに考えようと考まいと、指導部はやはり新党をつくることに、2つの党派を強引に、綱領がないにもかかわらず、武装という名の下に新党をつくることによってそれに対する反対派を肅清すると。4名ですよね。加藤君<sup>(注41)</sup>とか小嶋さん<sup>(注42)</sup>とか尾崎君<sup>(注43)</sup>とか、こちらで言えば遠山さん<sup>(注44)</sup>をまず排除する。それからもっと新党を固めるためには、

(注39) 赤軍派との統一方針を巡って、永田指導部と獄中の川島豪等との間で論争があったこと。

(注40) 69年11月5日に大菩薩で逮捕された赤軍派の被告グループのこと。この頃、保釈で出てきて、森恒夫らと闘いの方針の違いを巡って論争があった。

(注41) 加藤能敬、京浜安保共闘活動家、和光大出身。72年1月4日榛名アジトにて「総括」死。22歳。

(注42) 小嶋文子、中京安保共闘活動家、市邨学園短大出身。72年1月1日榛名アジトにて「総括」死。22歳。

(注43) 尾崎充男、京浜安保共闘活動家、東京水産大出身。71年12月31日榛名アジトにて「総括」死。21歳。

(注44) 遠山美枝子。明治大学卒、赤軍派で主に救援対策に従事、赤軍派政治局員高



これまでの関係とか、いろいろな近しい人々の中での夫婦とか恋人とか親子の関係を、森・永田の体制に統制していくという意味で抵抗する部分を排除するような過程が進行したと。こういう点では、やっぱり野合、綱領の違う人々がそれを無視して、強引にやったということが大きな、決定的な要因になっているというふうに私は思っています。

**三上** 先進国の中で本当に武装闘争がどういうふうに可能かということは、僕も随分考えました。これは、もちろんベトナムとかキューバとかというのとは別格で、特に僕が注目していたのは、アメリカとフランスなんかでヨーロッパの運動が実際にどうなのかということと、自らの行動が武装という理念とやっぱり距離があるというか、そういうところではないなという、この時代感覚というのはどうなんだろうということで、僕は僕なりに随分考えていたんですよね。

それで、実際のところフランスの五月革命<sup>(注45)</sup>でも武装闘争というのはあまり起こっていませんし、ヨーロッパで、イタリアとかドイツはちょっと別個ですけれども、少数派はそうですが、多数の大衆運動としてどうなんだという意味でそうですし、アメリカは、やっぱりブラックパンサー<sup>(注46)</sup>という特殊な黒人との人種闘争をある程度解体して、それでやっぱり民族派たちで起こっている。先進国の中でそういう民族問題を介在しないで武装闘争が可能かということに対して、やっぱり違うんだろうなという。だから、僕ら自身が自分たちのやっている肉体の行動の感覚というか、行動を裏返していく内在意識の問題というか、そのときの内在的な意識は何だったんだという運動の行動感覚なんですが、その行動を支えている意識が何なんだということを考えたときに、どうしてもそれは武装ということではなくて、日本の社会の中で日本人がどのように我々の意識や社会性を獲得できるか、あるいは、意識の中に社会性が獲得できるかという意味で、多分、近代的な社会意識や日本の資本主義が成熟してくると同時に、実際、我々の感覚としての社会感覚の中にある種の肉離れというか、そういうものがあって、そういうものをうずめようとする感覚だったのではないかと。

そこに多分、革命というふうな概念を考えていった場合に、社会が何によって変わるかといったときの革命イメージが多分随分違ったんでしょうね

原浩之の妻。72年1月7日榛名ベースで「総括」死。25歳。

(注45) 68年5月パリ・カルチャラタンでの学生の戦いを機に労働総同盟(CGT)はじめ主要労組がゼネストに突入。市民も含めてド・ゴール体制に反対したこと。

(注46) Black Panther Party アフリカ系アメリカ人解放運動の政治結社。66年に結成し、「武装による自治」を主張、展開した。

も、僕はそういうふうなところをすごく考えていました。

**司会(椎野)** 今、お話を聞いていると、70年当時にブントが割れたときの三上さんが出て、左に塩見さんが出ていて、僕らが中央に残ったときのブントの論争がまるでそのまま繰り返されているような気がするんですけれども……。

**司会(金)** 45年間、何の進歩もないという話なんですね。

**司会(椎野)** 一つ、多分ここにいらっしゃる若い方の疑問としては、さっきから武装、武装という言葉が出ているけれども、その武装って一体何なんだということがあると思うんですね。当時僕は、塩見さんなんかが雲の上の存在の組織の末端の活動家だったわけなんですけれども、武装ということがよく言われました。戦旗派でも恒常的武装闘争<sup>(注47)</sup>をこれからやるべきなんだというふうに言わされたときに、さっきの植垣さんのあれとちょっと似ているなんだけれども、じゃあ、僕らはどういうふうに捉えていたかというと、とてもじゃないが、革命の武装と思えなかった。せいぜい僕らの段階では火炎瓶、ゲバ棒程度ですので、こちら側に座っていらっしゃる方は、そこをもっと突き詰めていったというか、踏み越えてしまったと思うんですけれども、だから、今語られていることの武装というの是一体何なのかということが多分分からないと思うんですよね。

当時の僕の感覚で言うと、武装というのはその程度で、本当に革命につながる階級間の闘争として何か内戦が起つたりするような武装というものは、全くそこまでは僕は考えてませんでしたよ、ということだけちょっと一言注釈しておきたいと思いました。

**司会(金)** 今、武装闘争という言葉はよく出たわけですけれども、武装闘争って一体どういう意味があったんだと、その意味の内実自体はどういうものだったんだと、それぞれの諸党派によって捉え方が違っていたという話が出てきていると思うんですね。それについて右翼武装闘争派であった鈴木邦男さんは、やはりゲバ棒、火炎瓶、あるいは銃、爆弾とかありましたけれども、やはり日本刀じゃないと駄目だとか、いろいろあると思うんですけども。

### 新左翼は人間にに対する期待度が高すぎる

**鈴木** 僕は塩見さんにも聞いたなんだけれども、赤軍派が大菩薩峠で捕まったときは、そこで訓練した人たちが首相官邸を襲って、それで革命政権をつく

(注47) 共産同諸派によって唱えられた理念で、恒常的な階級闘争の連鎖により革命的反乱を永続化させようという考え方。

るんだと、ちょうど戦前の右翼の五・一五事件<sup>(注48)</sup>や二・二六事件<sup>(注49)</sup>と同じようなことを考えていたんだね。それで首相官邸を押さえて、それでまた警官と機動隊とを撃破して、塩見さんが大統領になって、それで革命憲法をつくるとか、それで赤軍をつくるという壮大な夢を持っていたらしくて、それはそれで非常に素晴らしいなと僕は思ったんですよ。

それで、70年に赤軍派が「よど号」をハイジャック<sup>(注50)</sup>して北朝鮮に行きましたが、彼らに僕は何回も話を聞いたんですけども、非常に漫画じゃないかと言ったら、いや、漫画じゃなかったんだけど、実際、あのころは平壌というのは国際都市であって、世界中から革命家や反政府ゲリラというのがいっぱい集まっていたんだと、それで軍事訓練を受けていたんだと、それでアフリカや南米に散って、実際に革命を成し遂げた人たちがいっぱいいるんだと、5カ国ぐらいが革命を実際にしたんだと、だから自分たちだってできる可能性があったんだと言っていましたね。

ただ、彼らは軍事訓練を受けさせてくれなかった。なぜかというと、南米やアフリカと違って、日本はそういう彼らを受け入れるだけの受け皿がないと、それで一番決定的なのは、連合赤軍事件だと書いていましたね。彼らのところに北朝鮮の人が新聞を持ってきて、ほら見ろと、おまえのところでは仲間殺しをしていると、こんなことではおまえらを日本に帰して革命をやらせてもできっこないんだ、それが一番大きかったと言っていましたね。だから、もし連合赤軍事件がなかったら、彼らは帰ってきて、それでやったかもしれないですね。右からは三島事件があるし、左からは赤軍が決起するし、非常に面白い展開になったかもしれないですね。

それと、左翼の場合は、自分たちがやらなかつたら駄目だと、自分たちにちょっと似ているやつは絶対許せないと、そいつらをまず排除しなかつたらできないというのが大きいですよね。

右翼の場合は、例えば血盟団事件<sup>(注51)</sup>、五・一五事件、二・二六事件というのは、少しずつニュアンスも違うし、メンバーも違うんですけども、競い合つ

(注48) 1932年、政党の腐敗、農村の疲弊、ロンドン条約による海軍力の制限に対し、青年将校等がおこしたクーデター事件。犬養毅首相殺される。

(注49) 1936年、国粹主義の陸軍青年将校等によるクーデター事件。高橋是清大蔵大臣らを殺害、永田町一帯を占拠、翌日戒厳令公布され29日まで鎮圧。

(注50) 70年3月31日、日本航空「よど号」を共産主義者同盟赤軍派の田宮高麿8人がハイジャックし、朝鮮民主主義人民共和国に渡った事件のこと。

(注51) 井上日召らの結成した右翼団体血盟団が1932年2、3月に前蔵相井上準之助、三井合名李次長団琢磨を暗殺した事件。

ているんですよ。あいつら、駄目だ、じゃあ、俺たちはこうやる、こうやると。だから、まず似ているやつやそばのやつを殺してから自分たちがやるんだという発想がないんですよ。

それと、左翼の場合は人間に対する期待度が高過ぎますね。非常にレベルの高い革命家を集めて、それでもなおかつもっと高めようとするわけでしょう。

**司会(金)** 右翼の場合は、別に偏差値は高なくて構わないわけですか。

**鈴木** 全然構わない。例えば100の場合、10でも5でもいいからそれを使おうとしますよ。だから、もったいないと思いますね、連合赤軍事件の場合は。あんなふうに使っているから。

**司会(金)** 今の鈴木さんのお話ですと、要するに、左翼の運動は、本当にレベルの高い少数の運動でしかないと。

**鈴木** そうですよね。エリートですよね。

**司会(金)** ところが、右の運動は、どんなにレベルが低くても受け入れるから、大きい運動になれるんだと。

**鈴木** そうです。それから、当時一水会<sup>(注52)</sup>に入った人で、左翼だったらレベルが高いからなかなかトップになれない。でも、新右翼はレベルが低いから、すぐに俺がトップになれる。そういう意味で入ってきたやつが結構いました。だから、その点、人間を大事にしているんですよ。

**司会(金)** (笑)。

**鈴木** どんな人間でも使うと。それと浅間山荘もそうですね。銃撃戦に打って出ればいいんですよ。今言ってもしようがないんですけどもね。あるいは要求を出して、飛行機を持ってこいとか、ヘリコプターを持ってこいとか。それを仲間殺しをやってしまったから、その後の方針も出せないし、ああいうふうになったんじゃないかなという気がして、これからはもうちょっと人間をもっともつとうまく使ってやってもらいたいですね、皆さん方は、革命を。

**司会(金)** ありがとうございます。



(注52) 新右翼の代表的な団体。72年結成、初代代表鈴木邦男。

連赤は革命的敗北主義で名を残せなかつたのが悔やまれる

**司会（金）** やはり武装というと、どうしても今日は連合赤軍40年ということもありますから、やはり塩見さん、どうしてもこれ、我々の武装というのはこういうことだったんだ、あるいは武装の質というのはこういうことだったんだというお話をされたいことがあると思うので、ちょっと手短にお願いできますか。

**塩見** 鈴木さんの、私、何か五・一五みたいなことをやって首班になるということについては、あなた、正確に私の言った意向を伝えてないでしょ。この前の対談のときに、私は、首班は中核派の武井氏(注53)でいいと。だから……。

**司会（金）** それじゃ裏切りじゃないですか、赤軍派に対して。我々は何のためにそんなところについて行ったんですか。

**塩見** まあ、待てよ。だから、赤軍派はそんなにセクト主義(注54)で他党派なんかを抑え込んでいて解体するとか、そういう発想はほとんどない党派だよ。いや、赤軍派全体がそういう……。

**司会（金）** ちょっと青砥、どう思う？

**塩見** まあまあ、そのことは後で聞き流してくださいね。

**司会（金・椎野）**（笑）。

**塩見** その上で、要するに実現性があったかどうかについては、国際的条件はあつたけれども、僕ら自身は、あの闘争で前段階蜂起というのははつきり位置付けられていなかつたんだけれども、勝つ闘争とは思つていなかつたということね。それで、革命的敗北主義(注55)でやって、いわばブントの島さん(注56)が言ったように、「虎は死んで皮を残す、ブントは死んで名を残す」という、鈴木さんが喜ぶような言葉だけれども、そういうような、やっぱり負ける闘争でもやらなきゃならんときはやるということ……。

（注53） 中核派の指導者本田延嘉の筆名。

（注54） 自分達の党派（＝セクト）だけが正しく、他党派は全て駄目、という排他的・独善的な考え方。

（注55） 元は「革命的祖国敗北主義」、帝国主義間の戦争に際し、挙国一致に参加することなく、自国帝国主義打倒に向けて闘うこと。革命的敗北主義は、全く異なる概念で、個々の闘争において、仮え負けるとしても「革命的」に突撃しなければならない、という旧帝国陸軍の「玉碎」に似た考え方。

（注56） 一次ブントの書記長だった島成郎のこと。

**植垣** 塩見さん、あまり頑張らないでくださいよ。

**塩見** もう一つは……。

**司会（金）** じゃあ、塩見さんは皮を残そうとしたんですか。

**塩見** もう一つは、どうかな、カストロ(注57)やゲバラの中には、自分が進んでやって、やれることは部下にやれと言うけど、自分がやれないことはやるなど。それで、実際にカストロは自分でやるべきことをやって、それについてこいと言っているわけでしょう。

僕は本当に、森君たちが1971年のいわば年が暮れるころからどんな形になるか、監獄で情報はほとんど入っていないけれども、彼らは川を渡ったと、それで、言うならば深閑の森に入ったという言葉をそのときは抽象的に使つたんだけれども、本当にどういうふうに彼らは進むのかというのについては、想像力を働かせても想像できなかったわけだけれども、ただ、僕自身が言えることは、島さんじゃないけれども、やっぱりゲバラや何かを見習って、革命的敗北主義の名前を残せばいいと。それでやってくれたら、実際に負けるだろうし、死ぬこともあるし、長期刑を受けることもあっても、それで十分いいというような意味で、僕は総括の論文を書いたんだよね。そのような形では進まなかつたということが僕にとっては非常に悔やまれることだということなんですね。

**三上** 塩見さんのその意見で言うと、結局60年の6・15から6・18の過程で何をブントは総括したかということに関わるわけですよ。

僕らは6・15で国会構内を占拠して、60年安保があって、6・18にブントが再度、国会に突入できなかつたからブントが駄目だという議論があつたのに対して、本当にあそこでもう一回武装闘争ができたかどうかということに関して、僕は1年生の当時、活動家だったんですけども、70年に至る過程でそのところをものすごく考えたんです。

多分そのところで武装闘争という形じゃない、60年のあの大衆運動の意味が、そのことの持つている革命性ということの意味が、そういう武装とか、そういうブントが、そういうものじゃないと。先進国の中で起こっている、恐らく日本の中で起こっているあの当時の急進的な学生の行動が、そうじやなくて、学生がその時代の様式の中で獲得しようとしている新しい社会意識の獲得、あるいは社会的存在の、要するに理念的な名目性を自主的な形でうずめようとする、そういう運動の、そこの持つている革命性なんだ。それは一種の近代なら近代の民主主義という近代が、ある面で肉体を持ったとい

（注57） フィデル・カストロ。1959年のキューバ革命をゲバラと共に担い、革命後最高指導者として2011年まで務める。



う実現でもいいわけですけれども、そのところが全然違うというか、多分、塩見さんは、それは同じ学年なんですけれども、60年の6・15から6・18の過程の教訓がものすごくあったんだろうなというのを一つ思っています。

もう一つ、鈴木さんが言った、人間を大事にしないといけないというのは、これは僕も随分——その後、会社もやったことがあるんですが——思います。左翼が何て人をひどい使い方をしてきたなということには、ものすごく反省があります。

これは逆に言うと、近代的な人間観が、日本の社会がむしろ持っていた、伝統的な義理や人情も含めた人間関係を越えられなかつたんだと。そういう意味では、むしろ日本における近代的な社会思想がシステムとして受け入れられていて、本当の意味で人間の精神として受けられていかないことから生じている。むしろそれだったら、日本が近代社会を批判した以前の社会思想のほうが、社会的な関係も、人間的に義理とか人情とか豊かなものがはるかに残っているというような意味で、僕もこれは痛烈に反省したところです。

それで、これはやっぱり我々が近代を越えていくとき、近代主義を超えていくときにどういうことが近代主義の批判の問題になるのかという意味で、日本の中での近代的な社会意識や社会概念がどのように根付いたかという問題と絡むんですけれども、その意味でよく分かります。

**司会（金）** ありがとうございます。実を言いますと、予定の時間は来ているんですね。

それで、始まりが10分遅れましたので、本来、これがちょうど時間なんですけれども、今、塩見さんのほうから我々、元赤軍派としてはびっくりするような発言も出てきましたので、最後に青砥さん、植垣さんに簡単な感想を頂いて、それで第二部を終わりたいと思うんですけれども。

青砥さん。

1

## 前段階武装蜂起に具体的なイメージがわからなかった

**青砥** 私は、塩見さんが提唱された前段階武装蜂起<sup>(注58)</sup>、過渡期世界<sup>(注59)</sup>における攻勢的な局面としての前段階武装蜂起という方針に賛成して赤軍派に結集したものですから、そのこと自体について、そういった方針を出されたということについては、別に何とも思っていない。ただ、もうちょっと徹底してほしかったなというふうには思いますが。

ただ、先ほど武装の必要性があるかどうかという話がありましたけれども、武装というのは、例えばゲバ棒でさえ武装と考えれば武装なんですが、私の抱えていた武装闘争というのはそういったものではないというふうに思いますね。それで、前段階蜂起が、では武装闘争なのかということになると、実は、前段階武装蜂起のイメージといったものは、私もそうだし、ここにいる金もそうでしょうが、具体的なイメージといったものがなかなかよくわからなかった。何が一体、前段階武装蜂起なんだと。首相官邸に武装突入するのはいいけれども、どういった闘争になるんだ、何をもって闘争にするのか……。

**司会（金）** ということを、今言っていることを、彼とも一緒に話していたんですね。前段階武装蜂起をして我々は死ぬんだと、我々は捨て石になるんだと。ただ、その前段階武装蜂起のイメージがどうしてもわからなかったんですね。そういうことをいつも話をしています。

**青砥** まあ、そういうことです。要するに、それまでの武装カンパニア<sup>(注60)</sup>とどう違うんだと、防衛庁突入闘争とどう違うんだと、何が違うんだと、爆弾を持っていけばそれが武装闘争なのか、獲得目標が見えてくるのかということについては明瞭なイメージがなかった、わからなかった。塩見さんもそういったものについては明瞭な方針といったものは出しておりません。

ただ、私どもは、時と勢いの赴くままに前段階武装蜂起に結集してしまったんですよ。それはそれで構わない。先ほど言ったとおり、それは社会参加であり、プロジェというか、自己投企なんだから、それはそれでいいんですよ。私が考える武装というのは、初めて武装が私どもの目の前に出てきた、一体

(注58) 武装闘争によって本格的な革命戦争が開始されるが、一気に権力奪取への蜂起ではなく、そこへ向けての前段階での蜂起であるという意味で、前段階武装蜂起とした。

(注59) 1917年のロシア革命以降、世界史は資本主義から社会主义への過渡期に入ったという理論。

(注60) 実際に武装闘争をするのではなく、武装した隊列を民衆に見せること。或いは、民衆へのアピールを主目的とした武装闘争のこと。

それは何かというと、持続的な武装部隊が、現在の社会の状況とか法律の状況とか、そういうものとは相対的に、独自に一つの権力というか、独自の運動体として持続できる状況が生まれたときに初めてそれを武装したと言えるのであって、そういう意味では、蜂起路線といったものを、私どもが結局これはできないということでやめて、部隊をゲリラ部隊に改装して、M作戦<sup>(注61)</sup>といいうちんけな作戦でしたけれども、そこを始めたときに初めて我々は武装ができたんだろうと。鉄砲を持っているかどうかが武装じゃないんですよ。そういうふうに私は考えていました。

それで、現実にそれを開始したときにどういった状況が生まれてきたかというと、それまで我々が想定していなかったような姿勢から、例えば日共<sup>(注62)</sup>の山村工作<sup>(注63)</sup>に使った武器を提供するという形で出てきたり、あるいは、ノンポリ<sup>(注64)</sup>だと思っていたJATEC<sup>(注65)</sup>が我々をかくまってくれたり、そういう形で少しずつ日本の民衆の中に、武装すればそれに結集してくれる部分、支えてくれる部分があるんだなというのを実感として感じた。そういう局面があったんですね。

そこに初めて、塩見さんが言われている攻勢段階の武装の現実性といったものを獲得したのかなというふうに当時、私は思っておりました。従って、それは塩見さんが成し遂げたことではなくて、森さんをはじめとした当時の部隊長たちが成し遂げた成果だというふうに私は思っておりました。私は今でも塩見さんが好きですし尊敬していますが、このことについては、ちょっと塩見さんには釘を刺しておかないといけないなというふうに思っています。

**司会（金）** もう時間もありませんけれども、植垣さん、さっき1分で切ってしましたので。

**植垣** これは、もう一つは、当時の僕自身の気持ちで、何で武装闘争に参加したのかということにもなるんですが、当時の闘争全体、全共闘運動から含めて語ろうと思ったら、またそれこそ24時間になってしまふので、その点だけで言いますが、当時、武装闘争というものが実際にはいろいろな形で定義

(注61) 70年秋以降に赤軍派が森恒夫の指導の元に「建軍」のために、として引ったくりから金融機関強盗を行ったこと。

(注62) 日本共産党のこと。

(注63) 1950年代前半、徳田球一率いる日本共産党は武装闘争路線を取り、農村・山村部に「山村工作隊」を派遣し中国革命をイメージした農村工作を展開した。

(注64) non politique 非政治的な。政治に興味のない人のこと。ノンセクト（無党派）活動家のことを呼ぶこともあった。

(注65) 反戦米兵援助日本技術委員会。ベトナム戦争中に、ベ平連が作った脱走米兵を中心国に逃がす組織。

されていたわけで、それに連動していろいろな軍事論文がありました。ところが実際にやってないわけですね。やってない中で軍事が語られている。そういう状況の中で僕が思ったのは、どういう軍事論であれ、とにかくやってみなくちゃ分からんと。じゃあ、どういう形でやるのか。それはもうゲリラ戦しかないだろうと。取りあえずゲリラ戦で始めていくしかないと。そんな気持ちで当時、僕が赤軍派のそういう武装闘争に関わったときは、もちろん塩見さんが獄中にいたし、その中にあってゲリラ戦が始まった。

だから、当時の僕の気持ちちは、率直に言って、この軍事思想でやるんだとか、そういうのはなかったんです。はっきりと別の言い方をすれば、やってみて、やっていく中からどういう軍事が可能かということを僕なりに考えていました。はっきり言って、塩見さんの論文なんかとても理解できなかつたもので、すごい軍事用語が連なっているものでびっくりしてしまったということはありました。取りあえずそなところで。

**司会（金）** 時間が来ましたので第二部はここで終わらせていただきたいんですけども、今、武装という問題が出てきたんですが、正直な話、時間が短いこともあるんですけども、非常にリアルな話には今なっていないと思うんですね。本来は、これをもうちょっと突き詰めたいところもあることはあるんですけども、一度こういう、実際に武装ということが我々にとってどれだけのリアリティーがあったのか、実際にどういう質のものであったのかということを一度語る場があればいいかなと思ったりもしていますし、またその機会を作れればと思っております。

では、皆さん、塩見さん、鈴木さん、三上さん、ご苦労さまです。  
(拍手)

## 第三部 連合赤軍事件が残したもの

パネリスト／大津卓滋、田原牧、森達也

**司会（金）** 第三部に入りますが、会場の皆さんからの質問については、質問票に記入して提出していただくことにしました。その質問票というのは、皆さんから質問を自由に受け付けたいという考え方もあることはあるんですけども、質問というより自分の主張をされる方が多いので、今回は質問票という形で出していただけだとありがたいかなと思っています。受付にあります。

第三部「連合赤軍事件が残したもの」という題が付いておりますけれども、ゲストの紹介からいきたいと思います。左奥のほうから、大津卓滋さんです。こちらにいる植垣康博君の控訴審、上告審ですか、高裁、最高裁の弁護士を担当しました。そして、「よど号」ハイジャック事件<sup>(注66)</sup>関連では柴田泰弘君<sup>(注67)</sup>や田中義三<sup>(注68)</sup>さんの弁護も担当して、要するに、赤軍派について知識が豊富で、いろいろお考えになってこられています。

その隣ですけれども、田原牧さんです。東京新聞の記者で、麻布高校時代には相当やんちゃに運動をされたと伺っています。署名された文などもよく新聞で見ますけれども、私から見ると非常に過激な方で、今日は過激な発言を期待しております。

こちらは、映画監督の森達也さんです。もうご存じだと思いますけれども、オウム真理教を内部から記録した映画を撮り続けてきて、そのことによって非常に大きなバッシングも受けていると思いますけれども、そのバッシングというのは、要するにオウムの味方をしているというような、そういうあしづまな悪口も含めてだと思うんですけれども、そういうことについて連合赤軍のこととどのように関連していくことがあるかを伺えればと思っております。

最初に、大津卓滋さんに5分ほどテーマを頂ければと思います。

(注66) P34、注50を参照。

(注67) 「よど号」ハイジャック実行犯の一人、当時16歳高校生。秘密裡に帰国、88年逮捕され懲役5年を服役。11年6月孤独死、59歳。

(注68) 「よど号」ハイジャック実行犯の一人、明治大学生。96年カンボジアで偽ドル容疑で逮捕、無罪となるが00年日本に強制移送され逮捕、懲役12年。服役中癌を患い07年1月1日死亡、58歳。

## 後世に教訓を伝えたい

**大津** 弁護士、大津です。今まで裁判、弁護人をやってきた関係で、田中さんが亡くなったり永田さんが亡くなったりしたときには必ず顔を出させていただいているんですが、こういう集会でパネラーと言われても、私がどういう立場から発言していいかよく分からなかつたので躊躇していたんですが、植垣君とか金さんとかと話して、多少は何か言えることがあるかなという思いで今日はきました。

私は、直接には植垣君の控訴審から関わったんですが、私も大体植垣君と同じ年で、横浜国大にいまして、当時、多少人並みには運動に関わって、赤軍派とは全く関係ないんですけども、ただ、弁護士になったときに、いわゆる公安事件というのは一切やらないと決めていたんですね。自分が別れた者と弁護士になってまた付き合う必要はないと思っていたんですが、連合赤軍の事件の控訴審という話が来たときに、あの事件だけは同世代としても何か未消化のまま強烈に残っている事件で、かつ、うちの大学の関係者もかなりの数がいたので、これだけはやろうかなとどこかで思ったんですね。それで、最終的には拘置所へ行って植垣君と会って、嫌なやつだったら断ろうと思って、それで会いに行って、そこで意気投合して、じゃあ、やるとその場で決めて、そこから十数年付き合うことになったんですが……。

だから、私としては当時の時代というのは、部分的には自分も現場にいたので、実感としての感覚というのはよく分かるんです。それで、裁判にならたら、調書、記録としてずっともう一回追体験するような作業があって、植垣君とよく話していたんですが、この裁判を通して何が獲得目標なのかという話をしたときに、彼はやっぱり総括したいということだったんです。

ところが、総括といつても漠然としていて、一緒にずっと作業をしていく中でやはり個人史にさかのぼって、自分の内面をさかのぼっていくことはあまり意味がないのではないかと思って、この事件から次の世代とか後世の人がどれだけ教訓をつかんでいくための材料を提供できるのかということのほうが大事なのではないというふうに植垣君とも話をしていて。だから、今、端的に言えば、ああいう時代感覚を全く知らない若い世代の人々に、これはこうしたことだったんだという、プラスもマイナスも含めてちゃんと伝えていけるようなものをやっぱり作っていか



動機に私利私欲も何もない、世の中を少しでも良くしようというだけの動機で、そういうやったこともないことに一步、足を踏み込むということは、ものすごく勇気とか覚悟とか、あるいは自己犠牲の精神とか、いろいろあると思うんです。そういうものは誰も否定できないものだと思うんですが、もう一方で、プラグマチック<sup>(注69)</sup>な技術論というか、本当にこれをやるにはどうすればいいか、そういうプラグマチックな技術論というのが現実の世の中ではものすごく重要な要素を持っていて、そこがすごく欠落していたのではないかと思うんです。

植垣君の言葉をそのまま借りると、自分は命を懸けて本当に革命戦争をやろうと、死ぬ覚悟をして集まつたと。ところが、具体的に何をしていいかというのが全く分からなかつたと。武器はどこから調達するのか、軍資金はどこで調達するか、どういう訓練をするか、そういうことについては全く手探りで行くしかなかつたと。

普通、こういうときはやり方が分からないからやめてしまうはずなんだけど、時代のエネルギーというのが背中を押して、そのまま前に入つていつて、こういう事件が起きた。この事件自体は、否定しようと思え

(注69) 実利的、実際的の意。

なければいけないのではないかということを強く思います。

連合赤軍自体は、同じようなことをしようとするグループがいれば、その人達にとってものすごく教訓に満ちていると思うんですが、そういうことまでしない、普通に生活している人にとって何が教訓になるかというと、全然関係のないこともたくさんあると思うんですね。

ただ、今日ここに来られた若い方も結構いらっしゃるので、ちょっと驚きましたけれども、私なりに考えたのは、一つは、連合赤軍というのではなくて、今まで誰もやったことのないことをやろうとした。その

ばいくらでも否定できるんですが、今までこういうことをやったことがない人がやって、ある意味では当然の結果で、物事というのは、一番最初にやったことは大体失敗すると思うんですね。二番目の人は、その前の人人が失敗したことを教訓にして、そういう間違いをやらないようにともう少し進んでいく。それでまた失敗する。三番目の人はまたいって、そういうことですっとノウハウというのは蓄積されてきて、物事が達成される。そういう意味では、連合赤軍というのは第一歩を踏み出して、大きな失敗と同時に教訓をたくさん残したんだと思う。

だから、私自身も未消化な部分があって、あまり端的に言えないんですが、やっぱり物事、何かやろうとするときは、ある心意気の部分、志とか、そういうものは絶対に必要なんですが、それ以上にそういうプラグマチックな技術論、どうやったら結果が確実に取れるかとか、そういう思考が絶対に両面必要なんだということをこの事件が残しているのではないかと思います。以上です。

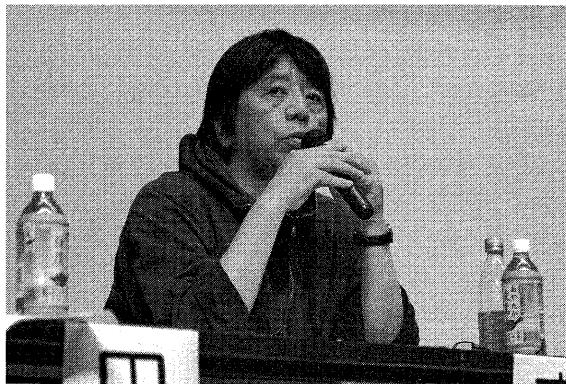
**司会（金）** どうもありがとうございました。今、大津さんのほうから、要するに、気持ちだけではいかないんだよと、技術も必要なんだと、そういうことをどこかで教訓化しなければいけないのではないかというお話を出たかなと思います。

次に、森達也さんの方からお話をさせていただきたいんですけども、やはり、森達也さんというと、オウムの事件があったわけですから、要するに、常にいわれているのは、なぜこんな事件が起きたのかということがいわれていると思います。それについてというか、連合赤軍との事件との関わりも含めて、森さんのほうからちょっとお話をいただけたらと思います。

### 連赤事件の本質をまとめるなどできない

**森** 先ほど、金さんからもいろいろオウムの映画を撮ったことでバッシングされているのではないかという、半ばジョークで言っていただいたんですけども、今日、実はこのシンポジウムの前にすぐそばでちょっと打ち合わせがありました、それは、今年10年ぶりに『311』という映画<sup>(注70)</sup>を発表したんですね。これは共同監督で、監督が四人います。それで、今後の地方展開とかDVDとか、その件でちょっと会って打ち

(注70) 森達也、綿井健陽、松林要樹、安岡卓治、4人の共同監督による、東日本大震災被災地の様子を記録したドキュメンタリ作品、2012年公開。



合わせをしたんですけども、一番若い松林要樹という監督が、今、福島でまた自分の作品を撮っていました、今日も朝まで福島にいて、それでここに戻ってきたらしいんです。そこで彼が言うには、『311』の映画のチラシか何かをたまたま地元の人が——福島の地元の人ですよ——農家の方が見て、「おまえ、もしかして、あのオウムの映画を撮った森とか安岡と一緒に映画を作ったのか」と言わされて、違いますとは言えないので、「そうですよ」と言ったら、だんだんみんなが遠ざかりだして、今は周りからオウムと呼ばれていますと、とても撮りづらくなりましたが、半分泣いていたんですけども、いまだに実際そななどつくづく実感します。それも含めて、なぜあれが起きたのか、なぜこんな想像もつかないような事件が起きてしまったのかということをきちんとみんなが納得できていない、獲得できていないというところからそういう恐れというのは生まれているんだと思います。

それで、よく使われるフレーズが「総括」。もちろん渦中で、山岳ベースで使われた言葉でもありますけれども、その後もちょっと流行語になつたし、あるいは、こういったシンポジウムでも連赤事件を総括するみたいな、多分、そういった言い方もよくあると思うんです。今日は使ってないですね。総括というのは、要するに短く文章でまとめるということですから、僕はそれをやっては駄目だと思います。それは、例えばマスメディアがやっていることですね。いろいろな事件であったり現象であつたり、そういうものを分かりやすく要約して、単純化して、矮小化して、みんなが納得するように一つの勸善懲惡的なストーリーにしてしまう、やはりそこに与しては駄目だと思うんです。

恐らくは、今日のこれが終わったとしても、ああ、そうか、これが連赤事件の本質だったのかとか、これでの事件は起きたのかと納得して帰る人は、多分一人もないと思います。それは恐らく毎年そうでしょうね。オウムでも同じことが言えます。納得できるはずがないです。こ

んなに多面的で多元的な、ましてこれだけの事件ですから、文章にまとめられるはずがない。先ほどの論戦にもありましたけれども、獄中にいて、指導部にいた塩見さんからの視点もあれば、実際に兵士として前線で、山岳ベース(注71)でやっていた方々の視点、これは食い違って当たり前ですよね。

だから、そういうのを聞くこと。その食い違いも含めて僕らは聞いて、そこでいろいろな視点を自分の中に担保しながら、どういった事件だったのか、要約できないけれども、そこで何となく自分なりの構図を作る、物語を持つ、それを語り継ぐということをしないと矮小化されてしまうんです。例えば、一番一般的な矮小化で言えば、森恒夫さんと永田洋子さんという、極めて異常な支配欲であつたり、独占欲であつたり、嫉妬であつたり、そういうものを持っていた二人がたまたま指導者になつたが故にこれだけの犠牲者が、内ゲバが始まってしまったんだ、みたいな解釈ですよね。これは当時もよく言われていましたけれども、まず 99.99% そうではないだろうと。当時、僕は中学生ですからよく分かりませんけれども、そう思っています。

それはオウムも一緒です。なぜあんな事件が起きたのか、なぜサリンをまいたのか、幹部信者のインタビューを随分しました。今はもうみんな死刑判決を受けています。だから今は会えないですけれども、受ける前にも何度も何度も面会に行って、手紙を交換して話を聞きました。それで、僕なりに得た結論は、相互作用です。麻原だけではない。信者たちが麻原を追い込んだ局面もあるし、麻原を持ち上げた部分もあるし、もちろん麻原からの刺激もあります。お互いに刺激し合いながらどんどんいってしまって、気が付いたら何でこんなことをやってしまったんだろうということをやってしまった。多分、それはオウムや連赤だけでもない。今、カンボジアではポルポトの裁判をやっています。あるいはナチスもそうですね。もしかしたらというか、多分間違いない、戦前の日本もそうでしょうね。組織的な犯罪はほぼみんな共通している原理があります。もちろん、オウムと連赤を一緒にしてはちょっと乱暴過ぎます。これは、似て非なるもので、かなりエッセンシャルな部分では違うところがたくさんありますけれども、でも、アウトラインでは極めてよく似ていますね。

それで、今回あらためてもう一回、このシンポジウムに出るための予

(注71) 主に革命左派が71年5月以降山中をアジトとした、小袖、塩山、丹沢、榛名、迦葉、妙義等のベースのこと。狭くは死者の出た榛名以降を言う。

習として、連赤関係のいろいろな本を読んだり、自分なりに少し予習をしてきたんですけども、やっぱり夜中にうなりたくなるぐらいに、何でこんなにオウムと似通っている現象があるんだろうと実感しました。やっぱり共通する普遍性があるんです。であれば、これはとても分かりづらいです。そんな単純な話ではない。でも、その分かりづらい普遍的なものをいろいろな角度からみんなが感知することで物語を作れると思います。作るというか、きっと自分で再現できると思うんです。その作業は絶対重要です。そのためにこういったシンポジウムは続けていかなければいけないし、その意味合いでは、オウムはほとんどこういった催しがないです。オウム事件から40年後だと2035年ですよね。こういったシンポジウムがあるかどうか。多分、僕はないと思いますね。だから、よりいっそう時代が深刻になってきているのではないかなどという気はします。

**司会（金）** ありがとうございます。今、森さんのお話の中で、要するに総括、単純化をしてはいけないのではないかと、多面的な見方をしないと、常にある出来事が矮小化されてしまうんだというようなお話があったと思います。あと、組織的な犯罪は似ているんだと。連合赤軍とオウムというのは、どの見方から見るかという問題もあるとは思うんですけども、やはり似たような事件なんだと、それはナチスや戦前の日本ともつながっていくことなんだというお話がありました。

いわゆる一般的な左翼は、オウムを非常に批判するんですね。連合赤軍、あるいは赤軍派のメンバーも、オウムは我々とは違うんだというふうに主張する方が多いんですけども、私の側から見れば、森さんの言うように全く同じ構造であって、要するに、オウムは麻原に罪をかぶせている。そして、連赤は永田・森に罪をかぶせている。本当は、一緒にやったんですね。一緒にやったんだという、これは僕が今言うことではないんですけども、後で青砥君や植垣君に、あるいは前澤君にお話を伺つてみたいんですけども、そういうことも含めて、後で討論ができればと思っています。

次に、田原さんにお願いしたいんですけども、私がこの間、田原さんに会ってお話ししたときに、連赤に市民権を与えるのは怪しいという話が出てきました。若松孝二の映画<sup>(注72)</sup>や、今日ここにいらっしゃいますけれども、山本直樹さんが『レッド』などを描かれて、連赤に一種の

(注72) 若松孝二監督、映画『実録 連合赤軍 あさま山荘への道程』のこと、2008年公開。

市民権を与えていると。連赤というのは、市民社会を震撼させたはずだというようなお話がちょっとあったと思いますので、そこら辺のことも含めてお話をいただければと思います。

## 連赤事件を日本の市民社会に回収する危さ

**田原** こんにちは。事件当時、森さんは中学生ですか。小学生だった田原です。実を言えば、若輩者がこういうところで話すことも大してないんです。ですから、個人的な話というか、個人的な思いを話すしかないんですけども、私は高校時代にいわゆる過激派でありました。当時は70年代の後半で、連合赤軍というのは、実を言うともちろん知っているんですけども、個人的にも実はあまりインパクトがあるような、ないようなという話でした。

それはどういうことかというと、もっとインパクトがある、暗い、黒い話がほかにあったからです。それは端的に申し上げますと、東アジア反日武装戦線<sup>(注73)</sup>のあの連續爆破事件<sup>(注74)</sup>と、革共同両派<sup>(注75)</sup>に社青同解放派<sup>(注76)</sup>を加えた肉弾戦であります。確かに、連合赤軍も十数名の方が亡くなられていますけれども、今申し上げた、特に後者のほうに至つては、約もう一桁上ですから、しかも、それがこのよう、ある意味、明るいライトが当たったような舞台で語れるということは、いまだにその端緒すらないわけです。まだ時代的に渦中でしたので、連赤よりもいわゆる内ゲバ<sup>(注77)</sup>、党派闘争、あるいは、殊に個々人の決意だとかうんぬんという話になったときに、やはり反日にはもう頭が上がらないというような気分で高校時代を過ごしておりましたので、つまり、連合赤軍が何か新左翼運動<sup>(注78)</sup>を体現というか、代表格のようなことというふうな感覚が、まず、私個人にはあまり、大きな事件ではありませんけれど

(注73) 72年頃より日本帝国主義のアジア侵略などを爆弾闘争で告発、74年8月には三菱重工ビルを爆破、8人の死者、数百人の負傷者を出す。“狼”“さそり”“大地の牙”などのグループがあった。

(注74) 1974年の三菱重工本社爆破事件以後、翌年5月まで東アジア反日武装戦線が引き起こした連續企業爆破事件のこと。

(注75) P28、注30を参照。

(注76) 社会主義青年同盟解放派（革命的労働者協会）のこと。

(注77) 内部ゲバルトの略。機動隊との衝突を外ゲバ、左翼陣営内部での暴力行使を内ゲバと呼んだ。

(注78) P18、注19を参照。



も、もっと根深い事件があるのでないかというふうに、いまだに思っています。

その上で申し上げるんですけれども、今、金さんにエッセンスの部分を全部言われてしまったので困っているんですが、この数年間、若松孝二監督の連赤の映画から始まって、個人的にぼーっと見ていて、何か連合赤軍並びに連合赤軍事件に市民権を与えようというような、何かこう雰囲気を感じて、大変嫌な気分でいます。つまり、それというのは、何もこういう極悪人に市民権を与えるなどというよ

うな話ではないんです。そうではなくて、事件が何かいわゆる日本の市民社会に回収されていくということは、非常に危ういのではないかというふうに思っています。

そのときの論理というのは、あの若い人たちには、実は正義を求めていたんだよとか、それはどこにでもいる純な青年たちだったんよ、みたいな言葉が付いたりするんですけども、笑わせるんじゃないよというのがあって、正義だと純だとなんていうことを求めてているのは、みんな結構求めているのであって、それぞれみんな求めているんですね。別に彼らだけに限った話ではない。だから、そんなことで回収されては困るので、危ない人であり、危ない話であって、私は全然いいと思っています。

それは何でかというと、連合赤軍事件というのは、日本の市民的平和みたいなものを根底から搖さぶったというか、ある種の城内平和を搖さぶったということに事件の意味があるのであって、いわゆる市民権付与「運動」にはなっていませんけれども、「的な動き」というのは、ひいきの引き倒しになるのではないかというふうに実は思っています。

そもそもひいきの引き倒しになるんじゃないのかということと同時に、もう一つ私が思っているのは、二重に危ないと思っていて、もう一重あるんですけども、それは何かというと、連赤に市民権を与えることによって、逆にこのインチキな日本の市民社会そのものを肯定しよう

という意味がそこに生じるのではないかということを一つ思っています。それは、今、森さんが若干、福島の話にも触れられましたけれども、例えば、今福島で放射能が危ないみたいな話というのは、ある種、タブー視が非常にされている雰囲気があって、あるいは、私は非常に怒ったんですけども、私は今一応、新聞社に勤めているもので、3・11の後に、一次ブント<sup>(注79)</sup>か何かを経験された、結構年配の方々が、福島行動隊みたいなのを作りましたよね。あれを聞いたときに、つまり、それというのは「福島 50」<sup>(注80)</sup>、それまで言っていた原発で頑張っている労働者、頑張れという、あの何か特攻隊的な、うまく言えないんですけども、この国の悪い癖というか、国家に絡め取られた爆弾三銃士みたいな、ああいう、自分は責任を取らないけれども人にやらせてやんや、やんやという、また、それを受けて喜ぶ、そういうものにとても重なって見えて、やはり一次ブントって駄目だなというふうに思ったんですね。それは、美智子<sup>(注81)</sup>さんは美しいかもしれませんけれども、ああいうのは駄目だと思っているんです。

それで、実は先ほど楽屋で大津先生とも若干お話しさせていただいたんですけども、確かに全共闘運動<sup>(注82)</sup>というのは大衆運動だし、あるいは、そこでの重なっている三派全学連<sup>(注83)</sup>も、ある種、大衆性を持つての運動はあったんだとは思いますけれども、ですから、中身は非常にバラエティーに富んでいるとは思うんですね。今日、端っこにいた仙谷<sup>(注84)</sup>のようなやつもいるわけですから、それはともあれなんですが、ただし、そこでのある種の私なりの捉えているエッセンスというのは、

(注79) 共産主義者同盟（通称：ブント）は、全学連を牽引していた学生らが日本共産党から離れて1958年に結成した新左翼組織。60年安保闘争の高揚を支えたが1960年解体。これを一次ブントと呼ぶ。66年に再建されたブントは二次ブントと呼ばれる。

(注80) 東日本大震災による福島第一原発の事故後も、同原発に残った約50人の作業員に対し欧米などのメディアが与えた呼称。

(注81) 1960年6月15日、60年安保闘争の中、国会突入に対する機動隊の暴力で殺された。東京大学のブント活動家。

(注82) 主に68・9年に闘われた大学闘争のこと。学生自治会を闘争主体とせず、任意参加の全学共闘会議を闘争主体としたので、こう呼ばれる。

(注83) 全日本学生自治会総連合。60年安保闘争後分裂、66年12月に社会主義学生同盟（ブントの学生組織）、社会主義青年同盟解放派（学生班協議会）、マルクス主義学生同盟中核派の三派を中心に再建されたのでこう呼ばれた。

(注84) 仙谷由人、弁護士、民主党国会议員、内閣官房長官なども。学生時代は東大全共闘活動家、構造改革派系新左翼統一社会主義同盟（フロント）の活動家だった。

68年から前後数年間の運動の輝かしいところというのは、初めて日本で市民社会、いわゆる本物の市民社会、ムラ構造ではない、えせ市民社会ではない市民、つまり、それが自立であるとか、自己決定であるとか、個人とかということが多分キータームになるんだと思うんですけれども、それを追求したというか、そこが大変意味の深いことではないかと思っています。

つまり、それはベトナム戦争<sup>(注85)</sup>が傍らで起きていて、そこで沈黙していること自体が、つまり加担しているのではないかと。平和な日本の市民社会そのものが、ベトナム人民から見たときにそれは加害者ではないかというようなことを個々人に突き詰めていく。それに対してすぐきれいな解答なんかないわけですし、右往左往せざるを得ないわけなんですけれども、そのことに私は非常に意味があったと思うんですね。つまり、おまえはどうなんだという話だと思うんです。

それを考えたときに、連合赤軍に限りませんけれども、やっぱり一つの党派の問題、あるいは党の問題、前衛党の問題だと私は思いますけれども、その意味では、68年が突き付けていた話というのは、ある種、前衛党神話みたいなものに対しても弓を引いたんだと思いますが、それが少なくとも連赤の過程を外側から見る限りにおいては、再びムラに回収されていく。

それで、青砥さんが以前、戦旗<sup>(注86)</sup>の荒さん<sup>(注87)</sup>の、日向の荒さんのインタビューに、誰か一人、こんなことをやっていては駄目だというふうに言えば良かったんだけれども、そう言う勇気が結局なかったということではないかというふうにお話しになられていたように記憶しているんですが、まさに私はそれは正解だと思うんですけども、同時にやっぱりムラ、あるいは国家、国家内国家のような山岳アジトの中でそれが圧殺されていくというか、口にも出せない状態がつくれられていて、それが逆に言うと、日本の市民社会なわけですから、その意味で、今の妙な「連赤も大変だったね」というブームに対しては大概にしてくれというふうに個人的に思っています。以上です。

(拍手)

**司会(金)** 拍手が多いですね。今、田原さんのほうの話がありましたけ

(注85) 1965年以後のアメリカのベトナムに対する北爆、地上戦のこと。

(注86) P9、注3を参照。

(注87) 荒岱介、共産同戦旗派の指導者。組織名日向翔。11年5月3日癌により死亡、65歳。

れども、要するに、連赤のこういう事件とかそういうものに対して市民権を与えようとしているのは嫌な気分だというのは、結局、それ自体が市民社会に回収されてしまっていることではないのかというような問題提起があったと思います。実際に植垣ぐらいのこんな悪党も、あちこちのマスコミに出たり、愛嬌を振りまいたり、お店で人気者になったりしているとか、私なんかも実際、本を書いて、赤軍派のカリスマ教師とか、そんなことで市民社会にしっかり回収されているような面があるのかなと、そういう反省も込めてここからもうちょっと話を進めていきたいんですけども、大津さんのほうから一つは、要するに、赤軍派、あるいは、いろいろな物事の運動の中に技術論、プラグマチズムが必要なのではないかという提案が一つありました。また、森さんのほうからは、要するに、組織的な犯罪は皆似ているんだというような話もありました。田原さんのほうからは、要するに、市民社会を根底から搖さぶった運動のはずが、それがムラ社会や国家に回収されていっている、ということは、連赤も結果としてそういうものに回収されていっているというようなお話だと思うんですけども、そこら辺に関して幾つか意見を頂ければと思うんですけども、当事者として雪野さん、どうでしょうか。森さん、大津さん、あるいは田原さんの話のどこかで話していただいて。

我々の中にもオウム事件のような相互作用があった

**雪野** 私も今回、事前の勉強として、『A3』<sup>(注88)</sup>を読んだんですよ。非常に面白かったです。その中であれに対して反発する人たちの論理、裁判もあんな悪いやつならとにかく早く決着をつけてしまおうと、麻原に訴訟能能力があるかないか、これは別に免罪しようという話ではないんですけども、そういうことに異議を唱えた森さんに対して、そんなことはないはずだと、裁判官が面接したらうんうんと言って、確かに分かった様子だったというようなことで進めてしまったというのはよく分かりました。

それから、非常に似た要素があるというのは、そうだと思います。ただ、同時に違う要素もたくさんあるわけで、これは森さんも否定はしないと思うんですけども、そういう意味では非常に多様で、いろいろ

(注88) 森達也によるオウム真理教をテーマとした映画『A』『A2』に続く第3弾、書籍『A3』集英社インターナショナル、10年刊。

な側面があるということに全く同感です。それがまさに我々が「全体像を残す会」を作つて、いろいろな人たちの、いろいろな角度からの発言と記録を残そうとしている理由でもあるわけで、そういう意味で議論というか、『A3』を読んで感じたことぐらいの話なんですけれども、まずちょっとこれを一つ申し上げたいと思います。

それから、麻原と信者たちの相互作用。これは、言葉で言うと簡単ですけれども、具体的にその様相が非常に詳しく書いてあるんですね。同じような要素は、やはり連合赤軍の中にもありました。例えば永田と森の相互作用。最初に二人が会つて、最初に会つたのは、恐らく70年の末の柴野さんたちの事件<sup>(注89)</sup>の直後なんですけれども、そのときはあまり話は弾まなくて、半年後の6月ぐらいにまた会つているんですね。それから、7月に会つて、そのときに永田が二人（早岐、向山）の問題<sup>(注90)</sup>を森に相談しているんです。そうしたら、森さんは、それはすぐに処断すべきだというようなことを軽く言って、永田のほうは永田でまた、森恒夫に非常に傾倒している時期でもあったので、時期というか、それ以後、傾倒するんですけれども、森さんもそう言つてはいるかということも含めて、向山君<sup>(注91)</sup>と早岐さん<sup>(注92)</sup>に対する処断を進めてしまった。後で森恒夫はその話を聞いて、あいつらはもう革命家じゃないよと、とても信じられないということを坂東君<sup>(注93)</sup>に述懐しているわけなんですね。その相互作用は全く同じような形だったと思います。

それから、我々の内部にもやはり相互作用というのはあったわけで、私は、その6月ぐらいの時期に、永田、ほかの諸君とかなり議論をしています。どういう方向で武装闘争をやるべきかということについてです。ただ、そのとき私自身も武装闘争をやること自体については異議もなかつたし、論理的に異議もないという以前の問題として、非常に「情」ですね、感情、それから、感覚の点で沸々とこうすることをすべきだというものが内面にあったので、論理的にも十分突き詰められなかった。ですからこの運動はこのままではもたない、いつか壁に突き当

(注89) 70年12月18日、革命左派の軍事組織=人民解放遊撃隊の3人が川島豪奪に向けた銃奪取を目的に、上赤塚交番を襲撃。反撃されて、革命左派軍事委員長柴野春彦が殺され、他2人も重傷で逮捕された事件。

(注90) 向山君、早岐さんが山岳ベースから離脱したため、その対処を考えていたこと。

(注91) 向山茂徳、革命左派の活動家。

(注92) 早岐やす子、革命左派の活動家。

(注93) P25、注27を参照。

たると思っていましたが、二晩議論しても通じないので、最終的には自分の意見を別に撤回しないんだけれども、多数意見だからしょうがない、まあ、従うよという形で6月の論争というのは矛を納めたわけなんです。

ですから、私は革命左派の中での異分子で、武装闘争についての考え方、捉え方の違いがあったんだけれども、全体としては、ああいうことをやることについては異議がなかつたので、そのまま引き続いて同行したわけです。けれども、確かに運動としては続かなくて、壁にぶち当たつたんですけれども、あのような形で壁にぶつかるとは全然思っていませんでした。そういう意味で、私も相互作用の中にいたんだとは思います。



やはり森・永田にこそ責任があるのか

**司会（金）** 今、森さんがお話しされた話は、若干大きいと思うんですね。今ここに青砥さん、植垣さん、前澤さん、三人がおるわけですけれども、三人は山岳ベースで、要するに、森恒夫、永田洋子と共にある意味で寝食を共にしているわけです。そうしますと、人間としての感情というのが非常にどこかに大きくあると思うんです。それについて少しシンプルに伺いたいんですよ。いろいろな錯綜した思いがあるでしょうから、そんな簡単に言えることではないと思うんですけども、どうでしょうか、例えばシンプルに聞いてみると、森・永田にこそ責任があるんだとお考えになるでしょうか、ならないでしょうか。まずそこから始めて、意見を頂ければと思うんですけども、前澤さん、どうでしょうか。

**前澤** 森さんはあまり知らないので、寝食はある一定期間、共にしたわけですけれども、そのときは指導部と俺たちというのは没交渉というか、命令されるだけみたいな状態で、ほとんど会話をもないので、永田に

ついて言いますけど、やっぱり永田に対する俺たちの責任というのは、あの人に無理やり押し上げたというか、要するに、一番被りやすいシャッポとしてある意味利用したというかな、我々の下部の活動家の、簡単に言うと、イケイケの状況のときにはかの幹部がちょっと戸惑っているのを、永田ならイケイケといえばいくだろみみたいな形で、まず彼女をトップに上げてしまったというのは、我々の責任だと思います。

**司会（金）** ちょっと一言頂きたいんですけれども、前澤さんは、永田洋子に対していい感情を持っていないというお話をありましたけれども、それについてちょっとだけお話をしを……。

**前澤** 別に彼女個人に対していい気分を持ってないということはないですけれども、ただ、結構、党のほうから方針を持ってくるのが永田で、それを受けて大衆運動をやっていくほうの上のほうにいたもので、かなり接触はあったんです。それで、要するにいろいろな面で非常に欠陥のある人だという認識はしていました。だけど、逆に我々と接触が多いので、我々の望む方針を彼女なら出してくれるのではないかと。そういう意味で、ある意味、利用するみたいな形で彼女を推したというのはあるんです。

**司会（金）** 結局、自分たちが永田洋子を推したというような形になったというふうにお考えだということですね。植垣さん、どうですか。

**植垣** いろいろあるんですが、例えば、僕は森さんとやっぱりいろいろな問題で徹底的に論争しなかったというか、一番いい典型的な例が、実は福島県の白河の駐在所を襲撃しろという命令があって、その問題をめぐってかなり議論になったんです。何で駐在所なんだ、何で駐在のお巡りさんをやらなければならぬのかと、そんなの階級攻防と関係ないじゃないかというところから始まって、かなり議論しました。でも、結局その議論も中途半端で終わってしまったなというのは、僕ら自身が、ではその闘争を日和った(注94)のかと言われるのが嫌でやったというか、それで結局、引き受けはしましたが、最終的にはいろいろなことがあってそれをしなくてほっとしたんですが……。

だから、そういうときに何で銃を使わなければいけないのかとか、そういう問題についてもかなり議論しました。したんですが、残念ながら、最終的には中途半端な形で終わってしまったし、その後、もう一つの問

(注94) 日和見主義（空模様を見る日和見が転じて、形勢を窺い有利な方に従こうとすること）から派生した言葉で、状況が厳しくなったり闘争が激しくなった時に、逃げる、避けることを言う。

題は、革命左派で二名の処刑があったときに、実は同じ問題を赤軍、僕らの部隊も抱えていた。ところが、その場合、僕らは殺さなかった。そのことが逆に、森さんからすれば、革命左派に対する一つの負い目になってしまった。なので、自分がより内部規律を強化するというところで、より積極的に行動せざるを得なくなってしまった面もあるのだろうなと思っています。



もう一つは、連赤問題がやっぱり市民権に当たるのはおかしいというような、それは確かにそのとおりだと思うし、『レッド』が文化庁で受賞(注95)したというのは、こんなことがあっていいのかなと思ったし、逆にそんな受賞でもって山本さんがめげてくれたら困るなど、市民社会に妙に迎合的になってしまわないようにと願ったりしたんですが、逆に、なぜ内ゲバ問題や東アジア武装戦線の問題、あるいはオウムもそうなんですが、なぜこういう形で語られることが少ないので。

これは、当事者の歩んできた道の違いが大きいのかなと僕なんかは思っています。というのは、連合赤軍に関わってきた人は、意外といろいろな大学闘争で、そこでは指導的な立場にいた人なんですね。要するにどういうことかというと、大衆運動を指導してきた人が多かった。そういうことが、僕なんかは赤軍派に入って、一応、弘前大学では理学部の代表みたいに行動していたのに、軍に係ると全くの一兵卒として扱われるわけですね。それまでの自分の実績なんて何の関係もないわけですよ。そういうことの、連赤問題というのはああいう形で終わってしまった後に、やはりその問題を考えなくてはいかんと。そういう意味で、この問題を語らないで終わらせてしまおうなんていう方向にはいかなかつた大きな理由ではあったんだろうと思うんです。だから、市民権を得ているというけれども、僕ら自身が積極的に市民社会に向かってぶつけてくるという、そういうことを意識的にやってきている結果が今に至っているのではないのかなと思います。取りあえず、そんなところで。

(注95) 2010年に文化庁メディア芸術祭マンガ部門優秀賞を授賞したこと。

**司会（金）** 青砥さんに話を伺いたいんですけれども、青砥さんは、こういうことに対して今まで公に話してきたことがほとんどないんですね。植垣さんのほうは、さまざまな書物や対談で語っていることがたくさんあると思うんですけども、同じ同級生ということもありますけれども、青砥さんの立場から見てどのような形であったか、ちょっとお話ししていただきたいなと思います。先ほど出たのは、一つは森さんからお話があった、例えばオウムのことであれば、麻原一人が起こしたことではないんだと、要するに、周りが一緒に共同作業だったんだというような話があったと思うんですけども、連合赤軍自体もそういうものだったのかということについてちょっと意見を頂きたいんです。

**青砥** 先に田原さんがおっしゃった市民権の問題について言いますが、連合赤軍自体、あるいは、その関係のものが市民権を得ているかのように見えるというのは、要は、発信者の問題ではなくて、それを受け止める市民社会の意識の問題というふうに私は理解しましたけれども、その話はちょっと俺たちの肩の荷に余ると、そういうふうにまず思います。植垣がいろいろなところで露出する、それは、植垣が今言ったような考えがありましたけれども、それはごくわずかな話であって、それを受け入れるというか、取り上げるほうの意識の問題、社会構造の問題だというふうに思います。

相互作用ということですが、基本的には連合赤軍の山の中で起こった事態は、それに先行する革命左派の二名の処刑にさかのぼるのかもしれませんけれども、取りあえず、南アルプスの山岳で軍事訓練をしようというときに、革命左派と赤軍派の間で両派の間の議論といったものがあったわけです。そのときに私どもは新左翼諸党派、我々ももちろんそうですけれども、その常として、資本主義の現状分析から議論を始めて、綱領的な問題、そういった議論をしたんですけども、それに対して永田さんが、何か搦め手といいますか、一人一人の資質、作風の問題からどう建設をしていくんだというような議論を、後になって整理するとそういうことだったんですが、持ち出して、我々は頭が固まってしまって、何を言われているかさっぱり分からなかつたんですね。それで、批判されること自体、そのこと自体については分かるけれども、それが党建設とか、軍建設とどう関わっていくのかということについては全く分からない状況があったんです。

▲

その中で森君と坂東君が革命左派の榛名山<sup>(注96)</sup>のほうに行くわけですけれども、新党をつくったという、もちろん事後報告なんですけれども、その新党をつくるやり方というのが、いわば現状分析であるとか綱領的な議論といったものは全然ない、見えてこない中で、言ってみれば、そういう個人批判、総括要求というような形が党建設だというような話になっていったわけですけれども、その中でもちろん森さんと永田さんの間でどういう相互関係があったのか、想像はできますが、具体的には見えてこない。

ただ、この二人に主な責任があるのは、これはもちろんなんですが、その中でそれを我々が不満に思ったりおかしいと思ったりしながら、それを受け入れてしまう素地といったものがやっぱりあったわけです。それを相互作用といえば相互作用だと。そのことが一体どういうことなのかということを考えてきたのが、先ほど二部で申し上げた、私の基本的な問題意識だというふうに思っています。

ですから、人間が係るどんな事象も、この人が原因でこういった結果が起きたというのは、単純な殺人事件でもない限りあまりないわけであって、特に組織の中で起きたものは、その組織を構成する人間とそれを指導する人間の間の、いわば、時には反発しながら、時には協調していく、そういう相互作用というのは必ずあるんだというふうに私は思います。歴史的に見ると、例えばナチスが政権を執っていく過程もそうだろうし、日本が大東亜戦争<sup>(注97)</sup>に突き進んでいいく過程も多分そうだったんだろうと、そういうふうに思います。

やっぱり、「やめよう」とは言えなかったのか？

**司会（金）** 今四名のほうから話があったんですけども、大津さん、田原さん、森さんのほうで当事者にこれは聞いておきたいねとか、これについてどう考えているのかというようなことがありましたら、何かちょっと頂きたいなと思うんですけども。田原さん、お願いします。

**田原** もったいないので、つなぎで。もちろん、今、青砥さんがおっしゃったように、私が言っていることは何も、あるいは、植垣さんがメディア

(注96) 群馬県北群馬郡伊香保町(06. 2 ~ 渋川市)、榛名山中の沼尾川沿いに革命左派が設定した山岳アパートのこと。

(注97) 日中戦争、太平洋戦争の大日本帝国側の呼称。欧米に対抗し、日本を中心とする大東アジア主義を掲げて戦争するという立場を反映。

に出るのが悪いなんていうことは一言も言ってないわけで、つまり、そういう取り上げ方、ブーム、あるいはそういったものに感化されないようにしましようぐらいの話なんですね、その意味では。ですから、別に金さんを含めて責めているわけではありませんので、そこは誤解のないようにしていただきたいというふうに思います。

それと、やっぱり青砥さんに一度、前にもお聞きしたかもしれないですけれども、やっぱり言えないものですかね、「やめよう」と。

**青砥** そのことを表現したのは、二通りあると思いますね。一つは、山から離脱するという、そういったやり方ですね。もう一つは、先ほど申し上げた山田さん<sup>(注98)</sup>です。実は、森さんが自己批判書の中でそれを書くまでそういったやりとりが山の中であったということは、当然我々は知りませんでした。ただ、山田さんは、もう一回申し上げますが、「死は平凡なものだから、死を突き付けても、総括要求にはならないんだ」という発言を山中のCC会議<sup>(注99)</sup>でしているということなんですね。森さんは、これを多分鎧袖一触というか、簡単に放り捨てたんだと思います。

ここで誤解のないように言いますが、山田さんが死を平凡なものだというふうに思っていたはずはない。そんなことはあり得ない。ただ、そのような形でしか批判ができないという状況はあった。それは先ほども言ったように、新党といわれるものが、その中の一人一人のメンバーに対して死を突き付けてもいいんだという意識を持っていたということ。どうしてそういうことが可能なのか。それは、突き付けるほうにも問題があるが、それを構成している我々にもやはり問題があった。私が申し上げているのはそういうことなんですね。

それで、「やっぱり言えないもんですか」と。それは、言えば良かっただと思いますよ。言えなかつたということですね。それは、あとはほかの人聞いていただきたい。

**司会（金）** 重たいですね。森さん、お願いします。

**森** 先ほどちょっと言った『311』という映画なんですけれども、3月にタイの映画祭に招待されて行ってきました。行ったからには観客とのQ & Aがあるんですね。そこで特に去年、3月11日以降、日本では「不謹慎」という言葉がとてもメディアも含めて頻繁に使われるようになります、と。例えば、石原の「花見は不謹慎である」とか、あるいは、

(注98) P21、注22を参照。<sup>1</sup>

(注99) P21、注23を参照。

鉢呂経産相が不謹慎な発言で辞任みたいな、割とそういったような雰囲気が一気に強くなりましたよね。そういうことをちょっと解説したんですが、タイ語の通訳の人が困っているんですね。どうしたのと聞いたら、不謹慎は訳せませんと。例えば

インモラルとか、あるいは宗教的にちょっとこれは問題があるとか、もちろんイリーガルとか、いろいろな言葉はあるんですけども、そのタイ語の通訳の人は、日本にも長くいる人なんですけれども、「不謹慎」という日本語のニュアンスはタイにはないと言わって、ちょっと考えたんだけれども、「不謹慎」って英語でもないんですね。とても日本独特の、日本文化、日本人につながりやすい言葉だと思います。つまり、これはどういうことかというと、要するに不謹慎というのは基準がないんですよ。みんながこれをやっているときに違うことをやるというのが不謹慎だろうという、なぜみんなと同じことをしないんだという、そういういた意味合いです。

僕はこれは、決め付けてしまって申し訳ないけれども、さっき田原さんが言った、インチキな日本社会という部分の大きな要素だと思うんです。とても同調圧力が強い。なかなか思っても言えない。まさしく連赤の事件が、山岳ベースのリンチが、そういった中でも多分もうちょっとみんなが言えれば、若松さんの映画の中では、あさま山荘の後に加藤三兄弟<sup>(注100)</sup>の一番下の弟が、「みんな勇気がなかったんだ」という、あれは実際そうは言ってなかつたらしいですけれども、やっぱりそういうふうな、どうしてあのとき言えなかつたんだろうという、つまり、連赤の中ですら日本社会のそういうネガティブな、一番普遍的な属性を持ってしまっている。それによって起きたこの連赤の事件そのものは、明らかに日本社会に対して牙をむいた、突出した事件であったのに、それがまたもしかしたら、この日本社会の中に大きなループを描きながら

(注100) 加藤能敬、加藤倫教、加藤Mの兄弟のこと。長兄能敬は京浜安保共闘活動家、和光大出身、72年1月4日権名アジトにて殺害される。22歳。倫教、Mは中共安保共闘活動家、浅間山荘銃撃戦に参加。加藤倫教『連合赤軍 少年A』(新潮社)を03年刊。



返ってしまうんだったら、それはないだろうというのは、それは僕はとても強く同意しますね。

だから、そういう意味では、そういった普遍性を持った事件なんだということをしっかりと刻印した上でしっかりと着地をしてほしいなど。着地をするための催しであれば、絶対にこれは大きな意味があると。それがないのであれば、確かに市民社会に溶け込むのであれば、すべてが、外郭がにじんでしまいますよね。その最も行ってはいけない袋小路だと思います。

**司会（椎野）** 田原さんの質問で、今、青砥さんだけ答えたんですけれども、多分、前澤さんと植垣さんだと、違う答えが返ってくると思うんですね。

それは、今日、会場にいらっしゃっているんでしょうね。朝山実という人が書いた、『アフター・ザ・レッド』<sup>(注101)</sup>という本がありまして、それは、ここにいる三人プラス加藤倫教さんの、山本直樹さんが描いている『レッド』の後を描いているから『アフター・ザ・レッド』といつているわけなんですが、その例えは前澤さんのインタビューを読むと、つまり前澤さんは、あの現場から逃亡した人なんですね。それで、植垣さんと青砥さんは最後までいた人なわけですよね。言えなかったのかということに対して、逃げたというのは一つの解答だと思うんですね。

そこに差が何で出たのかなということを僕はいつも考えているんですけれども、そうすると、二つのあの本の中にある程度答えがあって、後からもうちょっと本人にきっちり聞いてもらえばいいんですけれども、前澤さんは、「そんな共産主義化なんて、端から信じちゃいないよ」と言っているわけなんですね。だから、それが多分、山の中で行われた事態から逃げたということにつながったんじゃないかと思うんです。

植垣さんは、植垣さんが山の中に入ったときに最初にもう三人ぐらい総括された後で入っていって、そのとき植垣さんが書いているんですけれども、そのとき自分はどう思ったかというと、自分の意識は遅れていると思ったというふうに言っているんですね。その遅れていると思った意識がずっと最後まであの場にいたということにつながり、ということではないかなというふうに、朝山実さんの『アフター・ザ・レッド』という角川から出た本からは読み取れたんですけども、本人たちにちょっと聞いてみたいなと思うんですけれども。

**前澤** 多分、一番最初に逃げたのが岩田<sup>(注102)</sup>というやつで、同じ時期

(注101) 朝山実『アフター・ザ・レッド 連合赤軍兵士達の40年』12年角川書店刊。

(注102) 岩田平治、京浜安保共闘活動家、連合赤軍兵士。72年名古屋へ調査中に離脱。

に同じことを考えて、一度は帰ってしまったんですよね。そのときは、ともかくもう生理的に嫌だという、リンチがともかく嫌だという。

では、何で嫌で、どうすればいいかという答えが出ない。そういう状況で悶々としてしていて、10日ぐらい一時期組織を離れて、結局、結論が出ないで、やっぱり仲間の命を奪ったこともあったし、脱落もできないというあれで、一度は帰ったんですよね。最終的に、本当にあさま山荘のちょっと前に脱落するんですけども、そのときも結局、最初に思った、ともかくもう嫌だという、感覚的に受け入れられないということからでした。

それで、椎野さんが言ったように、共産主義化というのは、最初からこれはインチキな論理だなど、言い訳的な論理で、後付けだなど。実際、殴ったのは、多分しっぱ切りというか、彼らから見て、脱落の可能性のある人間を先に切ってしまったという、多分それが本当の理由だらうなというのはあったんですけども、でも、共産主義化とか言われて、向こうが一応、論理で説明して、それに反論する論理を持ってない以上は、変に抵抗したら、やっぱり自分もあなるというのもないわけじゃなかっただし、結局は、何で言えなかったというのは、一つは、よりいい方針を出せないという、どうしようという提案ができるないというのと、恐怖もないわけではなかったと思うんです。

実際、一人、二人死んでいった中では、もうやめようと言うのは、それこそ命懸けで警官と撃ち合うという、そこで死ぬのは覚悟していたけれども、ああいう形で死ぬのはちょっとやっぱり正直嫌だと。

**司会（金）** それは、一つの個人という意味での勇気ですよね。

私なんかもずっと考えましたけれども、結局、自分は山に行ってないんですけども、自分が山にいたらという考え方をしますよね。そうすると、僕はやっぱり青砥、植垣と同じようにいただろう、あるいは、既にここに座っていることはできなかっただろうと考えざるを得なかつたところがありますけどね。

**司会（椎野）** 植垣さんにぜひ。

**植垣** その問題は、実は僕もあちこちでいろいろ形で語っていますが、率直に言って、あの場から逃げるというか、要するに共産主義化の問題から逃げたら、自分自身も駄目になってしまふんだというのが大きかったです。

**司会（金）** それは、革命家として承認されなくなってしまうというような意味で捉えていいんですか。

**植垣** はい。僕なんかはしょせん兵隊でしたから、別に革命家になろうなんていう意識はなかったんですが、とにかくこれからの闘いを担う上で共産主義化から逃げたら、自分自身が闘うこともできなくなってしまうだろうというのが大きかったです。

その中でせいぜい思うことは、例えば山田さんが縛られたときに僕と青砥の間で交わした会話が、「またか、嫌だな」と。こういうちょっとした会話しかできないですが、それでもそういうことが言えたわけですから、その程度で、だから、なぜ反対できなかったのか、それは、率直に言えば、共産主義化というこの論理を僕らは突破するものを持っていなかつたということですよ。そういう形でやれなかつたら反対することにならない。

また逆に、むしろ共産主義化のやり方というか、共産主義化という、この問題がおかしいのではないかと言っても、森さんは取り合わなかつたと思うんです。だから、青砥もそうだし、僕もそうだけれども、何をやるかというと、おまえらは遅れていると、遅れているからほかの人から話を聞いて教われという形でしか扱われなかつたということですね。だから問題外。

森さんから見たら、僕らが反対しようが何をしようが問題外でしかなかつたということですね。

**司会（椎野）**それを伺うと、僕は、連合赤軍とオウムがそんなに似ているとは思わないんだけれども、一つ今の話で思うのは、中心にある教義みたいのがあって、それを自分が理解できないとか、それに沿つた行動ができないのは自分が遅れているからだというふうに思つて、自己を滅却して行動してしまうという今おっしゃったこの構造はオウムの場合と非常に似ているんじゃないかなというふうに今思つたんですけれども。

## 革命戦争の具体像はあったのか

**司会（金）** 大津さん、お願いします。

**大津** 具体性、具体的な方針を、これは一人の人が自分の日常生活で出すことも、あるいは政治的なグループが出すと、方針を出すということはものすごく重要なことだと思うんですね。

今はこの場で初めて思い出したんですけども、1969年の9月5日



だったかな、日比谷公会堂で全国全共闘連合<sup>(注103)</sup>の結成大会というのがあった。

**司会（椎野）** 9月5日ですね。

**大津** あのときは、各大学に全学全共闘会議という組織があつて、それが初めて全国組織を作るという結成大会だったんだけれども、その場に赤軍派が初めて登場したんですけども、あのときにやっぱり私も当時、一つの大学で関わつたけれども、みんな方針がながつたんですね。では、全共闘連合と

いうのができたと。では、どうするんだと。みんな決意はいろいろなことを言つていたけれども、具体的にこれからどうしていくのかという方針が全く出なかつた。

その中で二つだけ出た。一つは、確か、京大のパルチザン五人組<sup>(注104)</sup>とかいう、今後、五人で日常市民社会の中で五人組のパルチザン組織をつくつてやつていこうというような方針。これは具体的な方針。

もう一つが赤軍派だった。これは武装蜂起すると。具体的なんですね。銃と爆弾を持って革命戦争を始めると。これはまた具体的なんですよ。ところが、當時も情緒的には分かつたんだけれども、武装蜂起の前に、前段階武装蜂起<sup>(注105)</sup>と入つた。本当の武装蜂起ではないと。こうなると、結局、文化運動をしているのではなくから、では、武装闘争をやって本当に権力を取れるのかとか、僕らは同時代でもそれは無理だろうみたいな感覚はあったわけです。前段階というところで感覚的に辛うじて引っ掛かつたんですね。ああ、本当の武装蜂起ではなくて、彼らは玉砕するんだと。後を期待して、まず捨て石になると。

(注103) 69年9月5日、全国178大学2万数千人を日比谷野外音楽堂に集めて結成。議長に山本義隆東大全共闘「代表」、副議長に秋田明大日大全共闘議長を選出。が、書記局を実質八派で構成したように、新左翼のセクト連合だった。

(注104) 京大パルチザン或は京都パルチザン。全共闘運動の極点で京大の赤ヘル系ノンセクトを中心として、武装闘争の展開と全共闘運動の地域展開とを志向した。滝田修が提唱したと言われる。

(注105) P39、注58を参照。

これになると、僕が連想するのは神風特攻隊なんですね。あの戦争のときに既にサイパンが陥落して、軍としては組織的な軍事作戦の立てようがなくなった。本来、ギブアップして降服するところをまだやった。そこから出てきたのは神風特攻隊。これは特攻隊で体当たりしていった人の心情とか、そういうものは非常に人の心を震わせるものがあるけれども、それを上から作戦として承認した人間は、許し難い人間だと思うんです。

**司会（金）** 我々もその神風特攻隊を革命的敗北主義という言葉で……。

**大津** だから、先ほど言われた、それもそういう意味ではものすごく日本的なんです。だから、当事者たちに聞きたかったのは、これは多分答えは分かっているんだけれども、本当に革命戦争をやろうとして、死ぬことを決意して山の中に集まつたけれども、では、実際やってどうなるんだということを具体的に考えておられたのか、ただ一戦やって死ねばいいと思っていたのか、その辺を聞きたいんですね。

**司会（金）** 時間的なこともあるので、簡単にお願いします。

**青砥** 山に結集したころは、既に一発、前段階であれ何であれ、武装蜂起みたいなものをやって玉砕するというような考えを持っておらず、持続的な革命戦争を担えるゲリラ部隊といったものを作っていくと、そういう方向に変わっておりました。

ただ、その闘争のやり方が、あくまでも銃を持って警官を殺して銃を奪ってくるという、これに固執していたものですから、一発やったら、実際にはやれることしか方針として出してはいけないというのが全体にありますけれども、これはやれるような方針ではなかったわけで、万一、やってしまった場合はそれで終わりだったでしょうね。

**植垣** そういう意味では、前段階武装蜂起というものに対して現実にはとても実行できるものではなかったというところからゲリラ戦の世界に移っていくわけで、理論よりも先に行動が先行していたという、そういうことを僕は感じますね。それで、指導部が、では、それ相応の主張を展開してくれるかというと、それはしてくれない。だから、余計ますます手探りでやっていくしかない。そういう中で実感したことは、要するに党派がやる武装闘争では駄目だという、だから、そういう中でどういう闘争をどう展開していくかというところで漠然とした構想しか持っていたのが現実です。

だから、その辺の問題を本当は当時、僕なりの意識では、ほかの赤軍派のゲリラ隊は全部つぶされたのに、何で僕らの部隊だけが残っているの

かと、しかも単純に逃げ回って残っているのではなくて、ちゃんとそれなりに作戦決行ルートを取りながら生き残ってきたと、この違いはどこにあるのかということを考えてみたいというところまでの発言はした覚えがあります。ただ、それ以上は考えられなかった。

**司会（金）** 植垣自身は、今、大津さんの話にもあったけれども、実際に武装闘争といつても、今、青砥のほうからも話が出たけれども、基本的には殲滅戦(注106)といっているわけですから、一方で警察官を殺すと、殺して武器を奪うということですよね。

**植垣** その殲滅戦という問題で言うと……。

**司会（金）** 植垣自身がそういう展望とか、それをやり切るというその気持ちとか、そういうものがあったのかなということをいうんだよね。

**植垣** もちろんありましたよ。だから、その殲滅戦というものの考え方。なぜ白河の交番を襲うことに僕がものすごく抵抗感を持ったかというと、それがとても殲滅戦とは思えなかったからですよ。革命左派の山岳ベースに行って爆弾を作りに行つたときに、坂口さんから殲滅戦をどう考えているのかと質問を受けたことがあって、そのときに僕は、殲滅戦というのは、ある地域、あるいはある国の軍隊を戦闘不能にさせることだと。だから、一言も殺すということは言ってないわけですね。

**司会（金）** ちょっと簡単に答えてほしいんですけども。

**植垣** まあ、そんなわけで、だから、銃による殲滅戦と言われて、僕もそれをやらなければならないとは思っていましたが、それが中心的な闘争であるというのは、当時はまだ思っていなかったですね。それで、共産主義化というのが出されて、しょうもねえなというところもあったけれども。

**司会（金）** 前澤さんはどうですか。

**前澤** うちのほうは赤軍と違つて、初めからああいう形態、ゲリラ戦をやることでしたから。ただ、逆にうちは親分（川島豪）(注107)が赤軍派と接触するうちに蜂起なんて言ひだして、あいつ、おかしくなったんじゃないかなというのがあったんですけども。

それで、山に入ったというのは、あくまで都会で生活できなくなつて入つたので、初めから山でゲリラをやるという考え方はなかつたですね。ただ、現実的にはあそこから出撃して、あそこへ帰つてくるしかないと。実力的にはそういうことだろうなということで、一回は、作戦を立てて

(注106) 元は軍事用語であり、敵の戦闘能力を完全に無くすまで叩きのめすこと。が、この場合には、ほとんど相手（警察官）を殺すことと同義で用いている。

(注107) P23、注24を参照。

やる直前に一人逃げてしまって、結果的に中止したんですけども、作戦を立てていく中で一回はできると思った。

ただ、何回目につぶれるか、二回目にいく前につぶれるか、一回目の作戦自体は成功しても、やっても数回のうちには組織は壊滅するだろうと思っていました。

**司会（金）** もう時間がほとんど来ているんですけども……。

**青砥** 一言だけ。別に殲滅戦とか闘いをやること自体が目的だったわけではなくて、そのことを通して、そういう闘いをやることによって国民の間に味方が増えてくる、階級決戦みたいな言い方をしていましたけれども、それはやっていかなければいけないという考えが強かったです。それは、山に入る前までの私と森の間の認識であって、山に入つて以降はそういう討論をしてないので、ちょっと分からぬですね。だから、新党結成というのは、私にとっては大変意外でした。

**司会（金）** ちょっと時間がないんですけども、先ほど……。

**森** 今の流れですけれども、つまり、人を殺す、もしくは自分が殺されるかもしれないという思いは現実ですよね。その現実は認識はしながらも、先ほど、大津さんは特攻を例に出しましたけれども、特攻というのは、要はお国のためですね。もし万が一、そこではばっくれてしまったら、今度は自分の家族がどんな目に遭うか分からないと、そういう圧力もある。そういう圧力もありながらも、実は特攻に行って、途中で不時着してしまったり逃亡したというのは結構いるんです。

あるいはオウムの場合、これはオウムだけではない、宗教全般そうですけれども、宗教というのは死と生をひっくり返しますから、死んで極楽浄土、もしくは、輪廻転生みたいな、だから、イスラムの自爆テロがそうですね。そういう潤滑油があるわけですけれども、皆さんの場合はそういう現実を目の前にしながら、でも結局は逃げずに、たまに夜中に女の子のお尻を触ったり触られたりしながらも。前澤さんみたいに逃亡した方もいらっしゃるけれども、意外と逃げてないなという。

僕は、本当はもっとみんな逃げてもよかったんじゃないかと思うんですけども、なぜここまでとどまってしまったのかというのがやっぱり不思議ですね。

**司会（金）** 本来、それについてお話ししたいんですけども、ちょっと時間がなくなってしまいましたので……。

**司会（椎野）** 10分ぐら<sup>い</sup>延ばしましょう。

**司会（金）** やっぱりここはどうしても椎野さんとしては延ばしたいと。

## なぜ逃亡せずに山に戻ったのか

**司会（金）** 要するに、今の話はこういうことですよね。本来、ある時点で逃げることもできただろうと。例えば、今ここにいるメンバー全員、一度は山を下りていますから、そういうチャンスはあったわけですね。実際に前澤さんなんかは一度逃げているんですよね。逃げているんですけども、また戻っていったんですよ。何で戻っていくんだと世間の人には当然思うでしょうけれども、戻るには戻るなりの理由がちゃんとあるんですね。

亡くなった山田孝さんというのが1月の半ばぐらいに山を下りているんですけども、先ほど青砥君が言っていた、「死は平凡なものだから」と言った方なんですけれども、下りてきたときに私は会っているんですね。それで山田さんが、「今は来ないほうがいい」と私に言ったのですから、私はその世界から免れることができたわけですけれども、山田さん自身は戻っていったんですね。そのことについてやはり話を聞いてみたいですね。

**前澤** 我々の場合は、本来は革命を目的としていたので、そこで死んじやいけないんだよね。組織をちゃんと作って、敵を倒すまで闘わないといけないんですけども、ただ、あの当時の勢いと我々の組織の論理とあれから言ったら、もう武装闘争をやるしかないというのは、俺たちの考えてきた理論からいけば一つの帰結だったわけです。

ただ、大津さんが言つたりアリティーの問題、実際の能力の問題、これを考えたらやつたら駄目だなというのは、当然常識として、あの人数での体制で闘い切る、どう考えても生き残らないだろうというのは確かにありました。それで、何でやったかというと、でも、やらなければいけないと考えてきて、そのためにはその組織に入って活動をやってきて、いまさら止まらないなというのはあるんですね。まあ、しょうがないなという。

**青砥** 特攻隊と違うのは、我々はドラフト（徴兵）されたわけではなくて、ボランティア（志願兵）だというのがまず最初に、前提にありますね。社会主義革命をやろうと思って結集した。ただ、これは山に入る以前からそうですが、赤軍派が厳しい闘いを始めた段階、段階に応じて、迷いとかためらいというのは常にあるわけです。それをその都度乗り越えてくるわけですけれども、とりわけ、山の中で自分がいつ死ぬかも分から

ない、しかし、こういう死に方はあまりしたくないなという気持ちが非常に強い反面、仲間をああいう形で死なせてしまっている、殺してしまっているという認識が半分あるんですが、そのことについての自責の念とかが、やっぱり中にいて非常に強いわけです。

私は東京に任務で前澤君と一緒に出てきて、そのとき前澤君は帰ってこなかったんだけれども、私は山に戻った。そのときに一番頭にあったのは、ちょうど私が山に連れていった遠山さん(注108)と行方君(注109)が暴力を受けて縛られて、いつ死んでしまうか分からないような状況で、とてもそのまま東京に留まって、彼らの所に戻らないわけにはいかなかつた。そういうのが何度も何度も繰り返すんですよ。もちろん、やめてしまいたい、離脱したいという気持ちが全然起きないのかといえば、そんなことはない。それは起きるんだけれども、それをやっぱり抑え込んでいく気持ちの動きというのも非常に強かったです。いずれろくな死に方はせんだけれども思っていましたけれども、最初から山に結集した時点で、いつどんなときでもどういう死に方でも受け入れていくんだというような気持ちというか、人間の気持ちというのは、なかなか私は理解できない。だんだんそれは乗り越えてそこに到達していくものだというふうに思っていますけれどもね。

**司会（金）**では、最後に植垣君で終わらせていただきます。

**植垣** 簡単にですけれども、率直に言って、仲間の死に関わってしまったということに対して、自分のこの責任は自分の死であがなうしかないという思いがずっと支配的でした。だから、逃げようとか何とか、そういうことを僕は思ったことはないですね。ましてやいろいろな闘争をやってしまっているから、罪名だけはいっぱいありますから、逃げても逃げていく先がないという面もあったかもしれませんけれども。

それで、やっぱりそこで一番僕なんかが強調したいなと思うのは、いわゆる警察機動隊と遭遇して、それからいろいろな、妙義山、山越え、銃撃戦と、こういう世界になってくるんですが、その機動隊と遭遇したとき、僕はうれしかったですね。ああ、やっと闘える場が出てきたと、もうどんな闘いでもいいからとにかく闘うという、そのうれしさが大きかったです。多分、青砥さんもそうだったと思うんですが。

(注108) 遠山美枝子。明治大学卒、赤軍派で主に救援対策に従事、赤軍派政治局員高原 72年1月7日榛名ベースで「総括」死、25歳。

(注109) 行方正時。岡山大生、赤軍派から連合赤軍兵士に。72年1月9日榛名ベースで「総括」死、22歳。

だから、それまでは率直に言って、共産主義化なんて、ブルジョア制の解体とか何とかいうんですですが、そんなのは、目に見えない敵なんですよ。それとの格闘を散々させられて、参ったという世界において、それで機動隊と遭遇して、やったという感じでしたね。まあ、指導部はだいぶ慌てていたみたいですけれども、まあ、兵隊のほうはうれしかったです。

**司会（金）**これはそろそろ終わらせていただきたいんですけども、先ほど田原さんのほうからという話もあったんですけども、実は、若松孝二さんの『実録・連合赤軍』の中で最後、加藤君（末弟）が、「勇気がなかったんだ」と言ったという設定になっているんですね。これは本人は言ってないんですけども、これが要するに矮小化だと思うんですね。ある意味では、これが市民社会に取り込もうとしている言い方なんだと。最終的には「勇気がなかったんだ」と言うことによって観客が満足するような作り方をしているんですね。

我々の運動というのは、そういうものではなかったんだということを、そこを押さえてないと、要するに本当のことは考えられないよと思うんですね。ですから、今日ここに若松さんはいらっしゃいませんけれども、映画を非常に高く評価する方もいらっしゃいましたけれども、これで我々は市民社会に取り込まれたんだなど逆に思いました。ですから、ああいうものではなかったんだということは、皆さんに分かっていただきたいなと思って、第三部を終わらせていただきたいなと思います。

**司会（椎野）**ただ、若松監督のために申し上げておきますと、みんながあれを結論というふうに思うけれども、俺はあれを結論として作ったんじゃないえというふうに若松監督はおっしゃっていました。

**司会（金）**では、一言お願いします。

**田原** 実は、私はだから結局、先ほど森さんがおっしゃったように、同調圧力の話というのを言いたかったんです。実は、例えば私どもの仕事でも、事件担当なんかをやっていると、つまり、血の小便が出るまで夜回りしろなんていうのを当たり前に昔、私ら言われてやって、多分、それをもうちょっとやると、そういうことにもなるんだろうというふうな。

つまり、実は事前に椎野さんと話したときに、そういういわゆる社会の一般的なとか、あるいは運動部のしごきとか、そういうものとは全く政治性があるから違うんだというふうに言われたんですけども、私はいまだにそれはとんでもない見方だと思っていて、同じだと思っています。

ただ、一つ付け加えれば、無理をして飛躍をしようとして、つまり、

無理をしてというか、気合をばかに入れて、むちゃなことをさせられるときって、具体的なことはちょっと私もいろいろあるので言えないんですけども、とても誘惑的で気持ちいいんですよね。やっぱり何とか乗り越えてやろうと思うんですよね。しかも、それこそいわゆる市民社会に背を向けて、世の中に抗う闘いに一步踏み込んでいるからには、いまさらそこから取って返してまた市民になりましょうというのは、どうにもこうにも収まらないという、とても誘惑的なものというのがあるので、今日の集会は結局教訓なんですね。ですから、そういう誘惑に負けない強い意志を持ちたいと思います。以上。

**司会（金）** ありがとうございました。

（拍手）

**司会（金）** では、これで第三部を終わらせていただきます。10分間休憩して、第四部、最後に入りたいと思います。

どうもありがとうございました。

## 第四部 若い世代にとっての連合赤軍

パネリスト／赤岩由香、雨宮処凜、ウダタカキ、小林哲夫、山本直樹

**司会（金）** それでは、第四部を始めたいと思います。二部、三部の時にはパネリストの方に問題提起をしていただいて、当事者が答えていくという形をとったんですけど、最後は、まあ現代を生きる方々に——今までが、過去に生きた人と言っているわけじゃありませんけど。一部のところには過去に生きてた人が沢山出てましたけども。——お互いに討論形式でやっていただければと思います。

出席者の方をご紹介いたします。そちらの方から、一番左から、赤岩由香さん。『週刊金曜日』の編集部にいらっしゃいます。一番若いですね、31歳ですか？

**赤岩** いえ、30歳です。

**司会（金）** ああ、すみません。女性の年齢をばらしちゃいけないですね。

**赤岩** いや、いいんですけど。

**司会（金）** やはり、もうみなさんご存知だと思います。慎ましく生きている方々の味方、雨宮処凜さんです。

**雨宮** よろしくお願ひします。

**司会（金）** で、今日、あの『実録・連合赤軍』、若松孝二さん(注110)の映画で吉野雅邦(注111)役をやっていただいた、ウダタカキさんにもいらしてもらっています。やはり30代の若い方です。

**ウダ** はい、ウダです。よろしくお願ひします。

**司会（金）** で、今、中公新書で『高校紛争史』という本が非常に売れてますけど、もう2万部……。

**司会（椎野）**『高校紛争(注112)』。

**司会（金）** ああ、『高校紛争』ですか、すみませんでした。もう2万部超えましたか。ああ、2万部超えてるんですね。高校紛争を非常に実証

（注110） 映画監督。かつてはピンク映画の「巨匠」。『実録・連合赤軍』や『キャタピラー』で国際的な賞を多数受賞。

（注111） 連合赤軍中央委員、革命左派、元横浜国大生。浅間山荘で逮捕され、現在は千葉刑務所で無期懲役服役中。

（注112） 小林哲夫著『高校紛争 1969－1970 「闘争」の歴史と証言』中公新書 2012刊

的にといいますか、様々な方にお会いして調べてこられた、小林さんにも色々お話を伺えればと思っています。小林哲夫さんです。

**小林** よろしくお願ひします。

**司会（金）** 次に、『高校紛争』は、2万部ぐらいですけど、もっと売れている……どのくらいですか、本当は？

**山本** 同じぐらいです。

**司会（金）** 同じぐらいですか。読者少ないですね。マンガ『レッド<sup>(注113)</sup>』を連載されている、本来はエロマンガ家なんですけれども、この『レッド』の連載が終わったら完全にエロマンガに戻るとお話されている山本直樹さんです。

**山本** 山本です。よろしくお願ひします。50代です。

**司会（金）** 今までではちょっと理解のある方々の話が多かったんですけど、これから先は、優しい理解はいりませんので、ちょっと手厳しく、色々、何でいうんですか、質問、指摘、そういうことを……普段聞けない話ですね、政治的な話とか思想的な話じゃなくても全然構わないと思うんですね。日常の話で結構ですから、色々お話し合いいただけたらと思います。

## 連赤事件は「言葉」が暴走した事件だったと思う

**司会（金）** 最初に、山本さんからちょっとお願ひしたいんですけど。山本さん、これは『週刊金曜日』ですか？

**山本** ああ、そうです。

**司会（金）** 『週刊金曜日』の中で、何て言うんですか、要するに言葉が暴走した事件だというようなお話をありました。

**山本** まあ、所謂総括的に考えてそんな風に僕は考えてるんですけど。

**司会（金）** そのマンガをずっとお書きになられていて、色々お考えになることがあったと思うんですね。

**山本** まあ、言葉は重要な武器で、言葉がないと色々なものを乗り越えられないんだけど、言葉が暴走する、まあ、考えすぎる。考えが暴走して。だから、人間じゃなくて考えになっちゃう、人間じゃなくて言葉になっちゃうっていう境地っていうのは、いろいろなところで起きているなって。それの一番わかりやすく、まあ僕は、物語に回収する仕事をやつ

(注113) 山本直樹著、講談社の漫画雑誌『イブニング』に連載中。単行本も講談社から刊行中。

ているんですけども、物語にしたい、しやすい事件が連合赤軍事件<sup>(注114)</sup>だった、って今から思えばそういうことになりますね。

**司会（金）** 実際にはどうなんですか？ 描きにくい主題じゃなかつたんでしょうか？

**山本** え、内容的にですか？ いや、いろいろな当事者の方々が、いろいろ活字などに残されているんで、そういう意味では、僕がそういうのを物語にして読みたいと思っていたんで。読みたいと思っていたものを描いているんで、それは全然、難しいという——絵的には難しいんですけどね、当時の背景とか描かなきゃならないから——。内容的にはそれはない。だから、謎を解こうとか、そういうよりも、そのまま提出したいみたいな形でしたね。

**司会（金）** 謎はないって仰ってましたね。何かの時に。

**山本** 言い方はあれですけれども、あるとすれば、人間自体が、謎の、いつの間にかいろんなことをしてしまう謎の生き物なんであって。その、連合赤軍のここがわからないとか、そういう捉え方ではない。

**司会（金）** お書きになる前に、こんなこと描いたら赤軍のメンバーに後で酷い目にあわされるんじゃないとか、総括されるんじゃないとか……。

**山本** ああ、そういう助言をしてくださる友人もいたんですけども。

**司会（金）** ああ、そう。

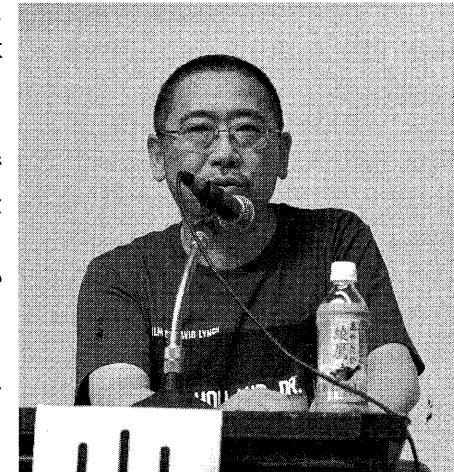
**山本** 編集さんが、「大丈夫じゃない？」って言って。

**司会（金）** (笑)。

**山本** あとは、つてがあって植垣さんとかにお会いして、何か、大丈夫じゃないかな、っていう。

**司会（金）** それは、会ってみたらそれほど狂暴じゃなかったってことですか？

**山本** まあ本を読んだ時点で、そんな僕らと違う彼岸の人じゃないなど。



(注114) 浅間山荘事件と山岳ベースリンチ殺人事件とを総称してこう呼ぶ。

それは本を読めばわかるんで。ええ。

**司会（金）** わかりました。何かちょっと、伺ってみたいとか、文句つけてみたいとか、ないですか？

**山本** 僕は段々、いろいろ伺ったんで。

**司会（金）** ああ、そうですか。反対にないの？ 山本さんに酷い書き方されてるのがちょっと許せないとか。

**山本** いやいやいや。

**司会（金）** 植垣君は、あれなんですよ、何か、小池真理子(注115)が酷い書き方したって言って、小池真理子さんびびって来ないんだよ。ははは、今のは冗談ですけども。描かれてる方が、面白くないとか。前澤さんなんかはただ走って逃げただけなのに、若松孝二の映画のとこでは草叢をゴロゴロ転がり落っこちながら逃げていくとか。

**山本** それは、やっぱり、映画的に。

**司会（金）** 映画的には必要なんですか？

**山本** どうなんでしょう？ 映画専門家。

**司会（金）** 吉野さん、どうなんですか？

**ウダ** ト書きにはですね、「脱兎のごとく、走る前澤」って書いてありました、確か。

**司会（金）** おお。

**山本** 走ってない？ 歩いて？ バスターミナルから。

**前澤** はい。

**司会（金）** ウダさんは、ええとですね、私、若松孝二さんの忘年会に伺って、いろいろな役……森恒夫さんの役をやった方とか、坂口さん(注116)の役をやった方とか、いろいろな方にお話伺ったんですけども、ちょっと、撮影してる間に、段々段々、異様な雰囲気になってきて、本当に総括しているような気になったって言った人がいたんですけども、ウダさんなんかどうだったんでしょう？

**ウダ** ええと……うーん、そうですね。本当に総括してる気には、なってきますね。って言うのは、3か月間、3か月もないですね、3週間くらい山に籠っていたので、で、同じ宿舎に泊まっていたので、疲れて帰つてロビーの暖炉を囲んでいると、いつの間にか、こう、幹部だけが集まつ

(注115) 作家。連合赤軍事件をモチーフの一つにした『恋』で直木賞受賞、『望みは何かと訊かれたら』では主要モチーフに。外、作品多数。

(注116) 坂口弘、革命左派幹部活動家、元東京水産大生、連合赤軍中央委員。浅間山荘で逮捕され、現在死刑囚として東京拘置所に拘留中。

ているんですね。

**司会（金）** (笑)。

**ウダ** 他の人は自分の部屋に帰って行って、最後までその暖炉の前にいるのは、幹部だけになっている、っていう。

**司会（金）** 映画でも、CCだけが集まってて。

**ウダ** そうですね。同じ。

**司会（金）** やっぱり、じゃあ、そこで正座してるとかいるんですか？

**ウダ** 正座はしてないですけど、泣いてるやつとかいました。上の部屋で。なんか、あいつやばいな、とかって言うのを、映画としてちゃんとうまくいくように幹部というのは話してたりするんですけど。あの、ついて来れるかな、っていうのを心配してたりするんですけど。監督も、若松さんもすごく追い込む監督なので。はい。そういう感じでした。

**司会（金）** だけど若松さん、演技つけない方じゃないですか？

**ウダ** 演技つけないですけど、あのー、バカヤロウ！って言って。演技はつけないですけど、「そうじゃない」ってことは言いますよね。

**山本** 森恒夫？

**司会（金）** (笑)。

将来、史実として連赤事件が語られるようになる

**司会（金）** 小林さん、『高校紛争』書かれて、いろいろな方に取材されたと思うんですよ。で、この間いろいろお話をしたら、やっぱり若い方にとっては、もう連合赤軍自体は、まあ何て言いますか、ある意味では対象の外にあるんだみたいなお話をされてましたが、そこら辺はどうなんでしょう。

**小林** あの、一番ショックうけたのが、3年ぐらい前に、多分、全体像を残す会だったっけな？ その流れの中で、「私植垣さんのファンなんです」という女性がいらして。で、なんか聞くとですね、植垣ファンという女性が何人かいらっしゃるという話を聞いて。で、年齢でいうと、大体22、23歳くらい、まあ昭和から平成にかけて生まれた方。で、僕も同年代で50なんですけれども、やはり連合赤軍の事件をニュースで見ていて厭な気持ちをした世代なので、ファンであり、かっこいいというような受け止め方というのが、正直なところ理解できなかつたんですよ。

その後確かに、前澤さんと金さんと、池袋かなんかで飲んでいてですね、



結局はその、今、かっこいいという、もしそういうかっこいいとかですね、そういうことを思うようなセンスがあるとすれば、それってじゃあ、これ鈴木邦男さんも仰ったらしいんですけども、新撰組かと。新撰組の土方なのかと。沖田総司なのかと、連合赤軍が。そう思うと、その植垣ファンの女の子が、かっこいいという風に言ったのが何となく、まあ理解しちゃいけないんですけども。そうするとそこでですね、さっき田原さんが言っていた市民権の問題になってしまって、間違えてこれを美化しちゃっていいのかな、ということですごく受け止め方で悩みました。

で、じゃあ新撰組かよ、ということは、僕、その三人の席で、じゃあ50年後、NHKの大河ドラマになつたりとか。多分ならないと思うんですが。おそらくですね、歴史の教科書の中で、語られることになると思います。僕が今日伺いたかったのが、歴史上の人物として、おそらく将来、捉えられたとする、なることについての意見と、それからもう一つですね、東京女子大学の1990年代の入試の試験で、「全共闘」と答えさせる入試問題が出たんですね。これ今日ここにもいらっしゃるんですけど、駿台<sup>(注117)</sup>の日本史の福井先生から教えていただいたんですが。おそらく「連合赤軍」というようなものを回答するような、そういう入学試験の問題というのが、マニアックな現代史の先生がもしそこにいらしたら、出てくる可能性もある。僕が今日ここで言いたかったのは、その、将来、歴史の史実として、つまり教科書的な史実として連合赤軍というのがどう捉えられていくものなのか、ちょっとその辺に関心があります。

**司会（金）** これはやっぱり、あの、みんなに聞くより、植垣に聞いた方

(注117) 駿河台予備校のこと。

がいいと思うんですよね。あの、奥さん33歳くらい下ですよね。しかも、今のお話ですと20代が植垣がかっこいいと言ったと。他にも知ってるんですけど、「こんなふくふくした手がいいのか」って言ったら「それが愛くるしいんじゃないの」と言った女性もいたんですね。まずその、自分がモテることが、俺の、個人の問題なのか、新撰組だからモテるのかというのと、その、歴史的お題として描かれるようになった時にどう思うのか、ちょっとお答え願えませんでしょうか。

**植垣** 難しい問題ですね。なかなか答えづらい問題で。まあ、歴史的に扱われていくってことがいいか悪いかっていうと、僕はやっぱり、それはそれで必要なことだろうなと思うし。やっぱり当時の左翼運動の話をしていると結局、連赤問題に行っちゃうわけですね。どういう人の話を聞いても、そういう流れになってしまっていうのが、まあ、あるんで、当時の時代の象徴的な事件になってしまっているっていうことが大きいと思います。で、何でかって言ったら、やっぱり連合赤軍っていうのが、それ自体として単独にあったわけじゃなくて、当時の全共闘運動からの流れをそのまま突き詰めていったところに連合赤軍があった。で、これは僕自身の歩みを振り返ってみてもそう思うわけで。

まあそれはそれで、面白かったですよ、率直に言って、武装闘争が。ゲリラ戦<sup>(注118)</sup>楽しかったです。もう、銀行強盗も3つ<sup>(注119)</sup>もやらせてもらって(笑)。もうね、警察から目の敵にされて、指名手配写真がどこにでもあるというね。何て言うの、選挙のポスターなんて比じゃないくらいね。山の中のバス停に貼ってあって、誰が見るんだよこれ、タヌキかよキツネかよ、ってそんな世界だし。飲み屋に行けば、カウンターの中に自分の写真が貼ってあってそれを見ながら酒を飲むっていうね、これもまた、なかなかいい味がしましたけれどね。えー、そんな世界であって、別に僕はね、目立とうとしてそうしてるわけじゃないんですよ、別にね。その、何か妙に目立っちゃったなあ、というところはあります。で……まあ、その、何て言うかな、うーん、若い女性のファンが多いと言われますけど、まあ、確かにそういう面は痛感させられていますが。そうすると思い出すのが、森さんから総括要求された時、「植垣、お前は女にモテる」と。

(注118) 本来は、正規軍による戦いではなく、非正規軍による戦い。この場合は赤軍派において闘われたM作戦(=強盗)のこと。

(注119) 71年3月22日仙台振興相銀黒松支店、5月15日横浜南吉田小糸与強奪、6月24日横浜銀行妙蓮寺支店の各「M作戦」のこと。

**司会（金）え？**

**植垣** 言われてさ、で、それがお前の問題だって言うわけ。え！って言ってね。要するにね、植垣はこれまで色々な作戦行動をやって極めて行動的である。それからまあ、そこそこ文章も書いたりする。それ自体としては、極めて革命的な行動として評価されるけど、その女性問題が絡むことによって、お前は女にモテようとしてゲリラ戦やってると……。

**司会（金）** ちょっとここら辺で止めましょうか？（笑）

**植垣** それでもう僕はね、そんなはずはない。まあ大槻さん<sup>(注120)</sup>問題で正座しちゃったりしたこと也有ったんですが。だからね、女性にモテる……多分ね、僕のこのアホさ加減がいいんじゃないのか。まあそんなところで。

## 連赤事件が今の「生きづらさ」につながっている

**司会（金）** あの、ちょっと今、植垣がホントバカなこと言ってるんで、ちょっと雨宮処凜さんにお伺いしたいんですけども。

**雨宮** はい。

**司会（金）** あの、『週刊金曜日』のところで、こんなこと書かれてるんですけど。要するに同志殺しという陰惨な事件によって広まった運動……それが……

**雨宮** 広まった運動アレルギーじゃないですか？

**司会（金）** ああ、すみません、運動へのアレルギーが、若者に政治を禁止する空気と深い関係があるということを書かれていました。

**雨宮** はい。

**司会（金）** えー、ちょっと今、植垣が思いあがった根性をどん底に突き落としてやってください。

**雨宮** そうですね。どん底に突き落としてやろうと思います（笑）。

**司会（金）** そうですね。まず、雨宮さんから見て、植垣が魅力的かどうか。

**雨宮** いや、それは別に。それは置いておいて。連合赤軍事件、連合赤軍という、まあ、事象ですね。いや、あの、そうなんです、『週刊金曜日』に連合赤軍事件のことを書いて、「社会への回路が閉じられて『生きづらさ』につながった」というタイトルの原稿なんですけれども。まあ、私、

（注120） 大槻節子、連合赤軍兵士、革命左派活動家、元横浜国大生。1972年1月30日群馬県沼田市迦葉ベースにて「総括」死、23歳。

生きづらさとか、プレカリアート<sup>(注121)</sup>とか、そういう不安定性のことをずっと取材しているんですけども、生きづらさ、今の、2012年の生きづらさの問題と、連合赤軍事件というものをすごく絡めて考えているんですね。それってとっても一見唐突かと思うんですけども、例えば2000年代、小泉政権下<sup>(注122)</sup>で、ものすごく「自己責任」という言葉が使われて、それが格差社会の底辺にいるような人たちを、ものすごく追いつめていくような役割を果たしたわけです。

まあ連合赤軍後の世代、私75年生まれで、連合赤軍、あさま山荘から3年後に生まれているんですけども、育ってきた自分の環境として、当然自己責任ということも最初から言われまくったというか、社会とか政治のことを若い者が考えると碌なものにならないから絶対そんなことを考えちゃだめだよというような、ものすごく拒絶する空気をすごく感じて育ったんですね。なので、ちょっとでも絡めて、行動的な問題として考えようすると、そんのは言い訳だ、とか、すごくそういう社会への回路があらかじめすごく切断される、というような空気が、とっても私が育った80年代、90年代にはものすごく蔓延していたので。まあそんな中で、全部自己責任なわけですよね。例えば学校でいじめがあつたりだとか、ものすごく競争が厳しくて心を病んでいくだとか不登校になっていくだとか。そういうのも、お前が弱いんだ、とかそういうことになってしまいますし、まあ労働問題なんかで言うと、どんなに酷い目にあっても努力した人が報われる、そういう社会なんだから、努力が足りないんだから、全部お前の責任だっていうふうに言われて。なんか、

（注121） precario（伊、不安定な）とプロレタリアートとの合成語、不安定雇用にさらされる労働者のこと。

（注122） 2001年から06年の自民党小泉純一郎内閣の政権こと。郵政民営化を初め「規制緩和」として新自由主義政策を推し進めた。



いろいろな政治的、社会的背景に迫る回路を、すごくあらかじめ閉じられている気がして。

で、それって辿っていくとやっぱり連合赤軍事件の問題というか、私は韓国でそれ言われたんですね。どうして、フランスで100万人規模のデモが起こり、韓国でも2008年にBSEの問題をめぐって高校生を中心となって呼び掛けて、100万人デモが起きたわけですけれども。何で韓国ではこんなにデモが起きるんだ、っていうふうに聞いたら、まあそれは韓国では連合赤軍事件のようなことがないから、運動に対するマイナスイメージも日本ほど強くない、やっぱり連合赤軍事件というのがすごい原因じゃないか、ということを言われて。それで、すごく、それを他の国の人々に言わされたっていうのが私にとってはびっくりしたことだ。自分がそういう生きづらさの問題と、そういう空気の問題、今の、何て言うのかな、連赤以降の政治が禁止される空気の問題を考えていた時だったので。

あと、結構その、なんで怒らないんだ、っていうことをすごく上の世代の方から言われるんですね。特に今、まあずっと貧困、特に昨年その貧困とか不安定雇用とか問題になってますけど。怒ってるんですよね、怒っているけど、社会との回路が切断されている人が怒ったら、自分に向かうしかないので、もう自殺するとか自傷行為をするだとか、もう本当に内に内に怒りが向かって行って。あと場合によっては家庭内暴力とか引きこもりだとか。だからすごく、怒れ、って焚きつけられれば焚きつけるほど、そういう構造の問題に向かう視点を持っていない、奪われている人からすると自分を責めるしかないので、きっと怒れとか言うことはすごく危険なことで、まあそういうことが、20代、30代の死因の1位がずっと自殺だとかそういうこととも絡んでいると思っていて。

なので、勿論連合赤軍事件の犠牲者というのは沢山、十何人いるわけですけれども、その後の空気っていうものを考えると、すごくやっぱり、自殺の問題とか取材してきたので、その後の、何とも言えない社会にどうやっても迫ることができないし、自分が何をどう思おうと、何をしようとも圧倒的に無力であるというような、そんな絶望って、なんか、すごくいろいろなものと関わってるんじゃないかなっていうのが、私が漠然と考えていることです。はい。

**司会（金）**えっと、今雨宮さんから、そういう話が出てきたんですけども、今ここにいる当事者、まあ当事者のせい、というわけじゃないでしようけども、雨宮さんが主張されているのは。ただまあそういう一つ

の時代の空気を作ってきた、あるいはその時代に生きた、その、若者だった立場として……。雪野さん何か、ご意見というか反省というか懺悔というか、ないでしょうか。

**雪野**いや勿論そういう反省はあります。ただ、逆ですね、そんなに言わなくても、という気もあります、はつきり言って。あの、世の中問題があるわけですね、それにいろいろな人たちが反発して、いろいろな活動をするわけですよ。で、その時に、もう40年前の昔のことを考えて、ちょっとここは止めておこうと思う人がいるのかな、という気は正直あります。まあただ、全体の、そういう一般的な雰囲気を醸成したという意味ではあるんだろうなとは思いますけれども。

**司会（金）**うんうん。青砥さん、どう思われますか。

**青砥**まあ似たようなもんですね。今更みたいなところはありますけど。ただ、多分皆さん目を通されてる方もおられると思うんですが、『全共闘白書（注123）』という本が以前に出たことがありますね。で、その中には、もう、バラバラっと、もう全てのページに、「連合赤軍事件のせいで活動やめました」、みたいな、そのオンパレードだったんですね。で、その時思ったのは、それは我々も、日本の社会運動とか階級闘争に悪い影響を与えたと十分承知していますけれども、止めるのはアンタの勝手でしょうと。

（会場から拍手）

**司会（金）**そうだ。異議なし。

**青砥**はい、そういう風に思いましたね。まあ大体そういうところです。

**司会（金）**そうですね、今ちょっと主体性っていう問題も出てきましたけれども、ちょっとここに今、質問票にあったんですけども、イブキさんという方が、「現代の社会について、全く体制側に対して反発せず、全てを従順に受け入れてしまっているかのように見える現在の社会、現代の若者に対して、今何を思いますか」。ちょっと抽象的なんですけども、虎さん。

**前澤**ええと、一時期組合の役員（注124）をやって、運動に入るきっかけみたいな感じになったんですけど。そこで統計を見たら、賃金がどんどんあがる時は、ストライキもどんどんあるんですね。で、賃金があがらない時というのは、ストライキもなくなるんです。だから、それはどう

（注123）同名の編集委員による、全共闘運動に参加した者へのアンケート結果をまとめた本。94年新潮社刊。

（注124）三国工業において労働組合青年婦人部長をやっていた。

いうことかっていうのは、まあ考えなきゃいけないんですけど。だから今、どんどん社会が悪くなっている時は、やっぱり1人だけ目立てば叩かれるという、やっぱりその恐ろしさっていうのあるでしょう。俺達のやってる時代は、たまたま日本は景気がよくて。そういう意味じゃ、大学で暴れて退学になろうと何しようと、食うには困らないという、確かにそういういい時代に生きていたとは思います。

**司会（金）** はい。それから、今雨宮さんのお話もあったんで、もう一つ、質問票で、イノウチさんですか？「連赤事件といじめ」というタイトルがあるんですけれども。「都内で家庭教師をしています。お話を聞いていて、連想するのは学校でのいじめです。①連赤事件への子供の世界への影響をどうお考えでしょうか。②今子供たちに何かを言うとしたら何を伝えたいですか」。どなたか。雨宮さん、どうでしょうか。

**雨宮** え！ なんで私？ 私、連赤じゃないですよ。

**司会（金）** いや、いじめと言えば雨宮さんかなと思ったんですけど。

**雨宮** え、いやあ、どうなんだろう。え、連赤事件のいじめへの影響？ うーん、でも子供の世界への影響は……うん、まず知らないですね。まず、今、子供たちは。ただね、教室内いじめっていうものは、すごく私も連想しました。あの、なんだろうな、自分が経験したいじめと。絶対に言えないっていうのと、言ったらまた自分が、自分こそが標的になるとか、それは全く、すごく、何だろう、身に覚えがある感情だからこそ、何かこの事件に対して目が離せないというようなところがあるんじゃないですかね。全然違うなら違うで、突っ込んでいただきたいんですけども。

**司会（金）** あの、今ちょっとその質問に僕が答えるとしたら、私、塾講師やっているんです。私が元赤軍派だということは明らかにしてあるんですね。それで、一番最初に、そうですね、十数年前に本を書いて明らかにした時には、親御さんの反発が非常に大きかったんですね。子供にそれを知らせたくない。ところがもう本出しちゃったら回収できませんから。でも、もう仕方ないからヤケクソになってまた本出したんですね。で、そうすると、子供たちは逆に喜ぶんですよね。喜ぶというか、「先生すごい悪いことしてきた人なんだよね」「15年間逃げてたんでしょ～」とか言って。逆に非常に尊敬してくれるんですよね。

いじめへの影響、全然ないと思いますけどね。まあ、ただ、鈴木邦夫さんや、植垣さんなんかが言う、要するに連合赤軍化する日本社会、みたいな、そういう言い方っていうのが今ありますけれども、そういうと

ころで、いじめとかそういうのも、先ほどもちょっと出ましたけども、一種のムラ社会の延長上でそういうことが行われていて、そこから抜け出すことが非常に難しいという問題は起こっているのかなと。どうですか、山本さん。

**山本** この2番目の質問……何か言うとしたら、「前澤さんのように、逃げて」。でも、逃げられないんだよね～、っていうことですよね。ジレンマが。

**司会（金）** あの、今日、前澤さんのお子さんが2人いらしてますけれども、まあ、前澤さんが産ませた子供ではないんですね、連れ子さんですね。その、2人のお子さんが、非常に関係がいいんですね。こんな極悪人と。ちょっとそれについてどう思うんですか。え、本人います？ お子さんいます？ 手挙げてください。……ん、ちょっと彼に聞いてみたかったです。どういう風に教育してきたんですか？ まだ、小学校上がる前くらいでしたよね。

**前澤** そう、ええと、5歳と3歳。どういう風にって……何にでも、どんな質問にでも丁寧に答えて、で、ヤクザって何だって丁寧に説明してかみさんに怒られたり。あと、警察の階級章の話をしたら、巡査長ってのは7年間真面目にやってると唯一試験なく昇進できる階級だという風に言ったら、ちょうど巡査長とそれ違って、「お父さん、あの人7年間試験に落っこってる人だよね」とか言ったり(笑)。といったことはあつたんですけど、別に俺は悪気があったんじゃなくて、そういう、システムだという説明をしただけで、巡査長はだからどうこうってつもりはなかったんだけど。たまたまそんなことがあって。まあ、ともかく何でも丁寧に答えるっていうぐらいですね。

あと、さっきのいじめと連赤っていう意味じゃ、いじめの、誰かターゲット作って団結……団結するでもないけど、そういう意味では、内ゲバとか我々の総括っていうのは、こう、敵を作つて、他の部分がくっつくという意味ではいじめと共通する部分はあると思うんですね。

**司会（金）** ええと、まあ、その辺でいいですかね。

植垣さんや鈴木邦男さんは「届く言葉」を持っている

**司会（金）** ええと今赤岩さんに……赤岩さん、今ここに並んでいる方で一番お若いんですね、今30と仰ってましたけども。今、その年代の方、当然、周り、そういうコミュニティで感じることと、あの、まあ『週

刊金曜日』で、鈴木さんとか植垣さんとか、どっちかというと厄介な危ない方を取り扱ってるじゃないですか。その世代の人間としての魅力とかね、あの、何て言うんですか、ものの考え方の違いとかについてどんな風に思われてるかなと思ってるんですけど。

**赤岩** まず、まあ今年が連合赤軍の事件から40年ということで、今年の初めに、じゃあちょっと企画を考えようっていうことで、私、企画を考えました。で、その内の一つが、そこにも書いていただいている、植垣さん、鈴木邦夫さん、金廣志さんに出でていただいた座談会なんですね。で、もう一つ、ちょっと、それこそ森達也さんが仰った「不謹慎」に絡んでくるんですけども。3・11<sup>(注125)</sup>を、高橋源一郎<sup>(注126)</sup>さん『恋する原発<sup>(注127)</sup>』という小説を書かれて大変物議を醸しましたけれども。あの、それに近いような企画を出しましたらですね、やっぱり、当事者世代の方々に、企画会議でもうちょっとここから湯気出てる感じで怒られましてですね、やっぱり世代の中での捉え方の違いがあるのかなあと思いました。実現には至らなかったので残念だったんですけども。

で、まあ、周りを見てみると、そうですね、今日この会場の中では40代の方はいらっしゃいますか？お差し支えなければ……あ、結構何人かいらっしゃいますね。あの、私の周りでは、40代の人が全然連赤に興味がなくて。雨宮さんも私と同じ30代ですけど、30代、20代のほうが関心が高いという印象なんですよね。ちょうど、事件が起きた頃に小学生だったり、生まれた方が、逆になんでそんな取り上げるの、興味あるの、っていう風に聞かれることがすごく多くて。

で、話飛びますけども、植垣さんや邦夫さん、なんで私お付き合いさせていただいているかというと、まあ、若い女性にモテるっていうところと通じると思うんですけども、お二人ともすごくわかりやすい言葉を持ってらっしゃるんですよね。あの、私ちょっと頭悪いんで、二部の塩見さんとか三上さんのお話が、ちょっとついて行けなくてですね、ほんとすみません。塩見さん、個人的にとてもチャーミングな方だと思っているんですけども、ちょっと、多分、若い子にはモテないだろうなっていうのは思いますね。そこらへん、植垣さんとか邦男さんは、届く言葉を持っていて、私の周りの友人でも、別に、右翼・左翼・『週刊金曜

(注125) 2011年3月11日の東日本大震災のこと。

(注126) 作家。51年生、全共闘運動に参加し横国大中退。『さよならギャングたち』で群像新人賞、『優雅で感傷的な日本野球』で三島賞。

(注127) 雑誌『群像』2011年10月号に掲載、単行本11月講談社刊。

日』なんて全然知らないという友達でもですね、なぜか鈴木邦男さん知っている、ファンだ、という方が多いんですよ。それってやっぱり、届く言葉を持っているからであって、まあ、そこは『週刊金曜日』も雑誌として考えなければいけないと思うんですけども。

まあ、届く言葉って何だろう、っていうのは常に考えて編集はしていますね。

なので、橋下<sup>(注128)</sup>みたいのに持っていかれる？今、みなさん、見ていらっしゃって、橋下を見てどう思うのかな、っていうのは、全然事件には関係ないですけれども聞いてみたいなと思います。みんなに。橋下現象と言われる……。

**雪野** とにかく、橋下は大嫌いですね。非常に危ないものを感じます。**司会(金)** じゃあ、あの、俺は違う、俺は大好きだっていう人はいませんか。みんな嫌いなんですか。

**司会(椎野)** 金さんは？

**司会(金)** いやあ、面白いなあと思って見てますけどね。あの、まあ、どういう面から見るかによって非常に違うんだと思いますけれども、ある一つの現象として終わるんだろうという風に思える場合もあるし。やっぱり社会の閉塞感みたいなものが、どうしてもあそこに向かわざるをえないのかなあというかたちもありますよね。だから、保守派なのか進歩派なのかわからないようなところが……。

**雪野** 社会現象としての理解は別として、金さん自身のね、評価だとかそれとも感情だとか、そういうのはどうでしょう。

**司会(金)** いや、僕はね、結構いいなと思っているところがあるんですよ。ただ、個々のね、一つ一つのリアリティっていうのが本当はないなって。僕の場合は、仕事が仕事だから、教育って見方で考えちゃうんですけれども。

(注128) 橋本徹、弁護士、現大阪市長。法律バラエティ番組「行列のできる法律相談所」で人気を得、「大阪都」構想を掲げて大阪府知事に、そして現職に。



ども、そこに関してこの人全くリアリティがないなと思って見ることはありますね。だから、その、良し悪しというよりね……うーん、何でしょうね。まあ、大阪に住んでるわけじゃないからあまり深く考えてないですけどね。

**司会（椎野）** 前澤さんは。

**前澤** やっぱり、怖い。

**司会（金）** ああ、怖い。

**前澤** いや、橋下個人じゃなくて、ああいう人のところへ人が集まる、で、投票もそこそこ取るという社会現象は非常に怖いです。

**植垣** じゃあ、一言いいですかね。僕はね、やっぱり橋下は問題の出しがうまいなと思うし、その辺はある意味で僕らの全共闘時代のやり方と似てるのかなという感じはしますね。だから、人をわっと、何というのかな、まあ、煽動というのか、そういう流れを作っている、作り方は別に珍しいものではないし、わかりやすいと思う。要するに、問題を具体的に出すという点で。ただ、問題は、さっき誰か自己責任という言い方したけど、彼の例えは教育のやりかた、教育観とか、いろいろのものを見てると、やっぱり一種の「自己責任」の考え方を、改めてもっと強烈に押し出しているなということをものすごく痛感します。で、そうですね、彼が政党政治を突破すると、そういう方向性というのは実は、多分いろいろな人がそれなりに感じていることであるし、それは多分必要なことだと思いますよ。ただ、彼が本当に政党政治を突破できるものかどうかとなると、多分それはないなと。まあ、むしろ、どっちかと言えば、政党政治よりも官僚政治を強化させるようなやり方じゃないかと思っています。だからまあ、そういう意味では、いずれは彼の主張のぼろがどんどん出て、一過性で終わってしまうんじゃないかなと思いますね。

**青砥** 私は橋下が嫌いです。肌が合わないっていうか、一緒に酒飲みたくないなって。あとまあ、中身色々ありますけど、まあ、つまるところはそういうことです。石原慎太郎<sup>(注129)</sup>と橋下は大っ嫌いなんだ。

**司会（金）** いや、あれですね。連合赤軍は、橋下は嫌いだそうです。若い方にも伺ってみたいですね。逆にこれが反対だと面白いですよね。好きか嫌いかで伺ってみたいですね。

**山本** いや、僕、嫌いですね。弁護士の頃に、ワイドショーで核武装した方がいいのに、とか言ってたんで、もう信じられない。それが今、原

(注129) 作家、政治家。『太陽の季節』で56年に芥川賞授賞。環境庁長官、運輸大臣など歴任、1999年から東京都知事。

発がどうこう言ってるんでしょ。

**司会（金）** うんうん、どうですか、小林さん。

**小林** 嫌い以前に興味が湧かない。はい。

**ウダ** ……うーん、よくわからないですね。すみません。

**雨宮** いや、勿論、好きじゃないですけれども。何か、集合無意識みたいな現象じゃないですか。あの入って、すごく空気を読む天才だと思うので、自分の意見とかじゃなくて、その場のノリで読んで、その瞬間でやってるようなのを感じるので、一人で生み出してるキャラじゃなく、みんなが生み出してるキャラだと思うので、それにとても、その現象自体には興味があるというか。それが今の時代を表してると思います。

**赤岩** その場の空気を読むのが、すごく巧みな方ですよね、橋下は。私はそういう意味で、好き嫌いの前にすごい怖い存在だなという風に見てます。

**司会（金）** 何か、すごく不思議ですよね。ここ、とりあえず壇上にいる人の中で、選挙権のない私だけが、うーん、まあ悪くないんじゃないのって言ってるんですけど、選挙権のある人みんな、嫌いですって言うんだけれども。

**司会（椎野）** ちなみに、多分金さんだけが、原発支持なんですよね。金さんは原発支持なんですよ。ちょっと、その訳を。

**司会（金）** いや、別にここで原発の話をする必要はないと思うんですけど。今日は連合赤軍がテーマなんで。ただ、別の意味で言うと、さっきちょっと話出ましたけど、反核ということが倫理的だという話から絡めとられてくる時に全然議論が成り立たないですね。それが、ちょっと嫌だなという風に僕は思っているところがありますね。

で、何て言うんですか、僕はもう、科学っていうのは止まらないものだと思ってますから、人間という、人類とかそういうものの自体がある意味で永遠に生き続けるものではないと思っているので。まあ、細かく言えばいろいろあるんですけども、ある意味で根底的なところでそれを否定することはできないよ、という思いはあります。すみません、橋下派で、申し訳ございません。

本当に社会を変えられると思っていたのか？

**雨宮** 質問してもいいですか？ みなさんに。さっき私が話させていたいことだ。やっぱり、世界にはいろいろな矛盾がある、いろいろな問題がある、それでも、その世界に対して自分が何かを考えたり行動し

たりしても、もう1ミリも動かないぐらい強固なものとしてあったんですね。今はいろいろ、自分がデモとかやりまくっている、で、少しは変えられるんだ、という思いはあるんですけども。本当に世界に対して、全くの無力であるという時にすごく絶望していて、それって自分自身の生きづらさにもどこかで関わっていたんですねけれども。何か、当時、本気で革命とか、本気で社会を変えるということを本気で思えたのか。それは、思えたんだったらそれはものすごく希望があることで、とっても羨ましいことなんですねけれども、思えたのかどうか。じゃあ、どうしてそういう時代状況、そういう思えるような時代状況だったのかとか、その辺のところをちょっとお聞きしたいです。

**司会（金）** これは全員が答えるべきじゃないですかね、当然。革命家として。

**雪野** 私は、そう思っていました。それで、たとえば私の周りにいた人たちですね。例えば、高校の同級生だと、大学の仲間だと。その中で、逆に、全くの無力感を持っていた人というのはあまりいなかったんじゃないかなっていう気がしますね。あの頃ね、やっぱりみんな、世の中変えなきゃいけないし、変えられると思っていましたよ。

**雨宮** 何ですか。

**雪野** いや、何でって。何でって言われても、それはそういうものだったとしか言えないんで。

**雨宮** ああ……。

**植垣** 率直に言えば、そういう気持ちがなければ、とても銀行に入って行くことはできないと思うんですよね。もう、本当にそうですよ。で、僕も……僕は実感として、これは、実感として、もしかしたらひっくりかえせるかもしれない、という思いは持っていました。で、やっぱりそれは行動することによって見えてくる世界なんだね。文章書いたりなんかするだけでは多分見えてこないと思いますよ。やっぱり実際に行動することの意味の大きさってのはそこらへんにあるんじゃないかなと思いますね。で、今の若者が動かないって言うけど、これはね、



今の社会状況というか、日本が、あるいは世界が置かれている状況を考えたら、それは簡単には動けないのもわかります。問題があまりにも大きすぎて。逆に言うと、行動するっていう時は多分、それこそ日本をどうにかしなきゃならんという流れが生まれた時だろうなと思いますね。

で、もうちょっと言わせてもらうと、実は僕、70年当時、要するに当時大学闘争<sup>(注130)</sup>から始まっていろいろな武装闘争やら何やらいろいろあったんだけど、当時のぶつかった問題っていうのは実は全然問題解決されてないわけですね。むしろ、もっと悪くなって現在に至っている。で、全共闘運動も何が問題だったのかというと、その頃大学というのは所謂産学協同<sup>(注131)</sup>とか、産官学協同<sup>(注132)</sup>とかね、そういう流れが持ち込まれつつあったということでした。で、それに対して僕らは、大学っていうのは政府や企業に対して独立性をもっているべきであり、自治を確立しなきゃいけないというところで、最初の行動が始まった。ましてや大学が就職予備校化している現状に対しても、大学が就職予備校化するのはおかしい、それは単なる専門学校と変わりない、と。

**司会（金）** じゃあその辺で、もう青砥さんに行きましょうか。

**植垣** だから問題はね、現実にはゴロゴロ転がっているわけで、その問題をどうするかっていうところで、世代とかそういう問題抜きにもう考えていいかなきゃならないんじゃないかなと思いますね、はい。

**青砥** 我々が運動をやった時期っていうのは、まあ60年安保<sup>(注133)</sup>……先ほどフィルムがありましたけれども、60年安保から続いた学生運動の、いわば蓄積というか、その継承するかたちのところにまずスタンスがあったというところが第一点と、それから、まあキューバの革命であるとか、ベトナム戦争<sup>(注134)</sup>であるとか、そういったものに……キューバに対してはまあ共感ですよね、ベトナム戦争に対しては、日本がそれに加担していることについての責任を自ら感じなくてはいけない、っていうような問題があった。で、もうひとつ大きな問題だったと

(注130) 主に68年から69年にかけて大学自治や産学共同などの問題を中心に、全共闘という組織形態をとって闘われた大学への反乱。

(注131) 教育界と産業界とが協同して、産業界の求める技術者を養成したり、産業界の求める研究をしたりすること。教育・学問の自立性の観点から批判された。

(注132) 産学共同に、更に国家・政権が加わること。

(注133) 日米安全保障条約の1960年の改定問題で、国内を二分する大闘争に発展した。

(注134) 1960年頃からの南ベトナムでの独裁政権に対する武装闘争に対し、アメリカが軍事介入して民族解放闘争に。65年に北ベトナムへの爆撃を開始、以後急速に拡大。68年に和平交渉を開始、75年米軍撤退、終結。

思うのは、今では全然まがい物だった、むちゃくちゃだったというふうに言われていますが、当時、中国の文化大革命<sup>(注135)</sup>というものは、革命の中の第二革命<sup>(注136)</sup>というかたちで我々には非常に肯定的な印象を与えていたんですね。革命の可能性を非常に強く感じさせた。で、まあそういうものが混じって、我々は要するに、あとは勿論、マルクスとレーニンの著作の中から、社会主義革命というのは歴史の必然であってそこにむかって行くんだっていう確信がありましたから。革命をやろうという気持ちはだんだんと強くなっていくわけ、確信も強くなって行くんだけど、ただ、この連合赤軍とか、それ以前の赤軍派の闘争でもって、革命がすぐに成就するんだとか、そんな風な考えは毛頭持っていたんですね。その端緒を作ればいいというような、そういう感じでした。

**前澤** やっぱりあの当時は、ベトナム戦争に対する日本人としての責任で、まずやらなきゃいけないという意識が一つはかなり強くあって。もう一つはやっぱり、マルクス主義の本読んで、社会主義、共産主義は必然だという、理論的に必然である、で、その過程で暴力革命<sup>(注137)</sup>が必要だという。そこがまあ、社会党とか共産党へ行かずにこっちへ来たという理由ですけど。ただ、あの、すぐとか、という意味では、やっぱり考えてていなかったですね。何十年かかるかわからない、まして、最後の方、我々の組織だけで言えば、成就する前に潰れると思っていました。

**司会（椎野）** それでね、会場の方から、雨宮さんのご質問の、第二段階みたいな、二番目の質問がきてまして、イブキさんですね、先ほどのイブキさんと同じ方、「革命は本気で成功すると考えていましたか」で、次の段階で、「また、信じられなくなったとすれば、いつの時点のことでしょうか」という質問が来てるんですね。つまりこれはある種の糾弾ですね。過去の革命家なんですか、と。じゃあ今その志はどうしたんですか、という質問だと思うんですね。「また信じられなくなったとすれば、いつの時点のことでしょうか」と、こういう風に自明のこととしてこうい

(注135) プロレタリア文化大革命、1966年から76年にかけ、中華人民共和国における、社会主義段階での階級闘争の継続を掲げた政治・思想・文化闘争。毛沢東による権力闘争とも。

(注136) ハンガリー事件やスターリン批判後のソ連を、「腐敗した社会主义」と言ったり「もはや社会帝国主義」と呼んだりしたが、社会主义革命後の共産主義建設のために第二の革命が必要という考え方があり、文化大革命をそうしたものと見る考え方があった。

(注137) 選挙などの民主的手続きではなく、武力によって社会変革を成し遂げようという考え方。

う質問がきいていますので、やっぱり4人の方にお答えいただければと思いますけど。

**雪野** 信じられなくなつたっていうのはちょっと違いますね。ただ、昔風の、計画経済<sup>(注138)</sup>ですとか、そういう、まあこれは考

えてみれば当たり前のことなんですけれども、百何十年前に論理的に推論して出た、これから世の中はこう変わるという設計図がですね、その通りに実現するはずがないのであって。

ただ、実際のソ連での出来事<sup>(注139)</sup>ですか、中国の出来事<sup>(注140)</sup>、そういうものを経て、決定的には1990年ぐらいですね。あの時代、時点で私は、やはりこれまで考えていた社会発展の図式というか、大分、やっぱり違うだろうな、と思いました。

ただ、だからと言って、世の中のなかでそういうよりよい社会を目指す運動というものが無くなってしまって、失速してしまうとは全然考えなかつたし、実際形を変えてですね、ずっと続けて行く、続いて行くだろうと。そういうものに、私自身も目を向けなきゃいけないし、日本の中で私の関与できる範囲で活動していくこうという気持ちです。仕事の面でもそうですし、こういった活動の面でもそうですね。ずっと続けてきています。そういう意味では別に転向しているわけじゃないです。

当時はさっき言ったように武装闘争などに熱い心がふつふつと滾るものを感じていたんですけども、同じような意味ですね、これからもそういうことのためにやっていくことは思っています。それは全然変わってないです。

**前澤** 理論的には、やっぱりあの、マルクス主義は、描いてる将来図っていうのは今でもそうなんじゃないかなとは思っています。

(注138) 資本主義の自由経済に対し、社会主義は計画経済で経済発展を実現する、と言われた。

(注139) 1991年のソ連崩壊など。

(注140) 1989年の天安門事件など。



**植垣** そうですね、私の場合、率直に言えば、あれですよ、連赤で敗北して逮捕された時に、はて、あれだけのことでかいことやっちまって、さてこれから自分たち、自分はどんな生き方が可能なのかというところから僕は始まってるわけで。だからその、もう自分自身が生きてくためにどうしたらいいか、というね。自分が生きていくということがどういうかたちで可能なのか、というところから出発して。結局連赤問題が起こったから、左翼運動は駄目だとか何とか。むしろ連赤問題、まあ赤軍派の闘いから含めて、当時の全共闘運動も含めて、そういう闘いの中で一体何が見えたのか。で、連赤問題というかたちで出てきた問題は何なのかなと、というところは、僕自身この問題に挑戦していくことによって生きていくしかないな、というところが、僕の獄中27年の歩みでした。

だから、信じられなくなったとかそういうことじゃなくて、問題は何んのかと。要するに、一方ではソ連の崩壊(注141) や中国の問題とか、色々あるわけですが、そういう問題、ロシア革命以降の問題の根底には何があるのか。20世紀は革命の時代と言われていますが、同時に虐殺の歴史でもあるわけで、そういう世界が一体何であるのか。というところが、僕の今に至る歩みです。だからその、信じる、信じないじゃなくて、問題をもっとどんどん追究していかなきゃならないというところが、まあ、今の自分ですね。はい。

勿論、当然、これから色々な運動にも関わっていく、どういうかたちで関わっていくことになるかはわからないけど。まあ一応、レッテル貼られちゃってますからね、元過激派って。まあそんなこともありますから、当然、これからも、今の日本、あるいは世界の現実に対応していくかなきゃいけないと思ってます、はい。

**青砥** みんな真面目だね。もう年寄りを挑発するなよって言いたいよ。

みんな動機は善意からだった

**司会（椎野）** こちらサイドから、何かまた別の質問ありますか？

あの、ウダさんは、役作りをするにあたって、吉野雅邦に手紙を書いて、面接に行きたいっていうふうに仰ったんですよね。そのエピソードちょっと教えていただけますか？

**ウダ** えーとですね、僕は高校時代ぐらいに、すごく、この60年代と

(注141) ソ連型「社会主义」が、経済的・社会的に行き詰まり、東欧の崩壊に続き1991年12月21日存在を停止した。



か70年代とか連合赤軍のことについて興味があったんですね、元々。というのは、僕、つまらなくて高校時代が。何か退屈で。お祭り騒ぎみたいな時代が楽しそうだなと思ってて。というところにすごく興味があって。で、役者

やって、そういう役が回ってきた時に、要は、そういう馬鹿な高校時代の興味では、やっぱり自分が実際演じてみようと思うと、全然わからんんですね。

その、まず若松監督のオーディションで読んだのが、森さんと永田さんと坂口さんの3人のシーンなんんですけど。森さんと永田さんが山を下りていて、坂口さんが会いに行って別れを告げられるんですよ、永田さんに。「共産主義的観点(注142) から見て、私はあなたと別れた方がいいと思うの」っていう風に、ト書き、台本では書かれていて。そういう風に、恋愛をそういう言葉で話すシチュエーションというか。その、そこにすごく、全体の台本自体が、裁判の記録とかそういった、どなたかが書かれた言葉を基本的にはベースにしていたので。心がわからないんですね、役者としてすごく。そこに距離を感じて、何かあったら変わらぬかなと思って、吉野さんに手紙を出して、会ってくませんかっていうことを書いたんですけれども。

そうですね、まあそれが動機で書かせてもらって、実際にはお会いすることはできなかったんですが。えーとですね……はい…そうですね、でも何か、こう……すごく怖くなっただけ……あれからすごく怖くなっただけっていうのが、何かあるんですけど。何て言うのかな……さっきもずっとこの話を、ずっと前からしてたんですけど、その動機は善意だ、っていう部分。僕もすごく、動機は善意だっていうのはわかって、で、吉野さん自身の手紙を読ませていただいても、動機は善意なんだなって、わかるんですけど。その怖さというか。だからこそ、何て言うのかな、何

(注142) 「共産主義化」を勝ち取ろうという観点から、というような意味。

か……動機は善意なんだけど、自分の中ではそれは本当に善意なのかなと思うところもあるし。

それで吉野さん自身も、僕の理解するところでは、まだ何か、全然解決していないんだと思うんですね。で、その解決してなさが——僕もすごく世の中を変えようとか思って役者をやってるつもりなんですけど——そこに、自分に突きつけられるというか、俺は本当に、これは善意なのか、とかいう問題とすごく、何だろう、いまだに吉野さんとのそのやりとりが、何回かですけど……えー、はい、突きつけられている感じがします。

**司会（金）** 今の話伺っていて思ったんですけども、ちょっと先ほども出ましたけども、所謂震災後のね、テレビドキュメンタリーって異様に善意なんですよね。気味悪いですよね、見ててね。何かちょっと異論を許さないような雰囲気があって。何か、健気な人々を、いかにも応援しているかのように見えながら、結局突き放している、みたいなことちょっと感じていますけども。今、善意という言葉で、そんなことを思いました。すみません。

**司会（椎野）** 今雨宮さんが何か言いかけました？

**雨宮** 「地獄への道は善意で敷き詰められている<sup>(注143)</sup>」という言葉を思い出しましたね。

あとやっぱり、善意とかじゃなきゃ、何だろうな、ある程度、被害者がある殺人とかおこらないというか。人間はそこまで強くないと思うので、悪意でそんな沢山の人を殺すとか、そういうことはなかなかない。その、十人を超えるという時点で、善意だと思います。で、私もすごく、善意というものを、連合赤軍事件から、勝手に書物とかから見ている身としてとっても感じていたので、今のお話はとても共感しました。

## 殉難者と生き残った人の境界線はなかった

**司会（椎野）** ええと、会場からの質問ですね。大泉さんからの質問で、「前澤さん、青砥さん、植垣さんに質問です。何故、総括対象にならなかつたのか？」

**司会（金）** ここに書いてありますよね。殉難した人と、生き残った人の境界線は何だったのか、という質問だと思うんですね。

**前澤** まあ、率直に言って、俺は体力があったからだと思います。俺、

(注143) よくマルクスの言葉として紹介される（資本論の中にあるらしい）が、それ以前から使われていた。

個人的には。要するに、牛馬のごとく使える人間だったという。僕個人は。

**植垣** まあ、率直に言えば、境界があつたかというと、残念ながらわかりませんね。多分、ないです。ないけども、例えばじゃあ別の言い方をしますと、あの山岳ベース、僕がいなかつたら維持できなかつたです。単純にそれだけです。要するに、僕が大槻さんとの関係の問題で総括要求されるんですが、その時はちょうど山小屋を作っている真っ最中で、僕はまあ正座までもしゃつたんですが、僕を縛つてしまつたら、そこで山小屋建設は頓挫するわけですね。そういう意味で、たまたま、僕抜きでの山岳ベースは維持できなかつたというのが多分、こうやって生き残ってしまった大きい理由だと思います。勿論、あの総括要求を担つたという点では、全くもって、殺す側の人間には変わりないですがね。はい。

**青砥** あの、総括要求というのはいきなりぱっと出てきて、そこで最後までいってしまうというようなものではなくて、何度もそういったのがあってだんだんと追いつめられていく、そういうケースが多かったんですが、そういう意味で、植垣もそうですが、私も何度もその総括要求の局面に立たされたことがあります。で、そこはまあ切り抜けたということですが。

えー、森さんと永田さんが総括要求を最後まであの形で貫徹する相手を何か基準をもって決めていた、という風には私はちょっと思えませんね。従つて私どもが、当然のごとく生還したという風には全然思つておりません。ただ、植垣は今言ったように、山の中での実践活動、植垣がいないと大変組織が困つたろうと。で、反面、いずれ、いつまでも山にいるわけではありませんので、私がいなくなれば東京に戻つて組織活動する時に大変不便であろうと。そういう風には思つておりました。

ただ、それはそんなふうに思つていたというだけの話であつて、そのことで、あの決定的な局面に私や植垣が立つことにはならなかつたとい



うことではありません。最後に植垣が言ったとおり、勿論我々は、それ以前に総括要求をされて亡くなってしまった方に対して、暴行を加えたり、そういったことをやっているわけですから、そういった意味では、十分、加担しているというか、加害者側に立っているわけですけれども。まあそういったことは……、まあ仮にね、そういったものを拒否すれば、それはそれで終わりだったでしょうけど。……まあ、要するに、当然のごとく生還したという風には、全く思っておりません。

**植垣** ちょっとその点で付けくわえさせてもらいたいんですが、実はね、亡くなった人も、暴力的な総括要求に加担しているわけですね。それでもだからと言って、加担したからといって、総括要求されない、と、そういう理由にはならない、ということです。

## 皆が善意だと思っていることが本当の悲劇を生む

**司会（椎野）** 予定時間をもう20分もオーバーしていまして、そろそろ最後なんですけれども、今日いらした中で、意外と若い人が多いなと思ったんですけどね、それは多分山本直樹さんのマンガを見て興味を得て来たのじゃないかなと推測しておりますし、山本さんにもっと喋ってほしいという意見があるに違いないとにらんでいるんですが。

**山本** 僕は主に今日は聞きにきたんで。

**司会（椎野）** 山本さん、あれを描いていてね、例えばこの人物は嫌いだとかこの人物は愛すべきだと、なんかそういう個人的な感情が湧いたっていうのはありますか。

**山本** あの、描いてるとやっぱり、全員にエピソードを持たせたくなるんですよ。まあ、グランドホテル形式じゃないけれど、やっぱりその方が、僕も、好み……物語の作りの好みとしてやっぱり、端っこに出る人も、実はこういうエピソードがあって、ここまで来て、みたいのが物語として楽しいなと思って作っているんですけどね。いや、自分で作ったキャラクターとは100%言えないけれど、やっぱり全部、いろいろなかたちであれ愛さずにはいられない感じになりますね。

**司会（椎野）** じゃあ、描かれた側で、これ、俺ちょっと違うっていうのありますか？ 恵那さんから。恵那さんていうのは、山本さんのマンガに描かれている名前が恵那さんなんですかね。

**雪野** いや、私あんまり描かれてないんで。その限りでは、まあそんなに違いは、違っているって思ったことはない。

**司会（椎野）** 前澤さんは何て名前ででてくるんですか。

**山本** 荒島。

**前澤** 荒島ですね。えー、僕も出演シーンは非常に少なくて、早岐の逃亡の部分で、ああ、これ違うなど。車に乗ってて、目の前で逃げられちゃうという風に描いてあったけど、目を離して、全然知らないところで逃げられただとか、細かいところは。

**山本** 前澤さん自体が逃げる時？

**前澤** いや、違う違う、早岐さん。

**前澤** まあ大したことじゃないんですけど。

**山本** 先に聞いたときやよかったですよね。こういうことがいっぱいあるんです。

**司会（椎野）** 結構たくさん出てくる植垣さんは。

**植垣** 岩木という役で、妙に主役みたいにやらせてもらっています。全然、違和感はないですね。まあ多分みんなもんだったろうなと。結構スケベにも描かれてるし。

**司会（椎野）** でもあのスケベ度は、みんなもんじゃないでしょう。

**植垣** いや、ちょっと待って。ちょっと。まあまあまあ、難しい話はやめましょう。ただあの、僕は、わりかし、あの、『実録連合赤軍』でもね、何か妙に冷静な男として描かれていて、みんなふうじゃなかつたんだけどなと思いながら。わりかしまあ、どこも私の場合はいい役やらせてもらって、どうもすいません。

**青砥** 私は、山本さんから、これはもう最初からフィクションですよと言われているので、あの……。まあこれは植垣のせいだと思うんですけど、ちょっとスケベに描かれすぎているなと思っているんですよ。そこだけが不満ですね。ちょっと違います。

**山本** 自己批判します。

**司会（椎野）** 金さんは何て名前で出てくるんでしたっけ？

**山本** 金さんはキムさん。

**司会（椎野）** 金さんはキムさん。ああ、じゃあ金さんから、この描かれ方っていうのは？

**司会（金）** いや、ワンシーンだけなんで。あの、若松さんの映画の時には、えらいイイ男が出て、何かすごいかっこいいバーで飲んでるんですよね。それで、何かこれ、あまりに似合わないじゃないかって若松さんに言ったら、うるさい、あいつにはギャラ払ってるんだって。ね、ウダさんはもらってないんでしょう？

**ウダ** ギャラですか。もらってますよ。

**司会（金）** もらってる？あの、ほとんど払ってないんで、お前の役には金払ったって言われたんですよ。で、まあ、山本さんの方はね。

**山本** 聞いたまま描いただけですから。

**司会（金）** だからバーの入り口がさ、あまりにそっくりなんだよ、びっくりした。

**山本** 偶然とは言え。いや、高円寺にあるバーはこんな感じかなぐらいの。

**司会（金）** その想像力にはちょっとびっくりしました。

**司会（椎野）** ロケハンで行ったんではなく？

**司会（金）** いや、もうないですから。

**山本** 何となく。ネットで探しても出てこないし。その時代の映像っていうのはネットでは出てこないですね、中々ね。その辺が悩みの種です。

**司会（椎野）** ええと、そろそろ時間なんですが、赤岩さん、最後に聞き逃していることとか質問し逃してますか？

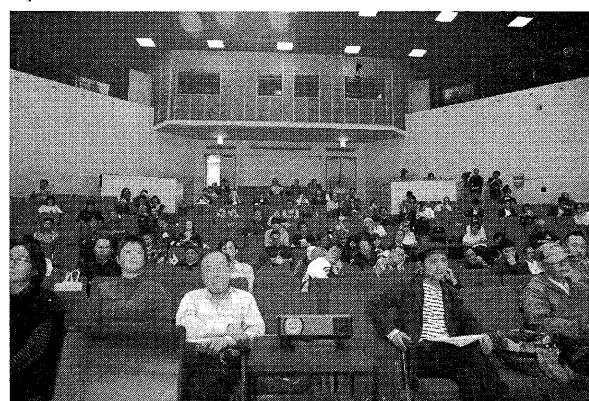
**赤岩** いえ、特にありません。

**司会（椎野）** すみません、せっかく質問いただいた方もいらっしゃるんですが、ちょっと時間の都合で割愛させていただきます。じゃあ最後に金さんどうぞ。

**司会（金）** 5時間、みなさんどうもありがとうございました。お疲れ様です。

連合赤軍から40年、正直な話、私たちにとっては、何て言うんですか、こういう舞台に立って話するような内容のことでは本来ないんですけども、やはり自分たちがそれを内面に抱えたまま、死んでいく、あるいは生きしていくっていうのはよくないだろうと思ってきました。要する

にマスコミの世界とか、そういう様々な世界で、ある意味では赤軍、あるいは連合赤軍というのは、何かもうとてつもなく悪いやつだってことで確定しちゃっているんですね。ある意味では、まあ、マスコミが作った像な



んですけども、私たちとしては、何というんですか、真実を伝えないと、その真実がどういう真実かという問題はありますけども、真実を伝えないと、同じことが繰り返されると思っているんですね。そう思って、『証言』という雑誌をずっと作り続けていますけども、拙い雑誌ではあるんですけども、当事者に話を聞いて、それをありのまま伝えて、本当に少ない読者でも、本当の実態を知っていたらと思いながら活動しています。

先ほど雨宮さんから、「地獄への道は善意で敷き詰められている」という言葉がありましたけれども、私もそれよく使うんですけども、要するに、善意の運動、皆が善意だと思っていることが、要するに、本当の悲劇を生むんだよと。ですから、自分たちの立ち位置を常に、疑問を思いながら、本当だろうかと考えながら生きていかないと、これから先、もっと社会的に、もっと迎合していく世の中が現れてくるんじゃないかなという不安も感じています。ある意味では、非常に苛烈な体験をした人たちに、今日ここに来ていただいたんですけども、足りないこともたくさんあると思いますが、ある意味で当事者の、本当の話を聞くことが、わずかであってもできてよかったですかなと思っています。

皆さん長い間ありがとうございました。

(拍手)

## 読者から

広い意味を持つ普遍的な作業に

2012/05/14 パトリシア・スタインホフ  
シンポジウムに参加出来なかつたことは残念でした。

NHK ニュースのリンクをメールでお知らせくださつてどうもありがとうございました。パネリストたちがおっしゃつたとおりだと思います。

最近、『証言連合赤軍』第9を受け取りました。どうもありがとうございました。内容はとても面白かったです。40年たつて、事件の意味や普遍性は若い人たちが分かるようになつているのでしょうか。全体像を残す会の作業は参加した人々の内面的なことよりもっと広い意味の作業になつていると思います。昨日のシンポジウムは次の『証言』第10になりますか？

私の日本への旅行は秋まで延期しました。お会いするのを楽しみにしています。

(編注：パトリシアさんは『死へのイデオロギー—日本赤軍派』著者、ハワイ大学教授)

続きのシンポジウムは？

2012/05/14 関直美  
雪野様

昨日はお疲れ様でした。早めに失礼しましたが盛況な様子、何よりでした。

南田草介詩集 ズボンをぬいだ風 1982年初版

原詩人社／2005年7月20日改定再版 街から舎

この中の『凍れる花たちのために』という詩を思い出してくださいましょくか。

細かく網羅されている文献リストに混ぜていただければいいかなと思います。

このシンポジウムの続きはどうなるでしょう、楽しみにしています。

今後もこのような催しをぜひ続けてください

2012/05/14

なるたる

13日のシンポ、参加させて頂きました。長時間、お疲れ様でした。

あまりメディアなどで取り上げられたのを見たことがなかつた前澤さんや青砥さんの発言はとても興味深かったです。

ただ、シンポの性格上致し方ないのかもしれません、基本的にゲストパネリストの方々との問答がメインで、個人的に一番興味を持っていた「当事者の方々が40年を獄中・獄外でどう過ごされてきたのか」については少し物足りなさが残りました。

もちろん個々人に語りにくいこともあろうかと思うのですが、皆さんがどう生きてきたのか、そして坂口さん・吉野さん・坂東さん？らはどう生きているのかなどなど……。

僕自身どう生きていけばいいのか迷いがあるので、自己啓発だと人生訓的なものは嫌いですが、そういった点に非常に興味があります。

わがままを並べて失礼しました。今後もこのような催しを是非続けていただければ、本当にうれしいです。頑張ってください。

(掲示板への投稿)

シンポジウム、DVDにしてくれませんか？

2012/05/18

T

こんにちは、以前『証言』を送つていただいたTと申します。今回のシンポジウムへのお誘い、ありがとうございました。私も関東方面に住んでいればぜひお話を伺いに行きたかったです。

参加された方々の感想をブログ等で拝見しましたが、とても興味深い内容だったようで、何を置いても行っておけばよかつたと思います。

私は世代的には70年生まれですので連合赤軍事件については後から本等で得た情報しか知りません。行った大学が当時下火だった学生運動がいまだ生き残つてゐるところだったり、学生時代(70年前後)からほんの数年前まで活動家(第4インター)

だった叔父の話を聞いたりと、もともと興味がある分野ではあったのですが、若松監督の映画にすごい衝撃を受け、興味を持っていろいろな本を読むことになり、今までの「よくわからん連中がよくわからんことをしてかして、拳銃に人まで殺した」程度にしか理解していなかった事件への評価が180度変わりました。

この事件について、より深く理解したいと思うようになり、様々な文献にあたるようになりました。そういった過程を経て『証言』を送っていただきました。

ただ、本を読んでも結局間接的にしか当時の雰囲気を知ることができません。そこで当時を体験した方々の生の声が聞きたいと思うようになりました。今回のシンポジウムはその意味で絶好の機会だったのですが……。

そこでお聞きしたいのですが、こういったシンポジウムのような催しについて、ネット上あるいはDVD等のメディアにより映像で公開するといったことはお考えではないでしょうか？

※編集部：公式カメラマンの馬込さんは当日スチール写真も担当して満足な映像が撮れなかったそうで、DVD制作については消極的です。

### 王子野戦病院闘争、学生さん達は憧れでした

2012/05/19

おうじ

先日13日のシンポジウムに参加させて頂きました。

仕事中なので少しだけと思っていたのですが、あまりに興味深い内容で最後まで参加させて頂きました。

私は小学校5～6年当時、東京都北区の王子野戦病院近くに在住していました。

王子野戦病院反対のデモ活動が活発な時期で、デモ活動がある度に見学に行っていました。

機動隊に追われ逃げ惑う学生さんと路地裏まで一緒に逃げ込んだ時、流血した学生さんを手当てる女学生の顔を今でも覚えています。

私は遠山さんだと思っています。

その女学生は王子駅近くの柳田公園でも見かけました。

当時の私にはデモ活動の学生さん達は憧れでした。

学生さん達の主義主張などは一切解りませんが、学生さん達は正義の為に戦っているとの感覚を小学生の私は持っていました。

デモ隊がよく歌っていたインターナショナルの歌は今でも頭に残っています。

最近になって、あの学生運動はどのような思想や背景があったのかと知りたくなり、ネットで60年安保から連赤までのいろいろな情報を得る過程で「全体像を残す会」の存在を知り今回参加させて頂きました。

今、社会情勢や時代の変化がこのような会を必要としていると思います。

今後のご活動頑張ってください。

(掲示板への投稿)

## 『証言』9号正誤表

P26 「場合によっては車の中に火炎瓶を投げて、」について、読者より「1977年4月16日のこととすれば『火炎瓶』云々は事実誤認」との指摘がありました。

当会黒宮の記録によれば、以下のようになっています。

「革マル派社学こと T.F(政治組織局員 36) S.S(こだま印刷庶務課長 35) W.I(金大生 23) O.I(岐阜大生 24) 21:15 頃浦和市辻の路上で車で移動中を革労協にトラック 2台で挟み撃ちにされ、つるはし、大型ハンマ、バールなどで襲撃され、ガソリンをかけて焼き討ちされ焼死」

「火炎瓶」は、黒宮から聞いた雪野の記憶違いでした。訂正します。

P35、(同、目次ページ) 三上 修 → 三上 治

## 編集後記

『証言』の編集に係わるのは今回が初めてながら、いきなりメインで作業をすることになった。昔取った杵柄で、脚注をページ下に挿入するなど、いくつか新しい試みを導入してみたが、読者諸氏にはいかがだっただろうか。『証言』の読者は幅広い世代に亘ると思われる所以、可能な限り全読者にとって読みやすい誌面を追求していきたいと思っている。ぜひ、忌憚のない意見を寄せていただけたら幸いである。なお、新しい編集スタッフに、私以外にももう一人、佐藤喜則君という大変意欲的な青年が参加し、作業に貢献してくれた。雪野氏・黒宮氏共々、今後、『証言』の発刊ペースを上げることができるように、頑張る所存である。ぜひ期待して欲しい。

細谷滝音

## 『証言』 バックナンバーの紹介

### 1 大菩薩への道—八木健彦赤軍派を語る

赤軍派随一の理論家が、赤軍派の形成から大菩薩事件にいたる過程を明らかにする。インタビュアーは三戸部貴士など。1988年1月採録。  
書評 加藤倫教『連合赤軍少年A』……端正で剛直な「兵士」の証言（雪野建作）

### 2 彼らはいかに生きたか—連合赤軍殉難者追悼の会の記録

事件から31年を経て、殉難者14人の友人、同志、肉親たちが、亡くなつた人たちの夢と希望、在りし日の姿を語る。2003年2月収録。

1987年の「17回忌合同法要」の記録も収録。

書評 大江健三郎『河馬に囁まれる』……不思議な勇気に満ち溢れた書（高橋檀）

### 3 獄中の指導者—塩見孝也の証言

どこにあの悲劇の原因があったのか。獄中でかいま見た「深閑の森」と、退路を絶たれた森恒夫への想いを、当時の赤軍派議長が語る。インタビュアーは三戸部貴士・張間隆蔵など。1990年3月採録。

書評 塩見孝也『赤軍派始末記』……疾風怒濤の時代の魅力ある運動史（黒宮雪彦）

### 4 毛沢東派の潮流—豊浦清の証言

60～70年代の学生運動の中でブントの著名な活動家として活躍した豊浦氏が、毛沢東派の形成過程と、革命左派に連なる人脈との交渉を語る。インタビュアーは、金廣志、植垣康博など。2004年7月採録。  
書評 塩見孝也『監獄記』……塩見孝也に成熟は訪れたのか？（椎野礼仁）

### 5 25年目に跡地を巡る

1997年5月に行った連合赤軍の「跡地を巡る旅」の記録。2日間にわたる旅の記録を参加者12人がつづり、1998年3月に発行された。  
書評 円地文子『食卓のない家』……食卓を解体された家族が戦った日本とは？（郡司五朗）

### 6 東大闘争を突き抜けた先に—川島宏の証言

67年から澎湃とまきおこった闘争の中で、日大と東大の大学闘争は大きな影響を及ぼした。東大闘争を率いた川島宏氏は、その後赤軍派に身を投じる。東大闘争にとっても貴重な証言となった。2005年6～10月採録。

書評 桐山襲『スターバト・マーテル』……再生への願いを込めた鎮魂曲（雪野建作）

### 7 革命左派の成立—雪野建作の証言

赤軍派に比べて、革命左派に関する文献は少なく、また、機関紙等の史料も公刊されていないため、革命左派の出自と活動の詳細は知られていない。この空白を埋める貴重な証言である。2005年11月～翌年2月採録。

大槻節子『優しさをください』への「断章」……（雪野建作）

### 8 棺を覆いて—永田洋子を送る

連合赤軍の指導者永田洋子は、40年に及ぶ病苦の日をすごしたのち、2011年2月5日に獄死した。「残す会」は、東日本大震災の余震の続く3月13日、永田洋子を送る会を開催した。この会での発言を全て収録した。

### 9 四十周年 殉難者追悼の会

2012年は連合赤軍事件からちょうど四十周年に当たる。殉難者への追悼の意を表すべく、1月31日に追悼の会が行われた。その出席者および賛同者達の追悼の言葉を収録した。

バックナンバーをご希望の方は、ホームページからお申し込み下さい。皓星社へ電話・FAXで直接の注文もできます。AMAZONでは7号以後が購入でき、以下の常備書店では全号購入できます。

#### ・模索舎

東京都新宿区新宿2-4-9 TEL.03-3352-3557

#### ・ロードス書房

兵庫県神戸市中央区雲井通5-3-1 サンパル2F奥 TEL.078-261-0250

#### ・古書赤いドリル

東京都世田谷区代沢5-33-5-1F TEL.090-2528-7949

編集

連合赤軍事件の全体像を残す会

連絡先

〒 242-0028 神奈川県大和市桜森 2-25-14-101

黒宮 雪彦

TEL. 046-262-1858

ホームページ

<http://www.renseki.net/>

#### 購読お申込み方法

購読のお申し込みは、郵便振替でお願いいたします。

郵便振替 00250-5-130190 全体像を残す会

1号 定価 1,000 円 +税 (送料サービス)

証言 連合赤軍 10

——浅間山荘四十周年シンポジウム——

2012年8月15日発行

編集 連合赤軍事件の全体像を残す会

発行 株式会社皓星社

〒 166-0004 東京都杉並区阿佐ヶ谷南 1-14-5

TEL. 03-5306-2088

FAX. 03-5306-4125

<http://www.libro-koseisha.co.jp/>

©2012

ISBN 978-4-7744-0474-5



9784774404745



1920095010007

ISBN978-4-7744-0474-5

C0095 ¥1000E

1920095010007

株式会社 皓星社 1,000円+税